

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
34図-20	(25.5)	—	b 1.1 c 1.0 d 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：淡褐色（一部 橙褐色）	上から二段目 に円孔。 穿孔後指撫で。 7.9×(7.9)	1A 0.5/3.2 2A 0.5/3.1 右回り布横撫で	縦刷毛 8本/2cm 右回りに施す。	斜刷毛へ方向 9本/2cm △一部指撫で と布押え	残率70%。 2cm幅の粘土紐に による巻き上げ。
34図-21	(12.8)	底13.4	底1.8	胎：少量。パミス 角岩礫 焼：良好・堅緻 色：暗褐色	—	—	縦刷毛 8本/1.8cm 右回りに施す。	指撫で △斜刷毛へ方 向 12本/2.4cm	残率60%。 基部は右回りに接 合。
34図-22	13.8	底13.3	底1.8	胎：微量。酸化鉄 粒・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 12本/2.2cm	横布撫で △斜刷毛へ方 向	残率60%。
34図-23	(29.6)	頸(14.5)	c 1.4 d 1.1 e 1.0	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：普通 色：淡褐色	上から二段目 に円孔。 穿孔後指撫で。 7.6×(7.6)	頸A 0.5/2.3 3B 0.5/2.2 4A 0.5/2.3 右回り布横撫で	縦刷毛 9本/2cm	指撫で←方向	残率40%。 朝顔形。
35図-24	(36.0)	口36.6 頸13.3	口1.1 a 1.1 b 1.2 c 1.0 d 1.0	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫 焼：良好 色：暗褐色	上から四段目 に円孔。 穿孔後指撫で。	口A 0.7/2.8 頸B' 0.3/3.0 4B' 0.5/1.9 右回り布横撫で	縦刷毛 11本/2.4cm △口縁部右回 り布横撫で	口縁部・斜刷 毛へ方向 10本/2.1cm △指撫でへ方 向 頸部・右傾斜 刷毛 7本/1.6cm 円筒部・布撫 で 口唇部・右回 り布横撫で	残率70%。 残存部で四段階が 確認出来る。 朝顔形。
35図-25	(10.0)	口(35.1)	口1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒 焼：良好・堅緻 色：淡黄褐色（一 部黒褐色）	—	—	縦刷毛 9本/2.1cm 右回りに施す。 △口縁部右回 り布横撫で	横刷毛←方向 8本/1.3cm △口縁部横撫 で	残率50%。 朝顔形。
35図-26	(24.5)	頸(12.1)	a 0.2 b 1.2 c 1.2 d 0.9	胎：やや多い。パ ミス・角岩礫・晶 石・珪酸体 焼：普通 色：橙褐色）	—	口B 0.6/2.7 頸A 0.7/3.2 4B 0.7/2.5 右回り布横撫で	縦刷毛 15本/2.1cm	口縁部・斜刷 毛へ方向 9本/1.4cm 頸部・刷毛調 整後、布撫で	残率40%。 朝顔形。 内・外面とも摩滅 がはげしい。
35図-27	(11.1)	頸(12.2)	1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 9本/2cm	頸部・横刷毛 5本/1cm 円筒部・右傾 斜布撫で	破片。 朝顔形。
35図-28	(14.5)	—	c 1.2 d 1.3	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：良好 色：赤褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	A 0.5/2.7 右回り布横撫で	縦刷毛 10本/2cm	右傾斜布撫で 凸帶部分は横 方向の撫で	破片。 朝顔形。
35図-29	(9.1)	—	1.0 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：淡橙褐色	—	口A 0.5/2.9 頸A 0.6/2.7	縦刷毛 10本/2cm	頸部上位・横 刷毛 5本/1cm 頸部・指撫で	破片。 朝顔形。
35図-30	(7.2)	口(25.2)	口1.0 1.2	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：淡橙褐色	—	—	縦刷毛 9本/2cm △布横撫で	右傾斜刷毛 9本/2cm △布横撫で	破片。

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
35図-31	(21.0)	—	口0.8 a 1.1 b 0.9	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 晶石・珪酸体 焼：良好 色：赤褐色	—	A 0.6／3.0	縦刷毛 10本／2cm ⇒口縁部横撫 で	右傾斜刷毛・ 左傾斜刷毛 9本／2cm ⇒口縁部横撫 で	破片。
36図-32	(7.2)	口(26.4)	口0.7	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫 焼：良好・堅緻 色：暗灰色	—	—	縦刷毛 15本／2cm ⇒右回り横撫 で	右傾斜刷毛 12本／2cm ⇒横刷毛⇒横 撫で	破片。 口唇部は横撫で。 撫でにより凹状を 呈し、先端が尖る。 須惠質。
36図-33	(16.8)	口(28.0)	口0.7 a 1.0	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫 焼：良好 色：橙褐色（一部 黒灰色）	凸帶下1.0cm で円孔上端。	A' 0.2／2.3	縦刷毛 10本／2cm ⇒口縁部横撫 で	右傾斜刷毛 10本／2cm ⇒縦指撫で ⇒口縁部横撫 で	破片。
36図-34	(24.0)	—	底2.4 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：赤褐色	—	A 0.7／2.5	縦刷毛 9本／2cm	右傾斜指撫で	破片。

#### 人物埴輪（第37図-35、図版48-1）

女子人物埴輪の頭部である。頸部以下および頭髪を欠損している。残存高24.4cm、顔部長15cm、顔部幅11.5cmを測り、卵形の顔立ちである。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫等を少量含み、珪酸体の量は僅かである。焼成は非常に良好で堅緻である。暗褐色を呈し、顔面には朱彩が施されている。髪は中央部付近しか残っていないが、前後に撥状に開く潰し島田髪を結っていたのであろう。中央結び目として、粘土紐をリボン結び様に撫でつけている。耳は、幅0.8cmの粘土輪を貼付したのち、孔が穿たれている。孔中から後頭部へ向けて幅0.7cm、長さ約2.5cmの粘土紐が3本貼り付けられ、耳玉を表現したものと思われる。その上に、径3cm、幅0.7cmの耳環が貼付されている。目はやや上り気味の弓形を呈し、刀子で切り抜かれているが、長さ5.1cmと長めで、ほとんど顔幅いっぱいとなっている。また、上下瞼の周縁は脹らみをもたせており、特に上瞼の縁はリアルである。口も刀子で横長に切り抜かれ、長さ4.4cmを測る。目も口も大きくはっきりとしている。眉と鼻は粘土を貼付し、鼻孔は刀子先で、縦長にあけられている。鼻はやや鷺鼻である。朱彩は、眉・鼻・下瞼から耳にかけての計三ヵ所に施されている。

胴部の成形は、肩部に接合痕のあることから、5号窯例の様に、輪積みした粘土紐を、頸部を除いて、前後を貼り合わせた可能性が高い。頭部は巻き上げてのち、頭頂部で絞り気味に前後を押える。その結果、完全に塞がれず、橢円形の孔が開いた状態になる。この孔を、粘土板で塞いだのち髪の粘土板を被せている。顔部には、粘土を貼り付け、入念な撫でを施し、各部位を形作っている。

外面は刷毛調整10本／2cm幅、内面は、頸部・頭部とも丁寧な撫で調整を行い、粘土紐の痕跡は全く残っていない。

#### 人物埴輪（第37図-36、図版48-2）

武人埴輪の頭部であり、頸部以下および衝角付冑、美豆良の一部を欠損している。残存高19.5cm、顔長12cm、顔幅11.2cmを側る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫等をやや多く含み、珪酸体の量はごく僅かである。焼成は非常に良好で堅緻である。赤褐色を呈し、顔面には朱彩が施されている。

胄は、衝角部の両側と、腰巻板に各々二段の丸鉢を巡らせており、衝角部の下には、豊眉庇が表現されている。鎧は欠損しているが、鎧下に下げ美豆良が貼付されている。下半分を欠損しており長さは不明である。目は刀子で切り抜かれ、目尻の両端が丸味をもつ扁平な橢円形を呈し、長さ4.5cmと長めである。口も横方向に刀子で切り抜かれている。眉と鼻は、粘土を貼り付け、鼻孔は刀子先で、縦長にあけられている。顔面の朱彩は、眉と左右の頬に施されている。

成形は巻き上げによると思われ、頭頂部で絞り気味にし、左右を押し合させて塞いでいる。その後、顔面に粘土を貼りつけ入念な撫でを施し、各部位を形作っている。外面は刷毛調整9本／2cm幅ののち、美豆良→胄の順に装着している。内面調整は入念な撫でである。

#### 人物埴輪（第38図—37）

男子人物埴輪頭部の破片であり、顔の上下および左側をほとんど欠いている。残存高18.2cm、推定顔幅10.8cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫等を少量含み、珪酸体の量はごく僅かである。焼成は良好で堅緻である。橙褐色を呈し、顔面は朱彩が施されている。

残存する綴部分から胄を装着した武人埴輪と思われる。綴の下には、美豆良の上部が、僅かに認められる。

目は左右とも上瞼を、口は下唇を欠くが、いずれも刀子で切り抜かれている。目は推定長4.5cmを測り、他の人物と同様に長めだったと思われる。鼻は粘土を貼り付けており、鼻すじが通っているが、鼻孔の表現は無い。朱彩は、鼻から綴にかけて施されている。

巻き上げ成形であり、顔面にはさらに粘土を貼りつけて入念な撫でを施している、外面は刷毛調整10本／2cm幅ののち美豆良→綴の順に装着している。

#### 馬形埴輪（第38図—38、図版51—1）

頸部から頭部にかけての破片である。残存長31.2cm、残存高31cmを測る。胎土は、パミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を僅かに含む。焼成は非常に良好で、堅緻である。色調は橙褐色を呈する。

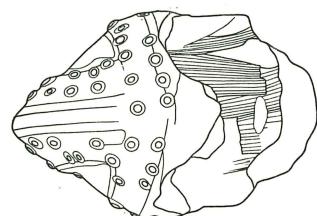
たて髪は僅かに残り、12cmほどに切り整えられている。面繫は、幅2.5cmの粘土紐を貼付して表わし、辻金具には、1辺約2cmの方形粘土板を十文字形に配置している。面繫の後に、引手および手綱が貼付され、幅1.5～2cmの粘土紐で表現されている。

成形は、頸部に粘土帶を積みあげてのち、両側に粘土板を貼付している。面繫から先を欠くため他例のように、口先まで筒状をなしていたかどうかは不明である。

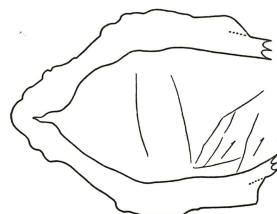
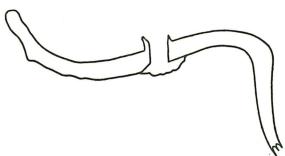
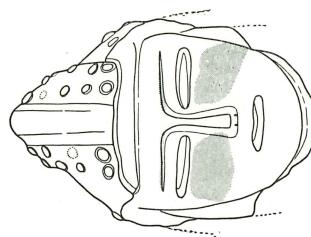
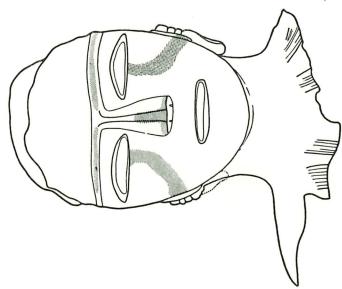
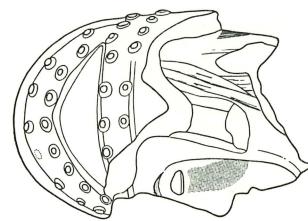
35



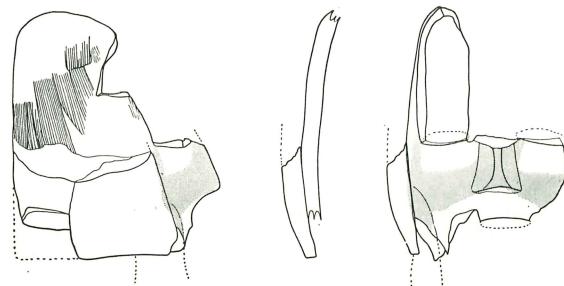
36



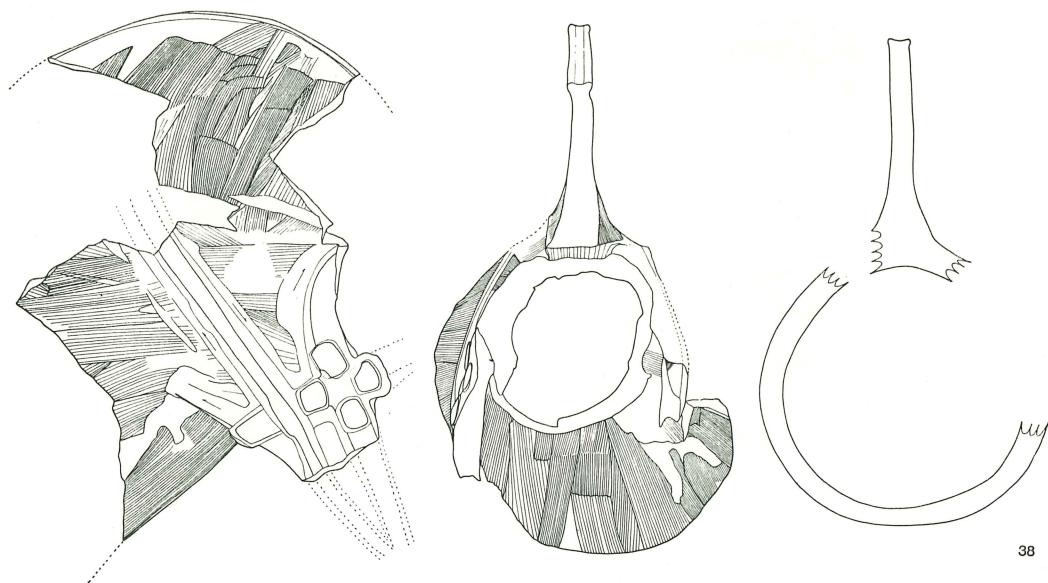
10cm  
0



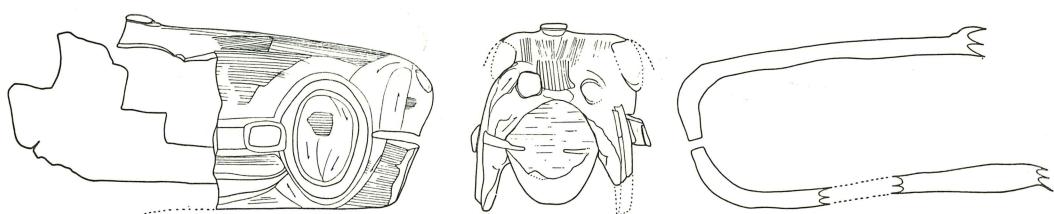
第37図 1号～5号窯跡灰原出土遺物 (7)



37



38



39

0 10cm

第38図 1号～5号窯跡灰原出土遺物 (8)

外面調整は縦刷毛10本／2cm幅を施したのち、撫でを行い、内面は、撫で調整を施している。

#### 馬形埴輪（第38図—39、図版50—1）

頭部のみであり、残存長28.2cm、残存高11.8cmを測る。胎土は、パミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を僅かに含む。焼成は非常に良好で堅緻である。色調は橙褐色を呈する。

面繫および引手が僅かに残り、素環の鏡板に連結している。辻金具は方形粘土板で表わし、額に1個（十文字に配置されていたと思われる）、頬に1個の計2個が残存している。目と鼻は、外側から穿孔されている。口は刀子で切り込まれているが、左右とも鏡板から正面端部まであり、正面中央は切り込んでいない。

成形は、頸部に粘土帯を積み上げて筒状の顔部を作り、正面は粘土板を貼付して、板を押しあて平坦化している。

外面は刷毛調整11本／2cm幅を施したのち、頭絡部分には撫でを行い、内面には、入念な指撫でを施している。

#### 馬形埴輪（第39図—40、図版49—2）

胸繫と馬鐸の表現された胸部破片である。残存長24cm、残存高32cmを測る。胎土は、パミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は良好であり、橙褐色を呈する。

胸中央部に穿孔が施され、胸繫は幅約3cmの粘土紐を貼付している。馬鐸は3個の配置を確認できるが、装着状態にあるものは2個であった。馬鐸の大きさは、左側で長さ10.1cm・上幅4.2cm・下幅7.1cm、右側で長さ10.8cm・上幅4.5cm・下幅7.4cmを測り、いずれも下端を波状に成形している。表面は、輪郭に沿って浅い撫でによる沈線が巡り、中央部には×印の沈線が走っている。左右の馬鐸とも舌が貼付され、左側は長さ3.4cm・幅1.2cm、右側は長さ4cm・幅1.4cmを測る。粘土紐を縦位置に貼り、その上下端を指で押圧して撫でつけていたため、中央が盛り上った形状をなす。なお、表面には朱彩が施されていた可能性がある。

馬鐸の装着にあたっては、胸部に縦刷毛9本／2cm幅を施したのち、装着部に部分的な撫で調整を行う。その上に舌を貼付し、さらに鐸を被せて周縁部に、入念な撫で調整を施す。鐸の内面は、左側が撫で調整、右側は板の押圧痕が明瞭に残る。これは粘土板の段階で押圧したためと考えられ、鐸に成形後周りを指撫で調整している。

胸部外面は縦刷毛9本／2cm幅が施され内面は指撫で調整である。

#### 馬形埴輪（図版50—2）

胸部および右脚部分の破片であり、面繫と馬鐸の剥落痕が残る。この遺物は9号窯と接合関係にある。残存長21.5cm、残存高36cmを測る。胎土は、パミス・角岩礫等の砂粒を少量含み、珪酸体は認められない。焼成は非常に良好で、堅緻である。暗褐色を呈する。

胸部中央に、推定径5.8cmを測る孔が穿たれている。胸繫は幅3.5cmほどの粘土紐を貼付しているが、僅かに脹らみをもつ程度である。馬鐸は剥落しているが、痕跡からみると長さ14cm、幅8cmを測り、舌も貼付されていたようである。第39図—40に比べ、大形の馬鐸である。

外面は刷毛調整10本／2cm幅が施され、内面は入念な撫で調整である。

### 馬形埴輪（図版50—3）

右前脚部の破片であり、胸繫の一部と杏葉が1個残存している。残存長22.6cm、残存幅15cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は非常に良好で堅緻であり、灰橙色を呈する。

杏葉は、7.2cm×6.4cmの橢円形を呈する。縁金として幅0.8cmの粘土紐を貼付し、その上には粘土粒を配して鋸止めを表現している。

### 馬形埴輪（図版51—2）

馬頭部破片であり、たて髪周辺が残存している。残存長30.5cm、残存高26.5cmを測る。胎土は、パミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は非常に良好で堅緻であり、橙褐色を呈する。

たて髪は約7cmに切り整えられている。面繫と手綱が僅かに残り、いずれも幅2.5cmの粘土紐を貼り付けて表現している。耳は差し込み式であろう。頸部の成形は、頂部で粘土板を合わせておりたて髪はその合わせ目にそって、粘土板を貼付している。

外面は、刷毛調整9本／2cm幅・10本／2cm幅を施し、たて髪部分から頸部への順である。頭絡装着部分には撫でが施されている。内面は、入念な撫でつけ調整が行われている。

### 動物形埴輪（第39図—41）

小動物の脚部と思われる。残存高13.6cm、残存長19.2cm、残存する脚部の外径7.5cm、内径4.5cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫等をやや多く含み珪酸体の量はごく僅かである。焼成は良好で堅緻である。赤橙褐色を呈し、器内断面は一部、黒褐色を呈する。

胸部の成形は幅2cmの粘土紐を巻き上げており、脚は別に作って接合されている。

外面は縦刷毛10本／2cm幅を施し、脚接合部分はその上を指撫でしている。内面は、撫で調整を行っているが、脚接合部分を除いては雑であり粘土紐接合痕が明瞭に残る。

### 動物形埴輪（図版51—3）

犬あるいは猪と思われる動物形埴輪であり、上顎と下顎部分が残存する。接合はしていないが、胎土、焼成とも酷似しており、同一個体と考えられる。復元残存長10.2cm、復元幅5.2cm～7.2cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は良好であり、橙褐色を呈する。

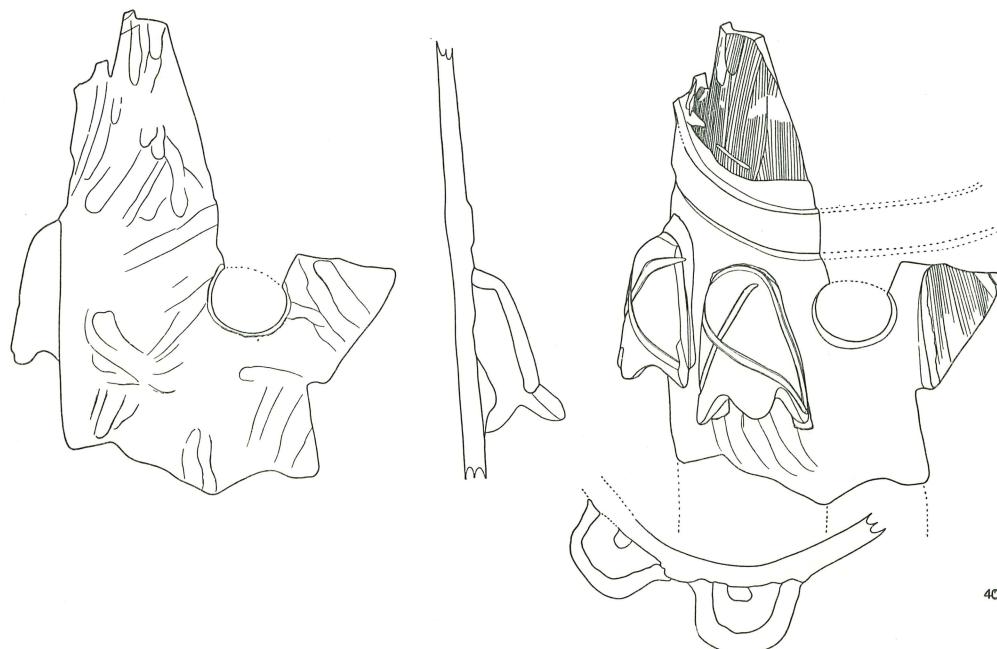
鼻孔は、外側からあけられており、口は正面から両頬へむけて切り込まれている。

外面は刷毛調整、内面は撫で調整が施されている。

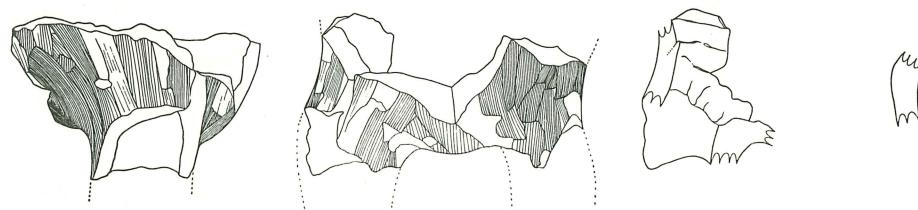
### 動物形埴輪（図版50—4）

種類は不明であるが、動物の臀部である。馬と比べ小形品であり、犬あるいは猪かと思われる。この埴輪は9号窯と接合関係にある。残存長20.5cm、残存高21.5cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は良好であり、暗褐色を呈する。外面の尻尾の差し込み孔と内面の穿孔部に吸炭が認められる。

粘土帶を形に合わせて接合しており、外面は刷毛調整10本／2cm幅のうち、部分的な撫でを施している。内面は入念な撫で調整である。



40



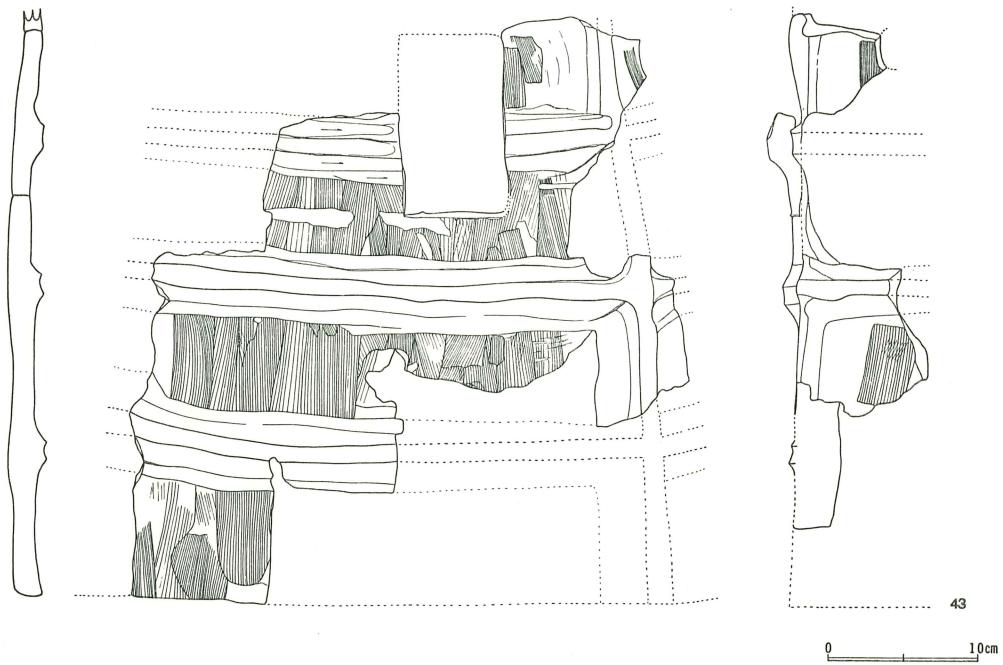
41



42

0 1 10 cm

第39図 1号～5号窯跡灰原出土遺物 (9)



第40図 1号～5号窯跡灰原出土遺物 (10)

#### 家形埴輪（第39図—42）

屋根部の破片である。残存長28cm、残存高30.8cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫等を少量含み、珪酸体の量はごく僅かである。焼成は良好で堅緻である。橙褐色を呈する。

四柱造りの家形埴輪の屋根と考えられ、軒部分は凸帯を貼付して表わし、窓の隅部が僅かに残っている。接合は出来なかったが、胎土・焼成からみても、43と同一個体であろう。

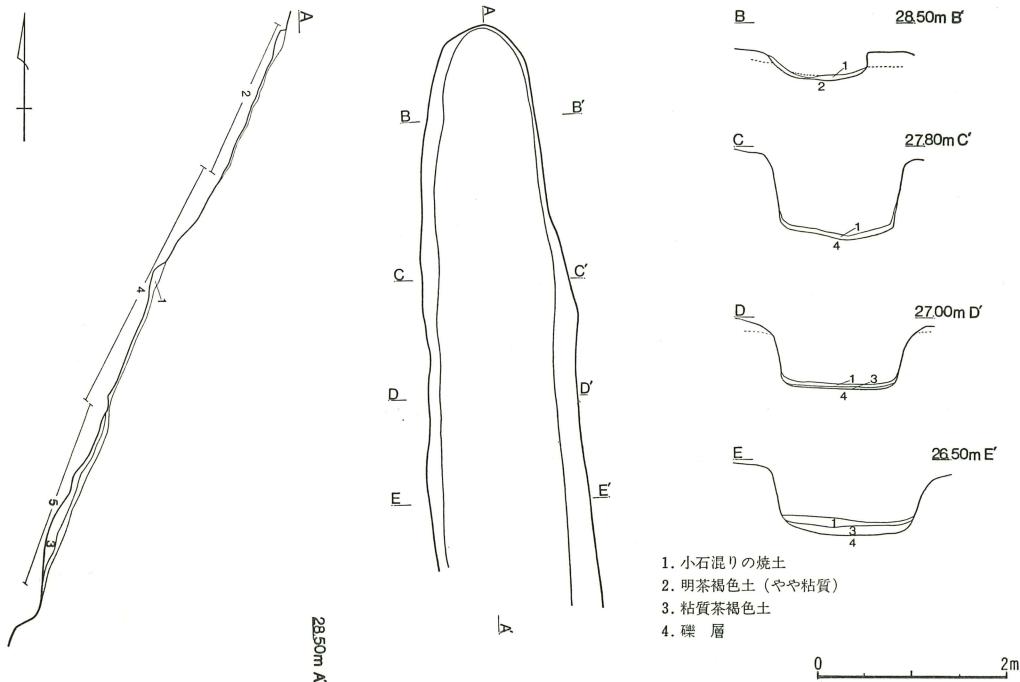
外面は縦刷毛9本／2cm幅を施し、さらに山形文が配されている。まず→方向に、幅0.7cmの撫でによる沈線が残存部で二段確認できる。この各段間に山形を描いており、横線と同様の沈線で↖↖↖↖の順に描かれている。内面は横方向へ指撫でが施されている。

#### 家形埴輪（第40図—43、図版49—1）

四柱造り家形埴輪の側回りの破片であり、屋根および、平、妻部分のうちを欠損する。平部残存長24cm、残存部高40cm、妻部残存長19cm、残存高26.8cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫等を少量含み、珪酸体の量はごく僅かである。焼成は良好であり堅緻である。色調は橙褐色を呈する。屋根部は42と考えられる。。

幅2.6～3cmの粘土帯を積み上げており、外面は縦刷毛9本／2cm幅を施してのち、凸帯を貼付している。凸帯は、最初に四隅に縦位置に貼り付けてから、横方向に3本の凸帯貼り付けを行っている。凸帯は→方向に横撫でされ、上・下辺とも2度撫でられている。横位置の凸帯は、側辺がやや凹み、はっきりした稜をもつて対し、縦位置の凸帯は断面△形を呈し、丸味をもっている。妻側に窓があり、残存部から推して円形と思われる。平側には右寄りの第三凸带上に窓？が開けられている。長方形を呈し、11.2cm×7cmを測る。

内面は、第一段に横方向の撫で、第二段以上に↖方向の撫で調整を施している。



第41図 7号窯跡

## (7) 7号窯跡(第41図)

本窯跡群から検出された埴輪窯跡の中で唯1基、斜面に単独で構築されたものである。須恵器窯跡である6号、8号窯跡の中間に位置し、両者に比してやや規模が小さくなる。

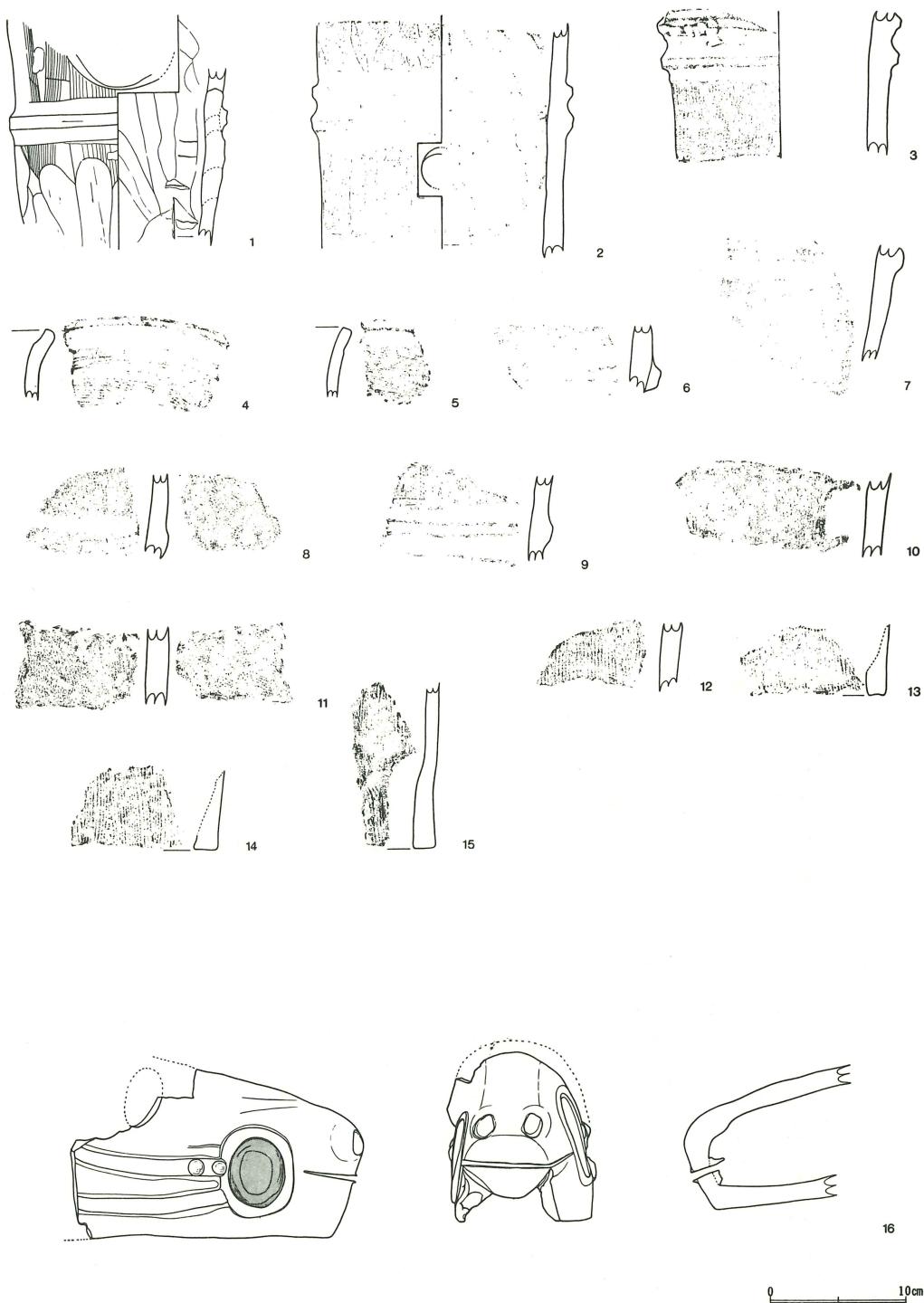
斜面の傾斜にそってローム層を掘り込んでいるが、須恵器窯跡のように礫層を掘り抜くまでにはいたっていない。水平全長4.85m、窯尻部と焚口部を結ぶ斜距離は5.10mを測る。側壁はほぼ平行するものの、燃焼部に最大幅があり1.38m、以下焼成部1.26m、窯尻部70cmと燃焼部から窯尻部に近づくにつれ、しだいに幅が狭くなる。なお、焚口部は1.32mを測る。

床面は堅くよくしまっており、あまり凹凸はないが、わずかに小礫がみられる。おそらく礫層直上まで掘り下げているためであろう。また、床面の勾配は、焚口部から焼成部にかけては斜面の傾斜に沿っており約28度、窯尻部は急激に角度を増し約40度を測る。

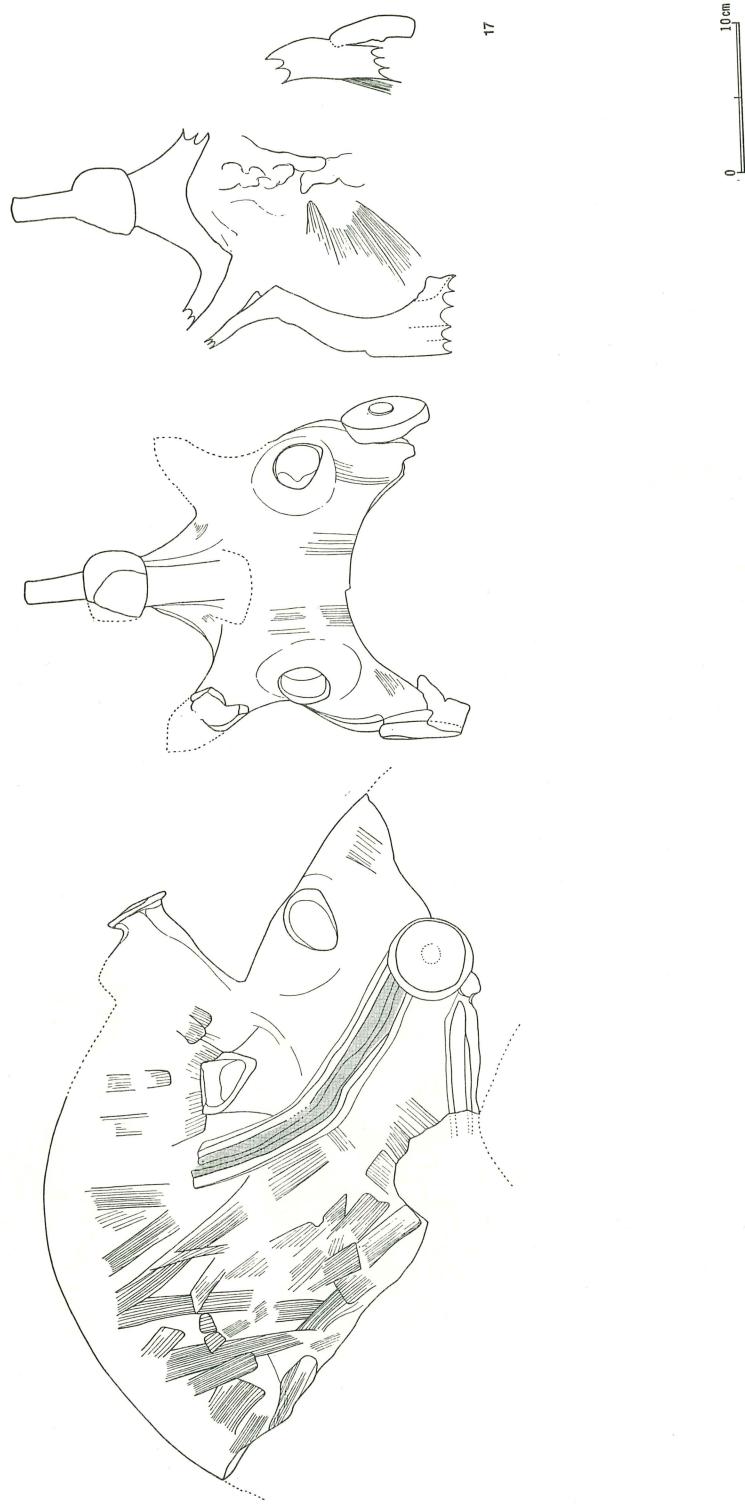
前庭部は、窯の床面の傾斜をそのまま延長した状態で、28度の勾配をもって斜面下まで続く。窯の構築作業当初、窯体分以上に斜面を掘り窪め、斜面下に灰をかき出しやすいようにしたものと考えられる。斜面の裾部は部分的に整形されており急に落ちこむ。一時的にここに灰を落とし、さらにテラス状の平坦面へかき出したものと考えられる。

天井部はまったく残存しない。窯体内、灰原等にもその痕跡は認められない。同じ斜面にありながら須恵器窯跡と構造的に異なる。

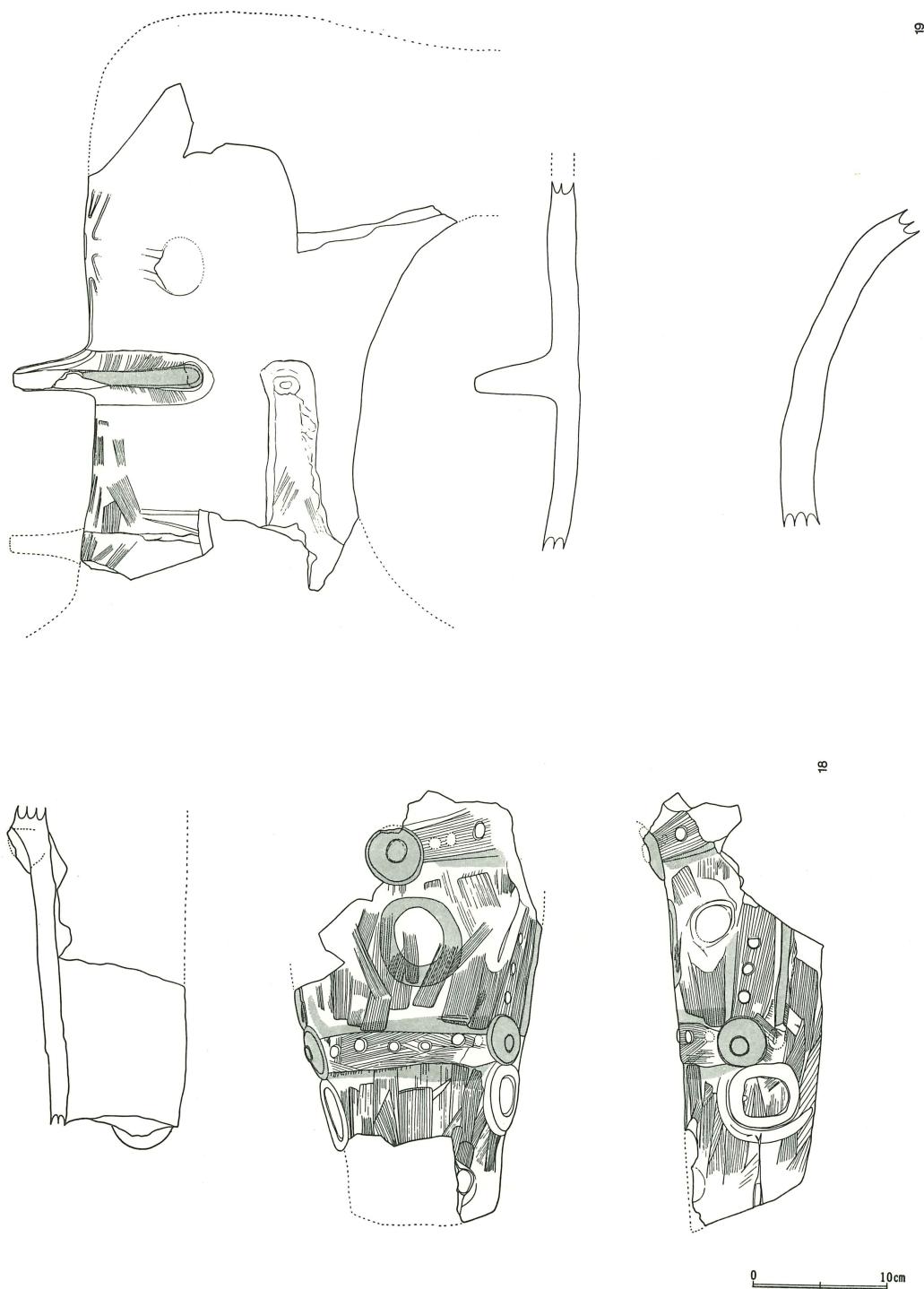
遺物は形象埴輪が目立ち、焼成部上位から窯尻部付近にかけて数個体分の馬形埴輪が出土している(第42~44図)。主軸はN-24°-W。



第42図 7号窯跡出土遺物(1)



第43図 7号窯跡出土遺物 (2)



第44図 7号窯跡出土遺物 (3)

## 7号窯跡出土遺物（第42～44図）

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外面調整	内面調整	備 考
42図-1	(17.0)	—	b 1.1 c 1.4	胎：少量。酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：淡橙褐色	上段に円孔。 穿孔後指撫で。	A 0.5/2.2 右回り布横撫で。	縦刷毛 10本/2.5cm (底部調整) 刀子縦削り・ 右回り	指撫でへ方向 (底部調整) 刀子横削り・ 右回り	残率40%。 2cm幅の粘土紐巻き上げ。 底部調整あり。
42図-2	(17.2)	—	1.3 1.1	胎：やや多い。酸化鉄粒・角岩礫・ 珪酸体 焼：普通 色：橙褐色	下段に円孔。	A 0.5/2.1 A 0.4/1.5 布横撫で。	縦刷毛 8本/2cm	凸帯下段縦指撫で 上段右傾斜指撫で	破片。 凸帯が同一箇所に 二段につけられてい る。
42図-3	(10.7)	—	1.4	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：普通 色：橙褐色	—	A 0.5/1.7 A 0.4/1.7 布横撫で	縦刷毛 9本/2cm	右傾斜撫で	破片。 2と同様、凸帯が 同一箇所に、2段 につけられ、上段 に工具痕あり。
42図-4	(5.3)	—	口0.9	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 6本/1cm △右回り横撫で	右傾斜刷毛 5本/1cm △横刷毛△横撫で	破片。
42図-5	(5.3)	—	口0.8	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：淡橙褐色	—	—	—	右傾斜刷毛 5本/1cm △横撫で	破片。
42図-6	(4.9)	—	1.5	胎：少量。パミス 角岩礫・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	A 0.8/2.5	縦刷毛 10本/2cm	縦指撫で	破片。
42図-7	(8.8)	—	1.3	胎：やや多い。パ ミス・角岩礫・珪 酸体多い。 焼：普通 色：淡橙褐色	—	B 0.5/2.2	縦刷毛 9本/2cm	—	破片。 内面磨滅著しい。
42図-8	(6.2)	—	1.2	胎：やや多い。パ ミス・角岩礫・珪 酸体多い。 焼：普通 色：淡橙褐色	—	B' 0.5/2.0	縦刷毛 5本/1cm	右傾斜刷毛 5本/1cm △撫で	破片。 内・外とも磨滅著 しい。
42図-9	(6.5)	—	1.2	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：外面暗褐色・ 内面橙褐色	—	A' 0.6/2.2 右回り布横撫で	縦刷毛 11本/2cm	—	破片。 内面剥落。
42図-10	(6.1)	—	1.4	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：普通 色：淡橙褐色	—	—	縦刷毛 8本/2cm	右傾斜指撫で	破片。
42図-11	(5.7)	—	1.6	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 珪酸体多い。 焼：普通 色：淡橙褐色	—	—	縦刷毛 9本/2cm	横刷毛 11本/2cm	破片。
42図-12	(5.4)	—	1.4	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 多い。 焼：普通 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 8本/2cm	右傾斜指撫で	破片。

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	内面調整	外面調整	備 考
42図-13	(5.2)	—	1.2	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・晶石・ 珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	綿刷毛 10本／2cm	—	破片。 内面剥落。
42図-14	(5.9)	—	底1.8	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：淡橙褐色（一 部黒灰色）	—	—	綿刷毛 9本／2cm	—	破片。 内面剥落。
42図-15	(12.2)	—	底1.7	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：淡橙褐色	—	—	綿刷毛 10本／2cm	綿指撫で 基底部周辺は 横指撫で	破片。

### 馬形埴輪（第43図-17、図版43-1）

目および耳を欠く頭部破片であり、残存長27.2cm、残存高13.8cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を僅かに含む。焼成は非常に良好で堅緻である。色調は橙褐色を呈し素環の鏡板内側が朱彩されている。

面繫は、幅1.5cmの粘土紐を貼り付け、辻金具には2個1組の粘土粒を貼付している。引手は、幅1.7cmの粘土紐で表わし、面繫とともに鏡板に繫がる。目、鼻は外側から穿孔され、口は刀子で正面から鏡板にかけて切り込まれている。

成形は、粘土帶を積み上げて筒状にし、正面を粘土板で塞いだのち、この顔形の左右両側に粘土板を貼り付けている。正面は、このあと板で押圧し、平坦化している。

外面、内面とも撫で調整が施されている。

### 馬形埴輪（第43図-17、図版43-1）

頭部の破片であり、鼻先を欠く。焼成部床面から出土し9号窯灰原出土の破片と接合している。残存長47cm、残存高29cmを測る。胎土は酸化鉄粒・角岩礫等を少量含み、珪酸体の量が目立つ。焼成は良好であり、淡橙褐色を呈する。

たて髪は切り整えられ、先端を結んで飾りとしている。面繫は幅1cmの粘土紐2本1組で表わし2本の間に朱彩を施している。辻金具には、中央に粘土粒を貼付した径6cmの円形粘土板を用いている。幅1cmの粘土紐による手綱が僅かに残り、面繫同様、2本1組の表現である。目は外側から穿孔されており、耳は差し込み式である。

顔は粘土板を折り曲げて成形されている。たて髪は二つに折り合わされた頸部の上に、長さ4.5cmの粘土塊を貼付し、その上に、たて髪となる粘土板を貼り付けている。

外面は、たて髪から頸部および胴部へかけて入念な刷毛調整10本／2cmを行い、さらに撫でを施している。たて髪と頸部との明瞭な境いはなく、やや反り気味のゆるやかな曲線を描いている。内面は丁寧な指撫でと、部分的な刷毛調整を施し、たて髪貼付部分には、指の押圧を加えている。

### 馬形埴輪（第44図-18、図版43-2）

頭部の破片であり、口および耳を欠損する。焼成部床面から出土しており、9号窯灰原の小破片とも接合している。図版45—2はこれに伴う頸部の破片であろう。残存長32cm、残存高13cmを測る。胎土は砂粒をほとんど含まないが、珪酸体の量だけは多量である。焼成は良好であり、淡橙色を呈し、朱彩が施されている。

面繫は、幅3cmの粘土紐を貼り付けているが、僅かなふくらみにすぎない。粘土紐貼り付けで表現するよりも、むしろ、刷毛目を用いて表わしたと思われ、刷毛調整のち荒い撫でを施し、中央には粘土粒を配している。特に鼻革は、ほとんど隆起がなく、刷毛目は不定方向であるが、同じく中央に粘土粒が配されている。頬革は、粘土紐を貼付せず、幅3cmの刷毛目で表わし、刷毛目両側を撫で調整して、僅かな隆起をもたせている。ここにも、中央に粘土粒を配している。辻金具は、粘土粒をのせた径4cmの円形粘土板であり、額と両頬に1個ずつ残存している。引手は幅1.1cmの細い粘土紐を貼り付けており、右頬では、素環の鏡板に、左頬では鏡板まで達せず辻金具に接している。いずれも先端部を折り曲げて環状にしている。朱彩は引手、面繫両側、辻金具に施され、眉間に、線刻で二重丸を描き朱彩を施している。

成形は、粘土板を二つに折り曲げて顔部を形作り、目と鼻は、外から穿孔されている。口は刀子で切れ目を入れている。

外面は刷毛調整10本／2cm幅が全面に施されている。他の馬形埴輪に比べ、ほとんど撫で調整が施されず、むしろ、刷毛目を装飾的に用いている。内面は指撫でが施されるが、左右頬下は刷毛調整がなされている。

#### 馬形埴輪（第44図—19、図版44—3）

胴部の破片であり、鞍部から臀部までが残存し脚は欠いている。残存長36.4cm、残存高33cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫等を少量含み珪酸体の量は微量である。焼成は良好であり、淡橙褐色を呈する。

鞍部は前輪を欠き、後輪は一部を欠くが、山には朱彩が施されている。障泥は欠落しており鎧は鎧軸部分が僅かに残る。尻繫は幅1.5～1.8cmの粘土紐を貼付しており、輪状を呈する雲珠に繫がっている。雲珠からは三方向に鈴杏葉が垂下されており、鈴は三鈴であったと思われる。

成形は腹部に大形の粘土板を用意し、各部位に合わせて、粘土帶を積み上げている。

外面は、刷毛調整後、撫でを施し、内面は丁寧な撫で調整を施している。

#### 馬形埴輪（図版44—2）

臀部から後脚にかけての破片である。残存長38.2cm、残存高41.3cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒をやや多く含む。焼成は良好である。色調は橙褐色を呈している。

尻繫は幅1.1cmの細い粘土紐を貼付し、紐の上には円形の粘土粒を配している。臀部中央、尻繫下に径5.5cmの孔が穿たれている。

粘土帶を部位にあわせて積み上げ、脚部は別個に作ってから、胴と接合している。

外面は刷毛調整10本／2cm幅を施し、内面は、刷毛調整14本／2cm幅ののち、撫でを施している。特に臀部の孔付近は入念である。

### 馬形埴輪（図版45—1）

前輪とたて髪の一部を残す頭部の破片である。残存長36cm、残存幅21.6cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は良好であり、橙褐色を呈する。

覆輪の表現はなく、前輪装着後、たて髪がつけられており、約10cmほどに切り整えられていたようである。胸繫・面繫・手綱は、幅2~2.8cmの粘土紐を貼付して表わし、辻金具には、方形粘土板を用いたと思われる。耳は差し込み式である。

外面は、刷毛調整10本／2cm幅、内面は丁寧な指撫で調整を施している。

### 馬形埴輪（図版45—2）

焼成部床面出土の頸部付近の破片である。外面調整および胎土等から、第44図—18と同一個体と思われる。残存長32cm、残存高35cmを測る。胎土は砂粒をほとんど含まないが、珪酸体の量が目立つ。焼成は良好であり、淡橙褐色を呈する。部分的に朱彩が施されている。

たて髪は、約9cmに切り整えられ、頂部では両縁に脹らみをもたせている。手綱は幅1.1cmの粘土紐で表わされ、たて髪頂部で、左右の綱を連結している。朱彩は、たて髪頂部両縁の脹らみ部分と、手綱に施され、さらに、たて髪と頸部および胴部に丸形の朱彩が認められる。いずれも、線刻で二重丸を描き朱彩したもので、外径6.5~12cm、内径3~8cmを測る。この外、丸ではなく渦巻状に線刻し朱彩した文様もある。

外面は刷毛調整14本／2cm幅、内面は刷毛調整を施したのち、撫でを行っている。

### 馬形埴輪

胴部破片であり、障泥、後輪および尻繫が一部残存する。残存長42cm、残存高27.5cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は良好であり淡橙褐色（一部橙褐色）を呈する。

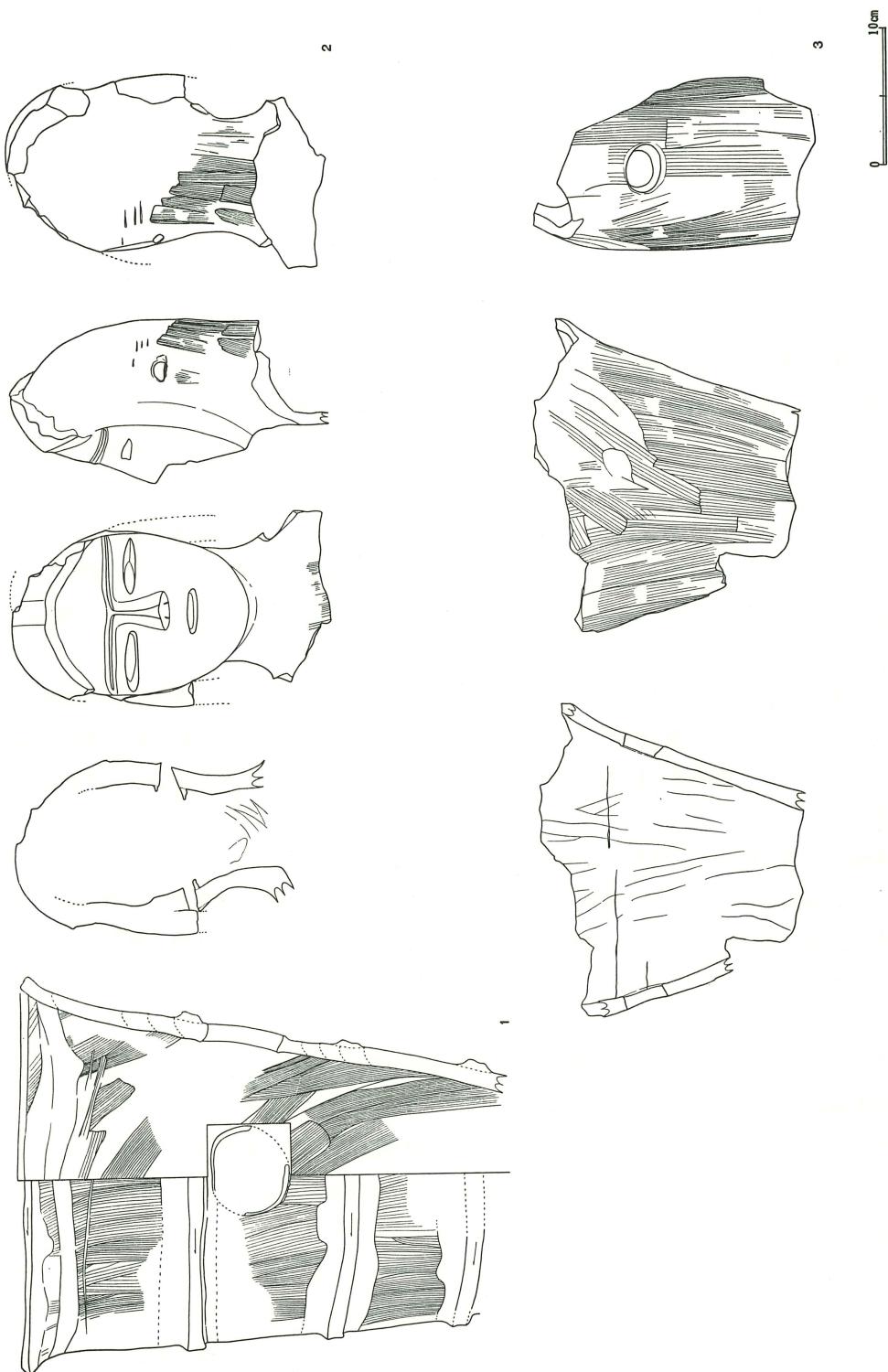
障泥は上辺23cm、下辺推定18cm、高さ13.7cmを測る。鎧は幅1.1cmの粘土紐で表わされ、橢円形を呈する輪鎧である。尻繫は幅2.5cmの粘土紐を貼り付けて表わし、輪状を呈する雲朱に繋がっている。雲珠には鈴杏葉が垂下されていたと思われるが、ほとんど欠損しており不詳である。尻尾は差し込み式であり、孔が認められる。外面は刷毛調整、内面は布撫で調整を施している。

### 不明形象埴輪（図版45—4）

同種のものが2個体出土している。いずれも中央やや下部に凸帯をもつ。上辺・側辺・下辺の三辺が直線的に切りとられ、撫で調整を施した面となっている。残る側辺は割れ目であり、若干内側に彎曲している。

高さはそれぞれ10cmと10.5cm、上辺部長5cmと5.5cm、下辺部長5.9cmと5.5cm、器厚1.2cmと1.5cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫等の砂粒を少量含む。橙褐色を呈し、焼成は良好である。外面には、若干右傾斜の刷毛目、内面は横方向の撫でが施されている。

家形埴輪の部分とも考えられたが、上・側・下辺の三面が作られている点で、どのような形状をなすのか、不明といわざるを得ない。



第45図 A群出土遺物

### A 群出土遺物(第45図)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
45図-1	(35.8)	口(28.9)	口1.0 a 1.1 b 1.1 c 1.2 d 1.2	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：普通 色：淡褐色	上から二段目に 円孔。 右回り穿孔後 指撫で。	1 A 0.6/2.9 2 A 0.4/2.6 3 A 0.6/2.5 右回り布横撫で。 上から二段目の凸 帯は、三本指によ る撫での後、2本 指(親指と人差指) で狭むように撫で を施す。	縦刷毛 10本/2cm △口縁部右回 り布横撫で	上段口縁部付 近は斜刷毛へ 方向 10本/1.9cm △口縁部横撫 で 孔部以下は縦 刷毛13本/ 1.5cm	残率60%。 2cm幅の粘土紐巻 き上げ。 上から三段目の凸 帯に布目痕あり。

### 人物埴輪(第45図-2、図版52-1)

男子頭部であり、頸部以下および頭髪を欠く。残存高23.8cm、顔面長14.8cm、顔面幅11.7cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫を少量含み、珪酸体の量は微量である。焼成は良好であり堅緻である。橙褐色を呈する。

髪は後方部および左側を欠損しているが、中央でふり分けた下げ美豆良を結っていたと思われる。目と口は刀子で切り抜かれ、扁平な橢円形を呈する。鼻と眉は粘土を貼付し、鼻孔は刀子先端で縦長にあけられている。耳は外から穿孔し、耳環を貼付していたと思われ、左耳に僅かにその痕跡を認め得る。

粘土紐巻き上げにより成形され、頭頂部で絞り気味にするが、この時に塞ぐわけではない。この孔は髪の貼付によって塞がれている。顔面は粘土を貼り付け、輪郭も含め入念な撫でを施している。後頭部には、縦刷毛が施されるが、ほとんど撫でにより消されている。内面は入念な撫で調整が施されている。

### 人物埴輪(第45図-3、図版52-2)

人物埴輪胴部であり背面を欠損している。残存高20cm、最大幅22.4cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫等を少量含み、珪酸体はごく僅かである。焼成は良好であり、橙褐色を呈する。粘土紐積み上げによる成形であり、腕は、差し込み式である。左右両側に、外からの穿孔が施されている。

外面は刷毛調整9本/2cm幅が施され、内面は縦布撫でにより、粘土紐接合痕を消している。

### f字形鏡板(図版53-2)

残存長9cm、幅4.4cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・珪酸体等の砂粒を含む。焼成は良好であり淡橙褐色を呈する。縁金および、粘土粒貼付による鋲止めが表現されている。

### 盾形埴輪(図版53-1)

円筒に両翼をつけた盾と思われ、上辺右隅部分が残存する。残存長16cm、残存幅15.5cmを測る。胎土はパミス・角岩礫等の砂粒をやや多く含む。焼成は良好であり、橙褐色を呈する。

盾面の上辺は弧を描き両端が突出しており、表面には、籠描沈線の文様が描かれている。残存部では、まず周縁部に沈線が巡り、次に上部に平行する二本の沈線を引き、その間を山形文で埋めている。さらに中央には縦の沈線が走っている。

### 盾形埴輪（図版53—3）

上辺部分の破片2個であり、接合はしないが、同一個体と考えられる。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は非常に良好で堅緻である。

表面には、篦描沈線による文様が認められる。周縁部を篦描きし、その中におそらく山形文が描かれていたと思われる。残存する山形文には朱彩が施されている。

### 不明形象埴輪（図版53—4）

残存長27cm、幅12.6cm、器厚は平均1.2cmを測るが、最大で2cm、最小で0.8cmを測る。胎土は、角岩礫・酸化鉄粒を少量含み、珪酸体の量が目立つ。淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。

粘土版を方形に成形し、下辺は（写真では縦位置にした）やや内側に曲っている。上辺は、右側と同様の粘土板が接合されていたと思われ、二股に分かれていた可能性もある。この接合部の器厚が一番厚く、先にゆくにつれ薄くなってゆく。両側辺とも撫で調整が施された面をなし、外面には、刷毛調整（縦刷毛と横刷毛）を施し、さらに、輪郭に沿って周縁部を朱彩している。

下辺部の割れ具合からみて、何かと接合していたと思われ、韌の可能性も考えられるが、一応形状不明として扱っておく。

### （8）9号窯跡（第46図）

本窯跡群中最東端に所在する。B群にあって唯ひとつ単独で存在する窯跡である。規模も他の埴輪窯跡に比して大きく、本窯跡群中でも最大級のものである。全長7.14m、幅は焚口部で1.99m、燃焼部2.18m、焼成部1.95m、煙道部で1.10mを測る。側壁はほぼ平行するものの、燃焼部付近でやや胴が張り、この部分に最大幅がある。

窯体は大部分が平坦面にあるが、燃焼部の末端から焚口部さらに前庭部は斜面にかかる。

床面はよく焼けており堅緻である。燃焼部から焼成部中位にかけてはほぼ平らで、わずかに4度くらいの傾斜をもっている。焼成部上位から窯尻部にかけては約25度の勾配をもち、窯尻部の末端はわずかに直立する。燃焼部末端に段をもち、さらに焚口部に斜面を整形した橢円形の落ち込みがあり、階段状を呈している。ちょうどこの部分が斜面にかかるところで、灰を斜面下に落とすためのかき出し口を作り出したものと考えられる。

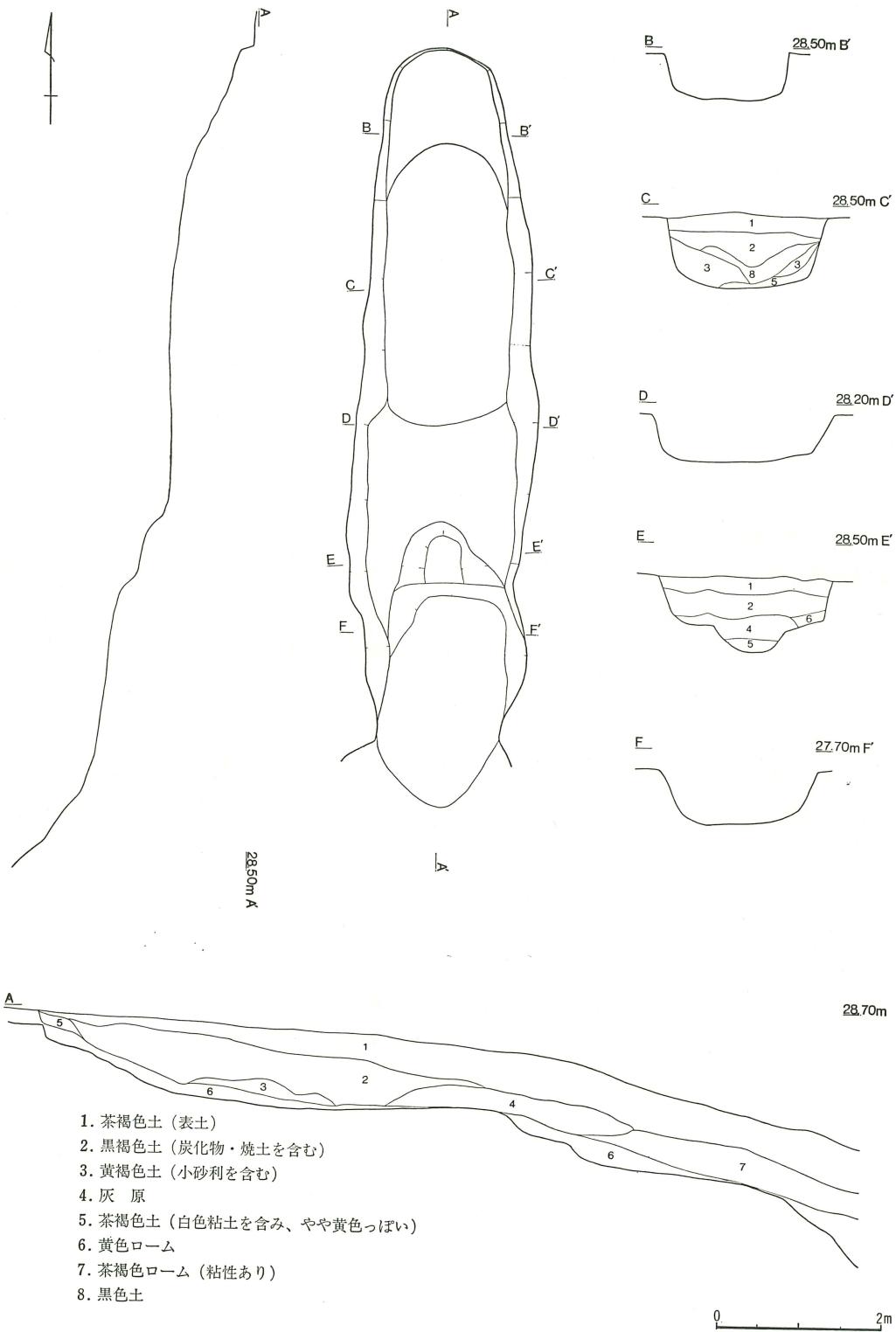
前庭部は橢円形の落ち込みの延長にあり、斜面を整形して、狭い平坦面がつくられている。前庭部末端から斜面にかかるが、斜面も削り落とされ、急勾配となっている。

灰原は斜面下端からテラス状平坦地に残されている。西側に接する8基の窯跡に伴う灰原と重なっており、本窯跡の灰原だけを抽出するのは困難であった。また、灰原から他の窯跡との新旧関係は把握できなかった。そこで、テラス状の平坦地にみられる灰原を一括し、B群南斜面下灰原としてあつかった。

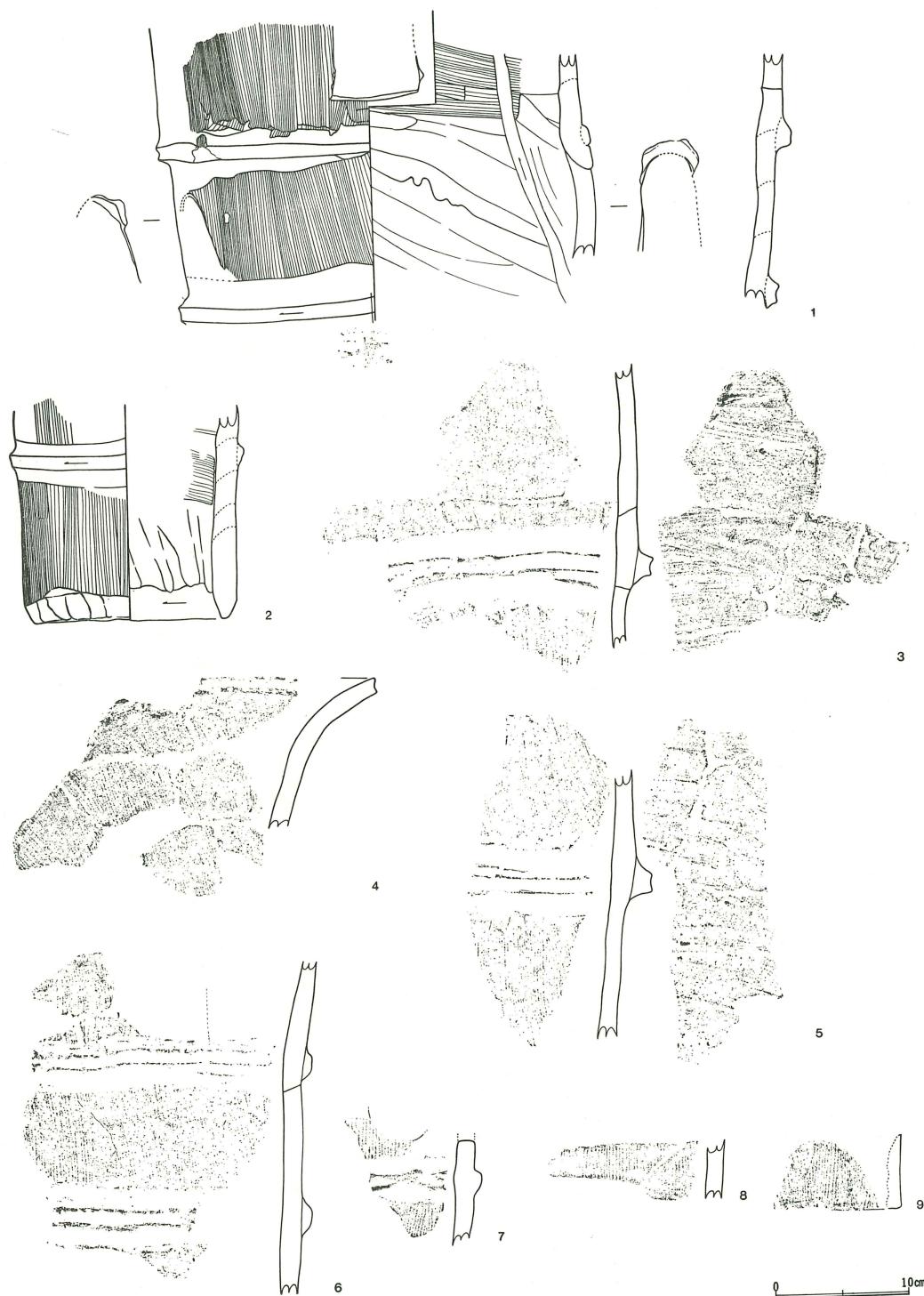
ローム層を掘り込んだ半地下式無段登窯で、礫層まで掘りこんでいない。ただ、焚口部から前庭部にかけての部分に礫が散見する。

主軸はN—42°—Wにとる。

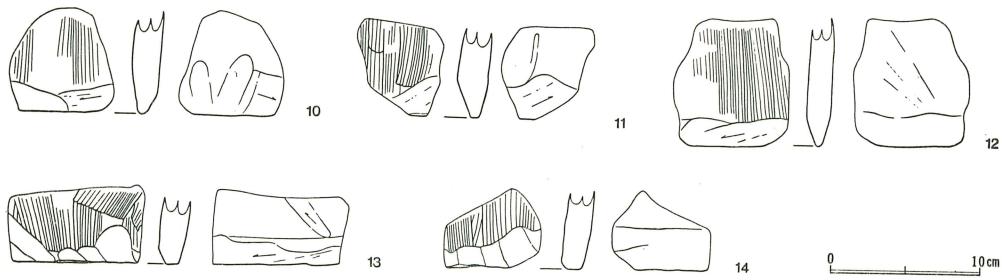
出土遺物は少なく、焼成部から若干の円筒埴輪がみられるが、底部調整を施したもの、透し孔が方形を呈するものなどがある（第47、48図）。



第46図 9号窯跡



第47図 9号窯跡出土遺物 (1)

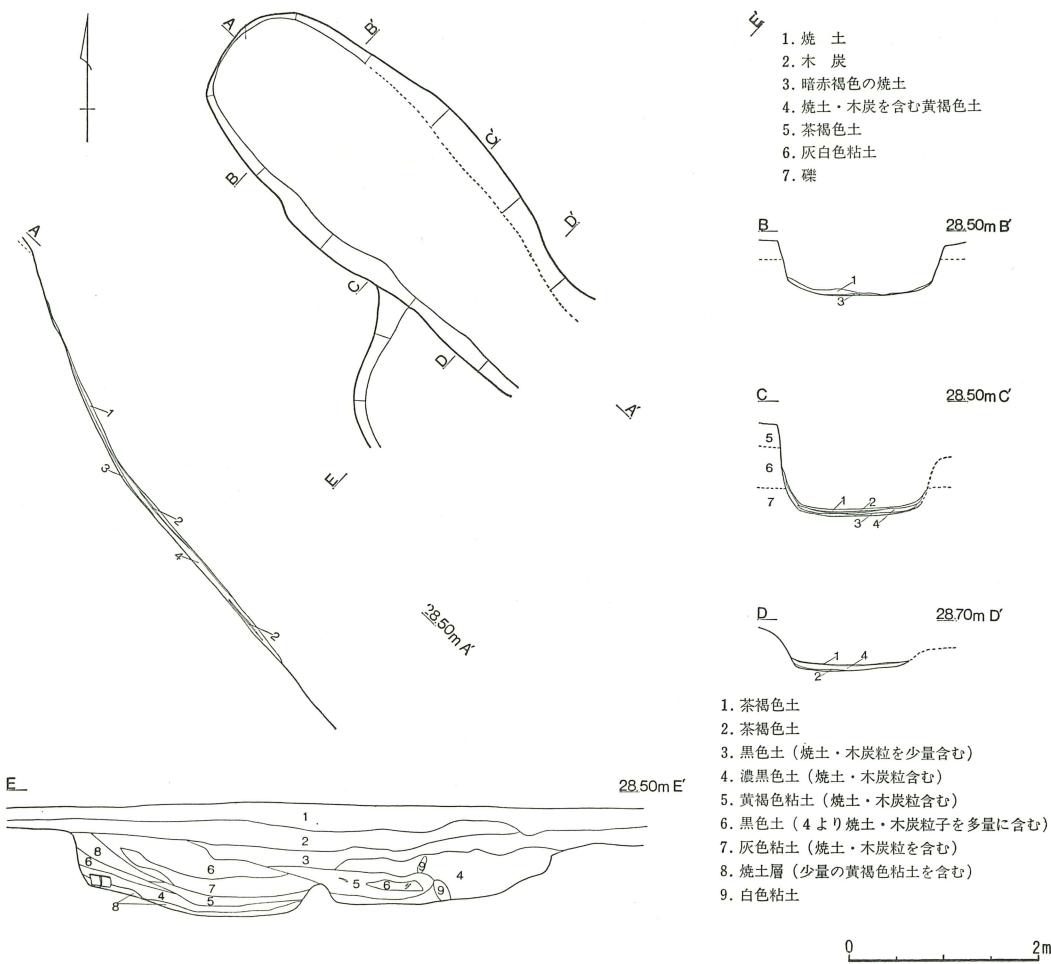


第48図 9号窯跡出土遺物(2)

## 9号窯跡出土遺物(第47・48図)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外面調整	内面調整	備 考
47図-1	(21.0)	—	b 1.4 c 1.4	胎：やや多い。バ ミス、酸化鉄粒、 角岩礫 焼：良好・堅緻 色：外面淡橙褐色。 内面乳白色	上段に長方形 孔。穿孔後無 調整。 下段に楕円形 孔。穿孔後、 上辺を指で押 圧し、丸みを つける。上段 孔と90度見える。	A" 0.9/2.5 A" 1.1/3.1	縦刷毛 10本/2.1cm 2次縦刷毛 15本/2.6cm	下段指撫で 上段右回り横 刷毛←方向⇒ 指撫で	残率40%。 下段凸帯部分に布 痕あり。
47図-2	(16.0)	(14.7)	底0.5 1.6	胎：少量。酸化鉄 粒・角岩礫・珪酸 体 焼：普通 色：橙褐色	—	C 0.5/2.1 右回り布撫で	縦刷毛 8本/2cm <底部調整> 板押圧	横刷毛←方向 16本/3.4cm <底部調整> 刀子横削り・ 倒置して左回 り⇒指撫で	残率25%。 底部調整あり。
47図-3	(23.7)	—	0.9 1.4	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：外面淡橙褐色。 内面橙褐色	—	A" 1.1/3.2	縦刷毛 10本/2cm	横刷毛 5本/1cm ⇒撫で	破片。
47図-4	(15.3)	—	口1.1	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：淡褐色（内面 一部淡橙褐色）	—	—	縦刷毛 10本/2cm ⇒横撫で	—	破片。 内面剥落。
47図-5	(26.2)	—	1.2 1.3	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：淡橙褐色	—	A" 1.3/3.4	縦刷毛 10本/2cm	横刷毛 ⇒横方向撫で	破片。
47図-6	(26.0)	—	b 1.3 c 1.5 d 1.5	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：淡橙褐色	—	上A 0.8/3.2 下A 0.6/2.7	縦刷毛 10本/2cm ⇒布横撫で	指撫で	破片。 下部凸帯に布目痕 あり。
47図-7	(8.0)	—	1.3 1.4	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：淡褐色	凸帶上2cmで 円孔下端。 穿孔後撫で。	A 0.5/2.0	縦刷毛 8本/2cm	指撫で。	破片。
47図-8	(4.4)	—	1.1	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：普通 色：淡褐色	—	—	縦刷毛 9本/2cm	縦指撫で	破片。
47図-9	(5.6)	—	—	胎：少量。バミス 酸化鉄粒 焼：良好 色：淡橙褐色	—	—	縦刷毛 9本/2cm	—	破片。 内面剥落。 底面に縦状圧痕あ り。

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
48図-10	(6.8)	—	底0.4 1.8	胎：少量。バミス 珪酸体 焼：普通 色：暗橙褐色	—	—	縦刷毛 8本／2cm <底部調整> 刀子横削り・ 倒置して左回り	<底部調整> 刀子横削り・ 倒置して左回り⇒指押え	破片。 底部調整あり。
48図-11	(6.1)	—	底0.5 2.0	胎：少量。バミス 珪酸体 焼：普通 色：暗橙褐色	—	—	縦刷毛 8本／1.5cm <底部調整> 刀子横削り	<底部調整> 刀子横削り・ 倒置して左回り	破片。 底部調整あり。 10と同一個体の可 能性がある。
48図-12	(8.5)	—	底0.2 1.6	胎：少量。角岩疊 珪酸体 焼：普通 色：淡褐色	—	—	縦刷毛 9本／2cm <底部調整> 刀子横削り・ 倒置して左回り	撫で <底部調整> 板押す？	破片。 内面磨滅著しい。 底部調整あり。
48図-13	(5.2)	—	底0.8 1.8	胎：微量。珪酸体 多い。 焼：良好・堅緻 色：淡褐色	—	—	縦刷毛 8本／2cm <底部調整> 板叩き	<底部調整> 刀子横削り・ 倒置して右回り⇒布撫で	破片。 底部調整あり。
48図-14	(5.3)	—	底0.9 1.7	胎：微量。珪酸体 多い。 焼：良好 色：淡橙褐色	—	—	縦刷毛 9本／2cm <底部調整> 板叩き	横布撫で	破片。 底部調整あり。 基部をもち、粘土 板を右回りに接合。



第49図 10号窯跡

## (9) 10号窯跡(第49図)

8基が群在する中のひとつである。重複しながらも比較的よく残っている。残存長4.75m、最大幅は焼成部にあり1.95m、以下焚口部1.25m、燃焼部1.66m、窯尻部で1.20mを測る。やや胴が張り、窯尻部は隅丸形を呈する。

床面は凹凸もなく、よく焼けており堅い。勾配をみると、焚口部から燃焼部にかけて5度、焼成部から窯尻部にいたると角度を増し22度となる。横断面はゆるいU字形を呈する。

燃焼部はやや幅をせばめながら焚口部にいたるが、この部分が18号窯を切っている。

灰原は19号窯の上に乗っており一部は斜面下に流されたものと考えられる。18号、19号窯の2基を切っているが、他の窯跡に破壊されることなく、全体の様子がよく窺える。

天井部は、その痕跡が残されておらず、他の窯跡同様不明である。

なお、覆土中に灰層が認められるが、これは、北側に位置する11号～13号窯のものと考えられる。覆土中からの遺物は小破片が若干ある程度。

主軸をN—47°—Wにとる、半地下式無段登窯である。

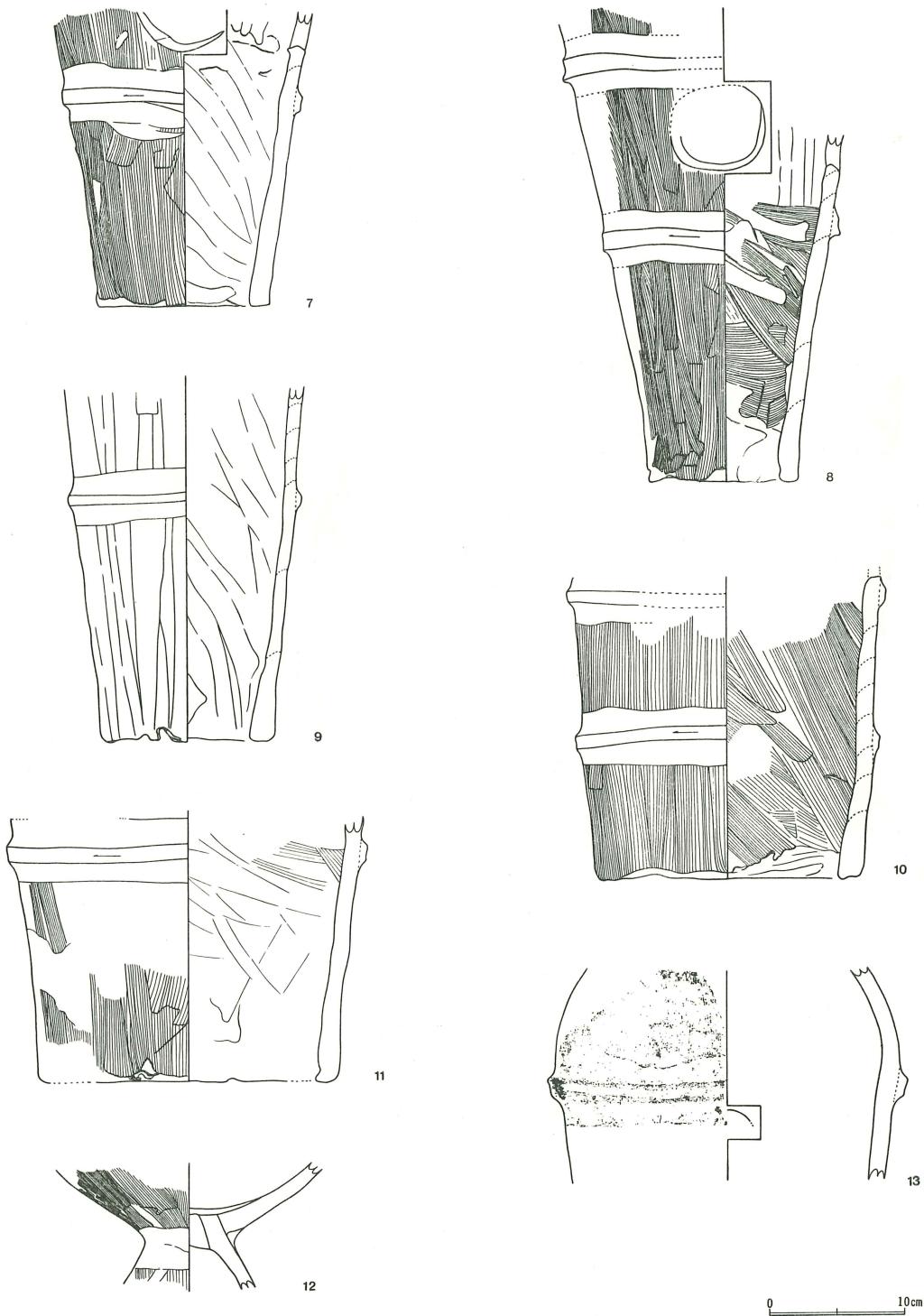
遺物は円筒埴輪が主体を占めるが、高坏を模した特徴的な埴輪もみられる(第50、51図)。

## 10号窯跡出土遺物(第50・51図)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外部調整	内面調整	備 考
50図-1	(15.0)	口(25.4)	口0.9 a 0.8 b 1.2	胎：やや多い。バ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫 焼：不良 色：淡褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	A' 0.4/2.9 右回り布横撫で	縦刷毛 12本/2cm 右回りに施す。 △口縁部横撫 で	斜刷毛へ方向 12本/2cm △口縁部横撫 で	残率40%。 内・外面とも磨滅 が著しい。
50図-2	(22.5)	口(35.2)	口1.0 a 1.1 b 1.4	胎：やや多い。バ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫 焼：普通 色：淡褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	A 0.6/3.3 右回り布横撫で	縦刷毛 12本/2.7cm 右回りに施す。 △口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛へ方向 5本/1.1cm △口縁部横撫 で	残率30%。
50図-3	(24.1)	口(25.7)	口1.0 a 1.0 b 1.3	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 晶石 焼：普通 色：暗黄褐色	下段に円孔。	A 0.6/3.3 右回り布横撫で	縦刷毛 8本/2cm △口縁部右回 り布横撫で	横刷毛へ方向 8本/2.4cm 下段は、刷毛 調整後布撫で	残率40%。
50図-4	(26.0)	口23.7	口0.9 a 1.1 b 1.1	胎：少量。バミス 酸化鉄粒 焼：普通 色：暗赤褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	B 0.6/2.5 右回り布横撫で	縦刷毛 7本/2.5cm	上段横刷毛 ←方向 14本/4cm 下段指撫で	残率40%。
50図-5	(19.0)	—	口0.8 a 1.0 b 1.1	胎：少量。バミス 酸化鉄粒 焼：普通 色：橙褐色	—	A' 0.3/3.1	縦刷毛 10本/2cm △口縁部横撫 で	横刷毛へ方向 8本/2cm △口縁部横撫 で	破片。 内・外面とも剥落 が目立つ。
50図-6	(9.4)	—	口0.9 a 1.3	胎：少量。バミス 酸化鉄粒 焼：良好 色：外面淡褐色・ 内面橙褐色	—	—	縦刷毛 10本/2cm △横撫で	—	破片。 内面剥落。
51図-7	(21.5)	底13.0	底1.5 c 1.0	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好・堅緻 色：淡赤褐色(一 部炭化物付着)	第二段に円孔。 穿孔後指撫で。	A 0.5/2.6 右回り布横撫で	縦刷毛 12本/2.8cm	斜布撫でへ方 向	残率70%。



第50図 10号窯跡出土遺物 (1)



第51図 10号窯跡出土遺物 (2)

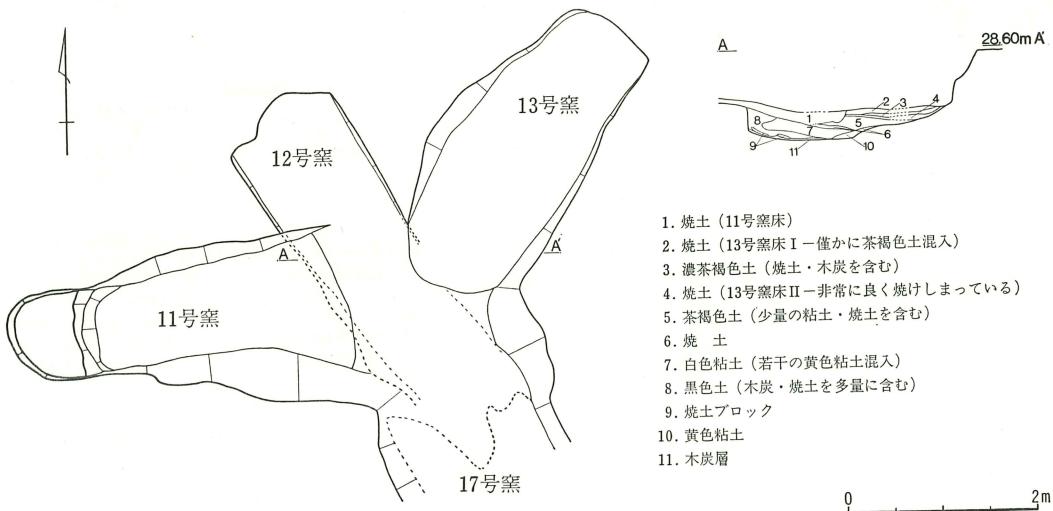
0 10cm

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
51図-8	(40.0)	底11.1	底1.4 b 1.1 c 1.1	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫 焼：普通 色：淡褐色	第二段に円孔。 穿孔後指撫で。 (6.3)×6.8	A' 0.4/2.8 右回り布横撫で	縦刷毛 12本/2cm	斜刷毛へ方向 11本/2.5cm 一部撫で	残率70%。 2.5cm幅の粘土紐 を左回りに巻き上 げる。乾燥単位を もつ可能性あり。
51図-9	(26.0)	底13.0	底1.9 b 1.0 c 1.0	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：暗褐色	—	B' 0.3/2.1 布横撫で	縦撫で	布撫で	残率40%。 2cm幅の粘土巻 き上げ。
51図-10	(21.3)	底(20.0)	底1.7 b 1.1 c 1.2	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：普通 色：橙褐色	—	1 A 0.4/3.4 2 A 0.5/2.5 右回り布横撫で	縦刷毛 10本/2.5cm	斜刷毛へ方向 9本/2cm	残率30%。

### 高坏形埴輪（第51図-12）

残率は図示の90%であり、脚部下端、坏部上端を欠損する。残存高9.5cm、接合部推定径6.5cm、器厚は、脚部1cm、坏部1.1cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は良好であり、橙褐色を呈する。

脚部に坏部を接合している。外面は縦刷毛15本/2.8cmを施し、接合部には、さらに撫でを施す。坏内面は、丁寧な撫で調整である。第66図-2、第84図-16と同器種である。



第52図 11号～13号窯跡

### (10) 11号窯跡（第53図）

10号窯跡のすぐ北に位置し、B群の北端で放射状に重複する3基の中のひとつである。

隣接する12号、13号窯跡の床面が本窯跡の床面下に伸びていることが確認されており、3基中最も新しい。

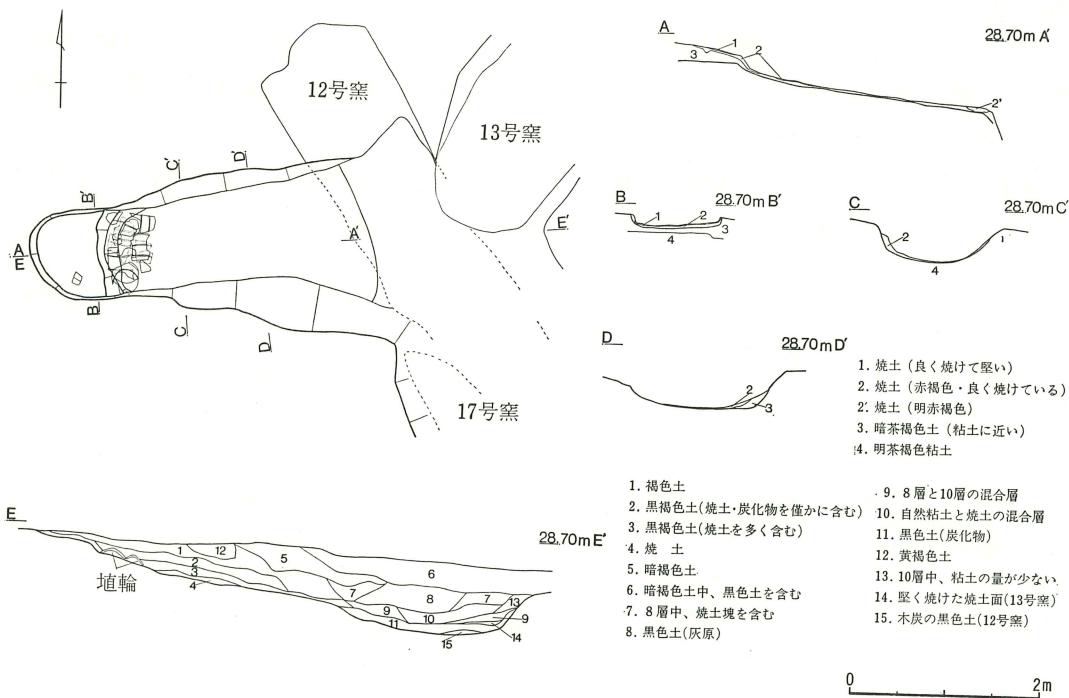
側壁は2.48m程残されており、床面は2.40mまで確認できた。幅は窯尻部で60cm、焼成部で95cmを測り、窯尻から焚口に移行するにしたがって、しだいに幅が広がる形態となる。全体に幅が狭く細長い形態を呈し、他の窯跡に比して小形である。

床面は堅緻で、約6度の勾配をもつ。横断面をみると、たち上がりが外側に開き、掘りこみも浅い。南側に群在する各窯跡よりも、構築自体が雑な感じを受ける。

また、本窯跡で特記すべきことは、窯尻部に近い部分に垂直に落ちる段を有することである。この段の下端には、大形の円筒埴輪が数個体分横位に付設されていた。あたかも段を埋めるように配されており、意識的に置かれたものと考えられる。したがって、ここに配された円筒埴輪は他の窯跡で焼かれ、本窯跡に持ちこまれた可能性が強い。付設された理由は明らかでない。段を埋めて火力の効率を高めるためか、もしくは焼台のような性格を持っているのであろうか。

出土遺物は上記した円筒埴輪が主なものであるが、それらは焼成も良好で、4本凸帯のものも含まれている（第54、55図）。

主軸をN—101°—Wにとる半地下式無段登窯である。

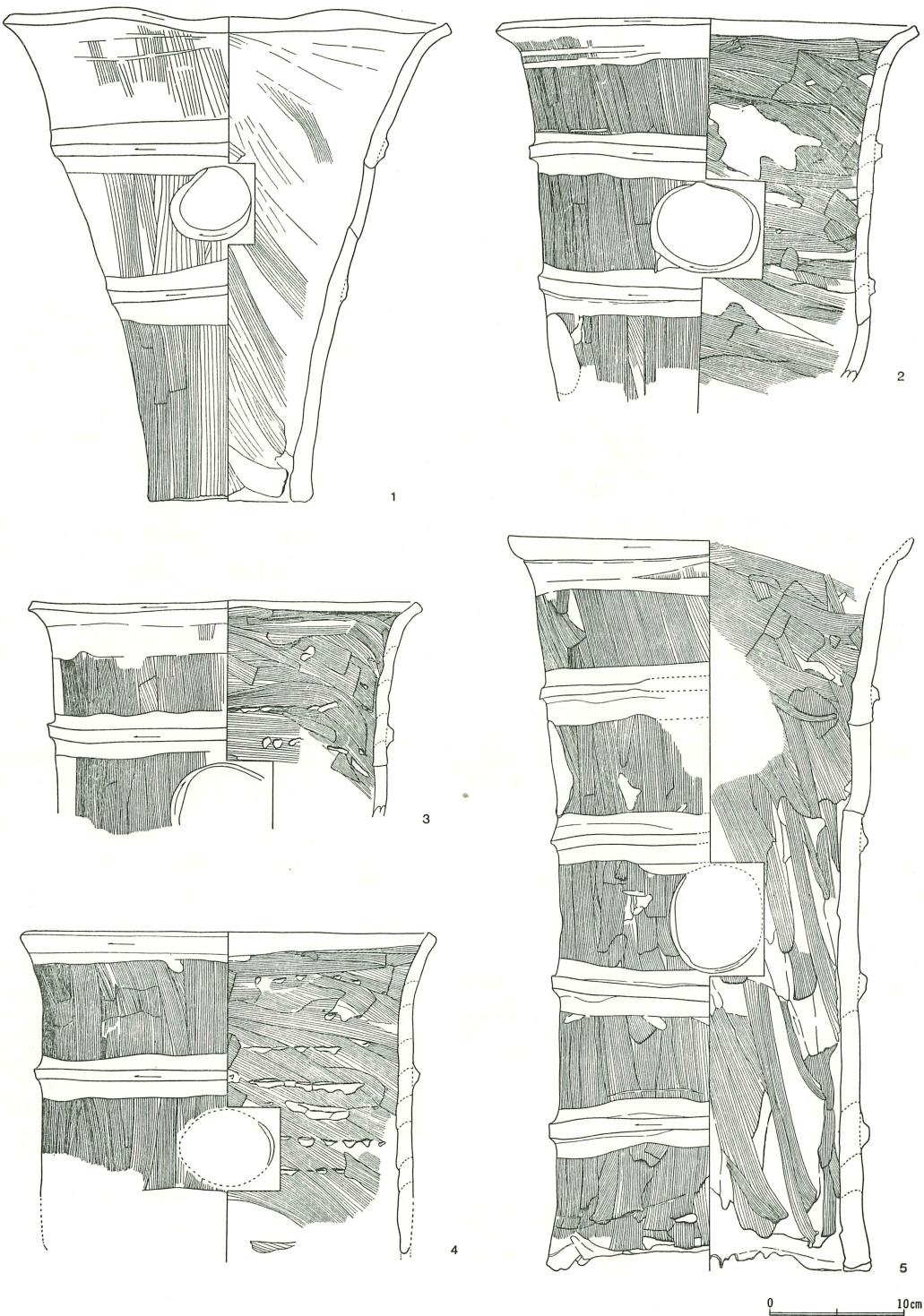


第53図 11号窯跡

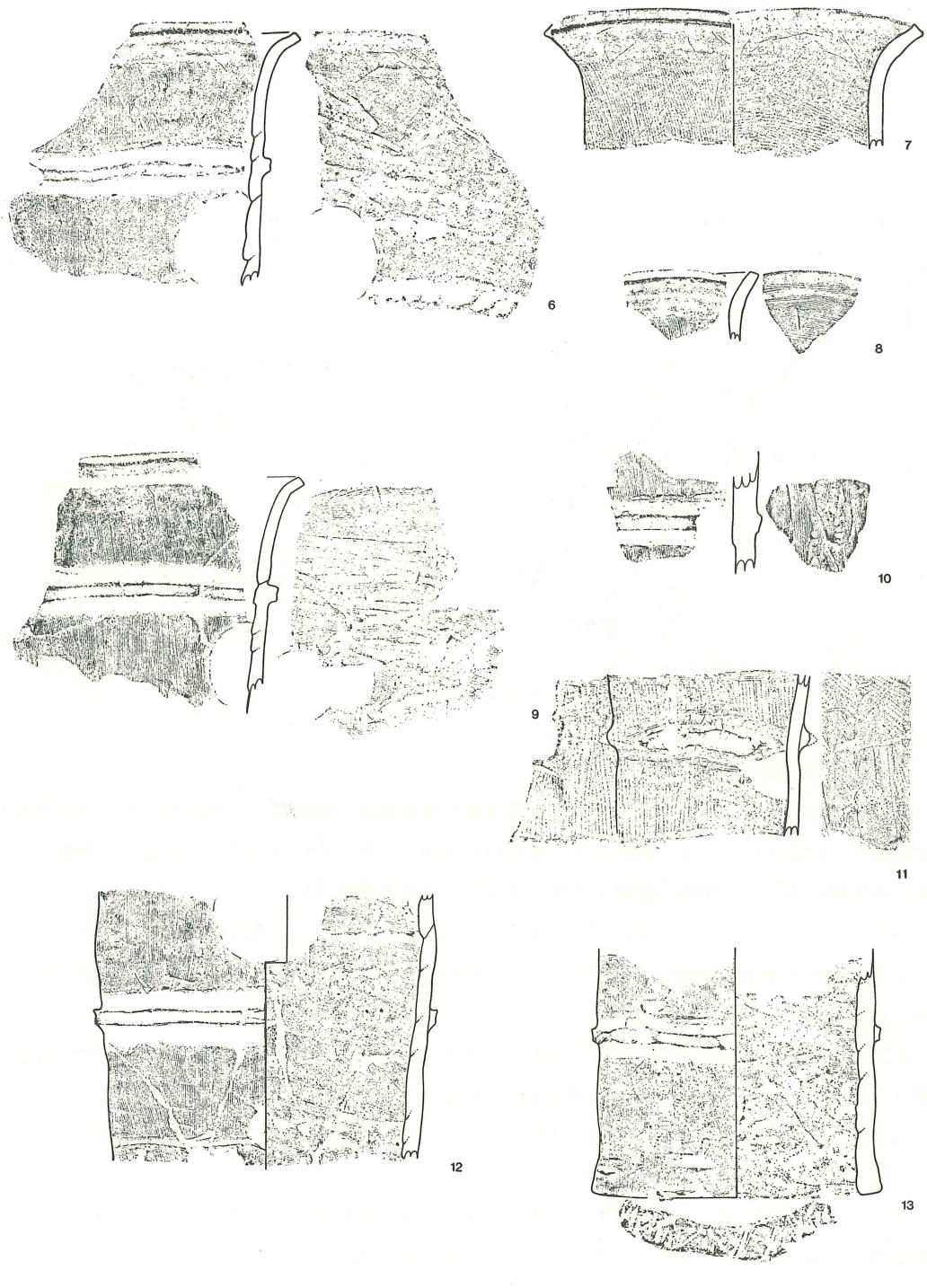
### 11号窯跡出土遺物(第54・55図)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
54図-1	36.8	口33.4 底12.5	口0.8 a 0.9 b 0.9 c 1.1 底0.6	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好・堅緻 色：暗褐色	第二段に円孔。 右回り穿孔後 指撫で。 5.5×6.1	1 A' 0.3/2.7 2 A' 0.3/2.4 右回り布横撫で	縦刷毛 8本/1.6cm 右回りに施す。 ⇒口縁部右回り布横撫で	斜刷毛 口縁部 11本/1.7cm その他 8本/1.6cm 底部周辺は布撫で後斜刷毛	残率50%。 底面に隆状圧痕あり。
54図-2	(24.3)	31.6	口0.8 a 1.1 b 1.1 c 1.1	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 晶石・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：淡褐色（一部 暗褐色）	上から二段目 と三段目に90° 達えて円孔。 右回り穿孔後 指撫で。 6.6×8.1	3 A 0.3/1.8 4 A 0.5/2.0 右回り布横撫で	縦刷毛 13本/1.9cm ⇒口縁部右回り布横撫で	斜刷毛へ方向 10本/1.5cm 一部布押え ⇒口縁部横撫で	残率70%。 2.3~3.0cm幅の粘 土紐を左回りに巻 き上げる。 乾燥単位を上から 三段目にもつ。

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外面調整	内面調整	備 考
54図-3	(17.5)	29.4	口0.8 a 1.0 b 1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	下段に円孔。 右回り穿孔。	A 0.5/2.0 右回り布横撫で	縦刷毛 14本/2 cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛へ方向 14本/1.9 cm ⇒口縁部横撫 で	ほぼ完存。
54図-4	23.7	口(31.1)	口0.8 a 0.8 b 1.0	胎：微量。パミス 角岩礫 焼：良好・堅緻 色：暗褐色	下段に円孔。	B 0.4/1.8 右回り布横撫で	縦刷毛 15本/2 cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛へ方向 18本/1.9 cm ⇒口縁部横撫 で	残率50%。 2 cm幅の粘土紐巻 き上げ。
54図-5	(54.0)	口(30.4) 底24.3	口0.5 a 1.1 b 1.2 c 1.5 d 1.3 e 1.6 底2.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好・堅緻 色：淡赤褐色	第二段に円孔。 第三段に90° 違えて円孔。 右回り穿孔。	1B 0.7/2.9 2A' 0.5/2.5 3C 0.5/2.5 4B 0.5/2.0 第一・第二凸帯は 丁寧な布撫でを施 すが、第三・第四 凸帯は同じ布撫で でもだれている。	乾單時縦刷毛 17本/2.2cm 乾單後縦刷毛 17本/2.2cm	乾單時指撫で 乾單後斜刷毛 15本/2 cm (巻き上げた 内面にさらに 粘土を貼り付 け、刷毛調整 を施す)。	残率50%。 第三段まで巻き上 げて乾燥単位を置 き、再び巻き上げ る。口縁は貼付け。 底面に篠状圧痕。 第一段と第二段に 擬似黒斑あり。対 称位置に二ヶ所あ ったと思われる。
55図-6	(20.5)	—	口0.7 a 0.9 b 0.9	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：橙褐色	凸帯下1.4 cm で円孔上端。 穿孔後指撫で。	A 0.6/1.6	縦刷毛 17本/2 cm ⇒口縁部横撫 で	右傾斜刷毛 17本/2 cm ⇒口縁部横刷 毛⇒横撫で	破片。 2 cm幅の粘土紐巻 き上げ。
55図-7	(9.3)	口(26.8)	口1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 9本/2 cm ⇒口縁部横撫 で	右傾斜刷毛 9本/2 cm ⇒口縁部横撫 で	破片。
55図-8	(5.2)	—	口0.6	胎：少量。パミス 酸化鉄粒 焼：良好 色：淡橙褐色	—	—	縦刷毛 15本/2 cm ⇒横撫で	右傾斜・左傾 斜刷毛 8本/1 cm ⇒撫で	破片。
55図-9	(24.7)	—	口0.8 a 0.9 b 1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：外面橙褐色・ 内面灰褐色	凸帯下1.4 cm で円孔上端。 穿孔後撫で。	A 0.7/1.7	縦刷毛 17本/2 cm ⇒口縁部横撫 で	右傾斜刷毛 15本/2 cm ⇒口縁部横撫 で	破片。 2.0~2.5cm幅の粘 土紐巻き上げ。
55図-10	(9.1)	—	1.3 1.7	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：外面橙褐色・ 内面暗褐色	—	A' 0.3/1.5 右回り横撫で	縦刷毛 17本/2 cm	縦刷毛 8本/1 cm ⇒撫で	破片。
55図-11	(12.0)	—	0.9 0.9	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫 焼：良好・堅緻 色：淡褐色	凸帯横撫で下 6 cmで孔。 残存部は角をもつ。 穿孔後撫で。	上下に凸帯の存在 を思わせる横撫で あり。上下横撫で 間に凸帯？あり。 断面は破損部から 推定すると、三角 形を呈する。 長さ10.0cm・残存 部0.7/2.3 凸帯の周囲を指撫 で。	縦刷毛 9本/2 cm	右傾斜刷毛 5本/2 cm ⇒布撫で	破片。 焼成は非常に堅緻 で、須恵質に近い。 凸帯部分は一周せ ず、突起状を呈し ている。この突起 を狭んで上下端に 横撫でが巡ってお り、本来の凸帯は 突起の上下に存在 したと思われる。
55図-12	(19.8)	—	b 1.0 c 1.2	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	凸帯上2.5 cm で孔下端。 残存部孔は、 横に長い。 穿孔後撫で。	A 0.4/2.1	縦刷毛 17本/2 cm	右傾斜刷毛 17本/2 cm ⇒布撫で	破片。

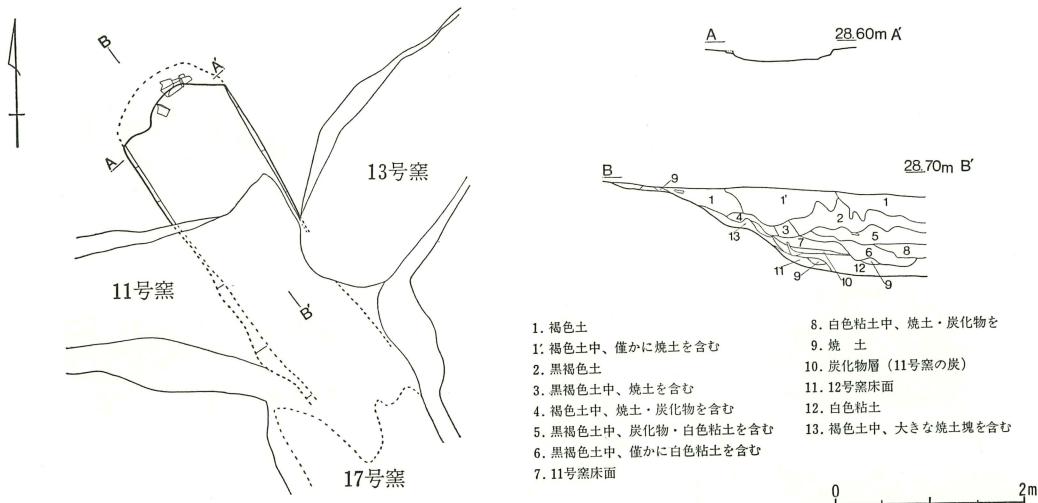


第54図 11号窯跡出土遺物 (1)



第55図 11号窯跡出土遺物 (2)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外面調整	内面調整	備 考
55図-13	(18.3)	底(21.6)	底1.7 1.3	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：外面橙褐色 (一部灰褐色)・内 面茶褐色	—	A 0.4/1.7	縦刷毛 17本／2cm	横刷毛 17本／2cm △斜指撫で 底面周辺は、 指横撫で	破片。 底面に篠状圧痕あ り。 12と近似。



第56図 12号窯跡

## (11) 12号窯跡 (第56図)

群在する3基中の1基。南に位置する17号窯跡の窯尻部及び焼成部の一部を切って、その延長上に直線的に構築されている。西に11号、東に13号窯跡があり、それぞれ直交するように重複している。両窯跡の床面が本窯跡の床面上に乗っており、3基中最も古い。

残存長は1.34mを測るにすぎない。側壁は1.00m程残されている。残存部の最大幅は焼成部上位付近で1.40mを測る。側壁は平行するものと思われる。窯尻部は攪乱を受け末端部が破壊されている。幅は略90cmを測ると考えられる。

床面は焼成部上位に僅かに残されているにすぎないが、堅く良くしまっている。窯尻部は攪乱を受けているためか、褐色土が混り軟弱である。残存する床面は26度の勾配をもつ。

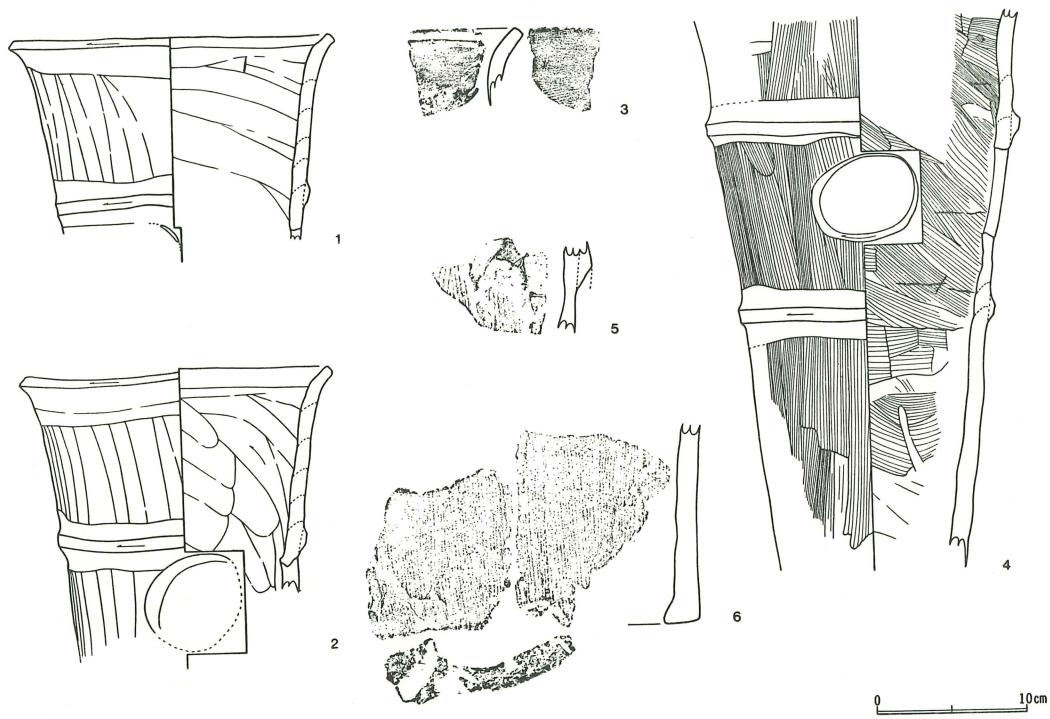
焼成部中位から焚口部、前庭部にかけては11号、13号窯に破壊されており詳細は不明である。天井部も他の窯跡同様、痕跡が残されていない。

また、本窯跡の床面の上に白色粘土を張っており、その上に11号窯の床面が乗っている。本窯跡を放棄した後、白色粘土を用いて次の窯跡（11号窯）を構築したものと考えられる。

灰原は11号、13号窯のものと混って10号、16号、17号窯の窯体内に認められる。

出土遺物は少なく、窯尻部付近に円筒埴輪片が若干出土している程度である。

半地下式無段登窯で、主軸はN-31°-Wにとる。

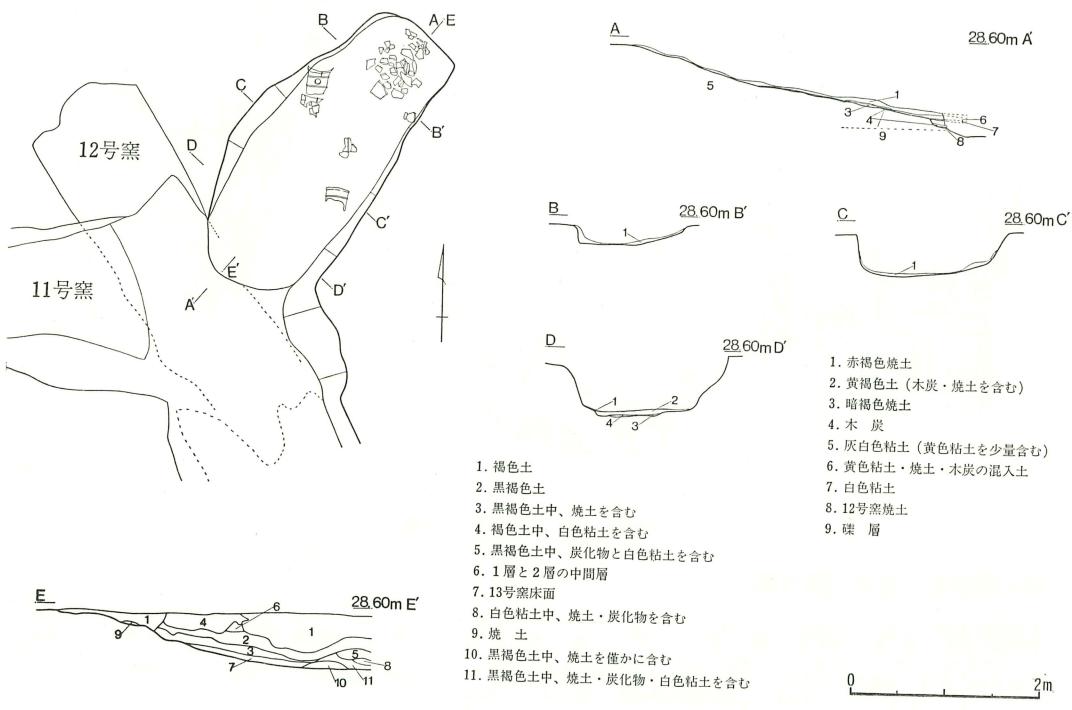


第57図 12号窯跡出土遺物

## 12号窯跡出土遺物（第57図）

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外面調整	内面調整	備 考
57図-1	13.0	口(21.8)	口0.7 a 0.8	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 晶石 焼：良好 色：暗褐色	凸帶下1.5cm で孔上端。	A' 0.3/2.0 布撫で	縦籠撫で	籠撫で↖方向	残率30%。
57図-2	(19.4)	口20.9	口0.6 a 0.8	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：普通 色：暗褐色	下段に円孔。 穿孔後無調整。	A' 0.4/2.3 右回り布横撫で	縦籠撫で	斜指撫で↖方 向	残率50%。 1.5~2.0cm幅の粘 土紐巻き上げ。
57図-3	(5.4)	—	口0.8	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 多い。 焼：良好 色：橙褐色	—	—	横撫で	横刷毛 5本/1cm ⇒横撫で	破片。
57図-4	(36.8)	—	a 1.0 b 0.8 c 1.2	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：普通 色：暗褐色	第二段に円孔。 右回り穿孔。 5.8×7.1	1A 0.3/2.2 2A 0.5/2.6 右回り布横撫で	縦刷毛 9本/2.1cm	斜刷毛↖方 向 10本/2.1cm	残率60%。
57図-5	(6.1)	—	1.0	胎：少量。パミス 角岩礫 焼：良好 色：淡橙褐色	—	—	縦刷毛 8本/2cm	横指撫で	破片。形状不明。 外面刷毛調整後 高0.9cm・横幅下 端3.8cm・上端(2.2 cm)の突起が縦に 貼り付く。

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
57図-6 (13.1)	—	底2.3 1.3	胎：少量。パミス 酸化鉄粒 焼：良好 色：橙褐色	—	—	継刷毛 11本／2cm	右傾斜無で	破片。 底面に工具痕あり V字状に凹む。	



第58図 13号窯跡

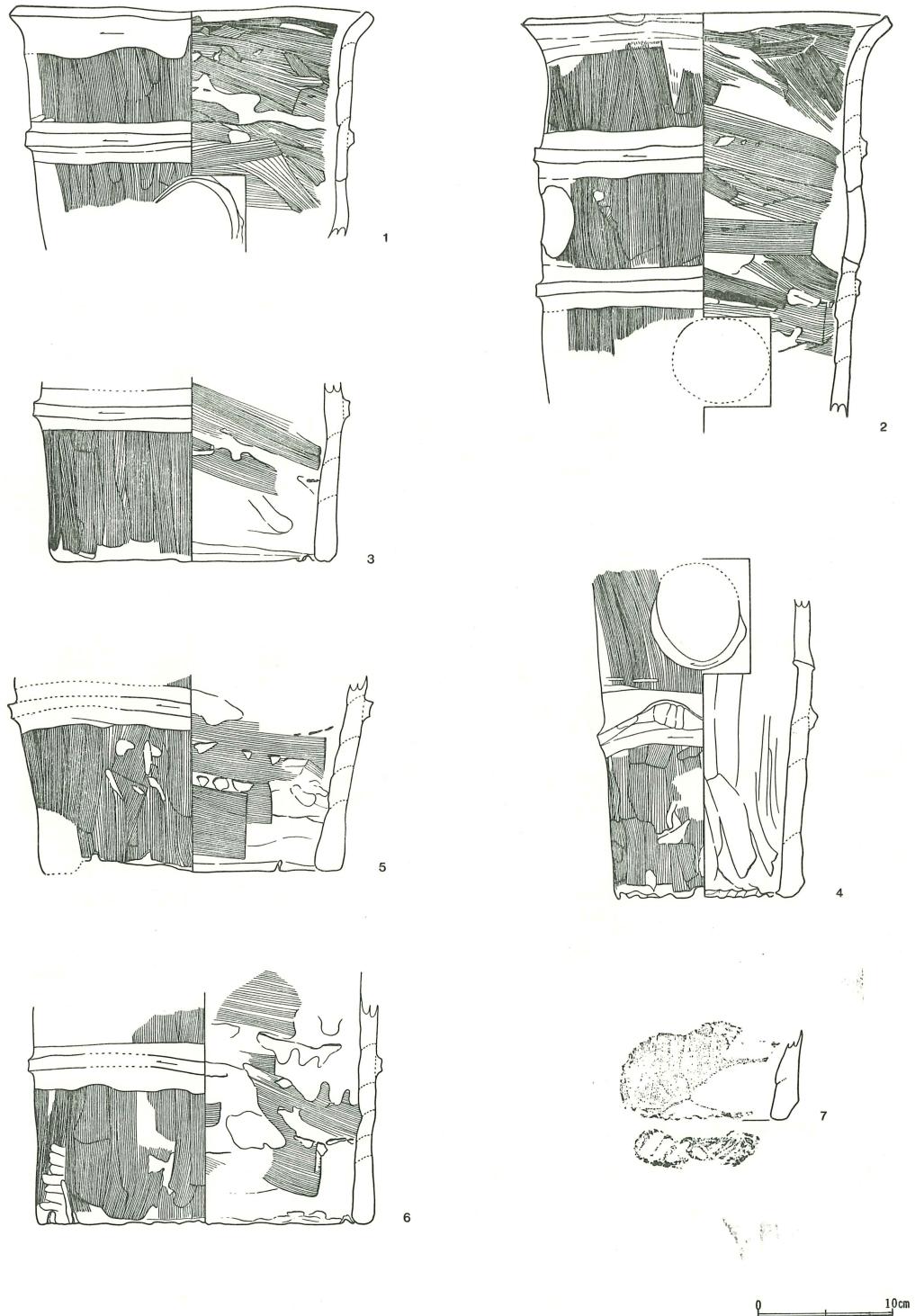
## (12) 13号窯跡 (第58図)

12号窯跡の東に隣接して存在する。北端に位置する3基の中でも比較的遺存度が良い。

床面は堅くしまっており、3.32mまで確認できた。側壁は右側が2.70m、左側が2.90m程残されている。また、床面下の精査によって、本窯跡においては3回の操業が行われたことが判明している。3枚の床面は、いずれも12号窯跡の上に乗っている。したがって、12号窯跡よりも後出であることは明白である。さらに、最終的に残された床面に密着して細かな埴輪片が、敷きつめたような状態で多量に検出された。これらの細片は、本窯跡で焼かれたもの一部とは考えられず、故意に付設されたものと思われる。焚口部付近で段をもつが、これは本窯跡に直接かかわるとみるよりも、後出の11号窯跡構築時に形成されたものと考えた方が妥当である。

灰原は16号、17号窯等、すぐ南に位置する窯跡内に認められる。11号、12号窯同様、斜面下には投棄せず、手近かな窪地を利用している。

遺物は焼成部から窯尻部にかけてまとまって出土している。いずれも円筒埴輪である(第59図)。主軸をN—45°—Wにとる。



第59図 13号窯跡出土遺物

## 13号窯跡出土遺物(第59図)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外面調整	内面調整	備 考
59図-1	(18.0)	口(27.1)	D10.9 a1.0 b0.8	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：暗褐色	下段に円孔。	A 0.5/1.8 右回り布横撫で	縦刷毛 19本/2.2cm △口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛 17本/1.9cm △口縁部横撫 で	残率40%。
59図-2	(29.8)	D127.5	D10.8 a1.2 b1.2 c1.1	胎：やや多い。バ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・金雲母 焼：良好 色：淡赤褐色（一部暗褐色）	上から二段目 と三段目(30° 違えて穿孔。 右回り穿孔。）	3 A 0.3/1.6 4 A 0.4/2.0 右回り布横撫で	縦刷毛 15本/1.9cm △口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方向 20本/2.4cm 13本/1.3cm △口縁部横撫 で	残率70%。 2.5cm幅の粘土紐 を左回りに巻き上 げる。
59図-3	(13.3)	底(21.5)	底1.6 1.3	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好・堅緻 色：赤褐色	—	A 0.4/2.2 右回り布横撫で	縦刷毛 18本/2.1cm	斜刷毛↖方向 16本/1.8cm 基部は、あら かじめ撫でを 施す。	残率70%。 基部は5cm幅の粘 土板。 底面に築状圧痕あ り。
59図-4	(24.3)	底14.3	底1.7 b1.1 c1.4	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：橙褐色	第二段に円孔。 右回り穿孔後 無調整。 ×6.6	A 0.6/2.1 右回り布横撫で	縦刷毛 13本/1.7cm	斜指撫で↖方 向	残率80%。 右回り枯土紐巻き 上げ。 底面に築状圧痕。 基部に擬似黒斑あ り。対称位置にも あるが、一方は黒 色、他方は灰黒色 を呈する。
59図-5	(14.5)	底22.0	底2.0	胎：微量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：淡褐色	—	A 0.5/2.2 右回り布横撫で	縦刷毛 25本/3.3cm	横刷毛↖方向 斜刷毛↖方向 42本/4.6cm	残率80%。 2.5cm幅の粘土紐 を右回りに巻き上 げる。
59図-6	(18.7)	底(25.2)	底1.5 1.2	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・晶石 焼：良好・堅緻 色：暗褐色	—	A 0.4/2.1 右回り布横撫で	縦刷毛 20本/2.2cm	斜刷毛↖方向 24本/2.9cm 基部は、あら かじめ布撫で を施す。	残率40%。 基部は5cm幅の粘 土板。 2cm幅の粘土紐 巻き上げ。 底面に築状圧痕。
59図-7	(6.6)	—	底1.0 1.5	胎：少量。バミス 酸化鉄粒 焼：良好 色：淡褐色（外 面の一部黒灰色）	—	—	縦刷毛 16本/2cm	斜刷毛 9本/1cm	破片。 基部は4cm幅の粘 土板。 底面に築状圧痕。 底部外縁部に、刀 子によると思われ る削り痕が残る。

## (13) 14号窯跡(第60図)

B群の西端に位置している。隣接する15号窯跡によって燃焼部及び焚口部が破壊されている。

床面の残存長4.20m、側壁は平行しており焼成部中位で1.48m、窯尻部で80cmを測る。平面形態は全体に細長い形状を呈する。

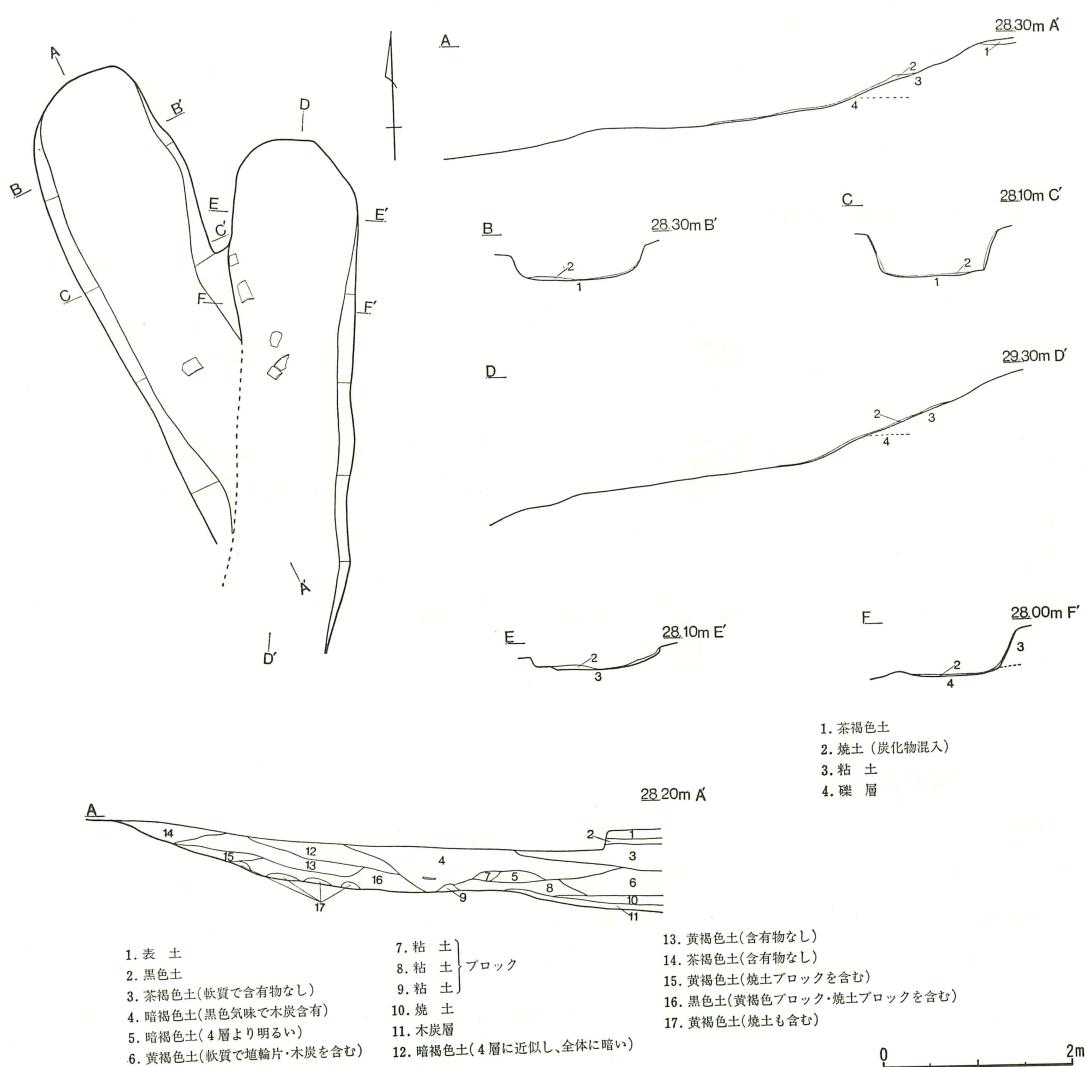
床面は全面に亘りよく焼けており堅緻である。また、焼成部中位までは比較的勾配はゆるいが、焼成部上位から窯尻部にかけては約22度の傾斜をもつ。したがって、他の窯跡と同じように、床面の縦断面が「く」の字状を呈する。

燃焼部から焚口部にかけて破壊されているので詳細は不明だが、その位置、状況等からみて焚口部と前庭部の一部は斜面にかかっていたと考えられる。前庭部と思われる部分の斜面が急傾斜になるように整形された痕跡がある。同じような位置にある他の窯跡同様、かき出した灰を斜面下に落としやすくするためと考えられる。

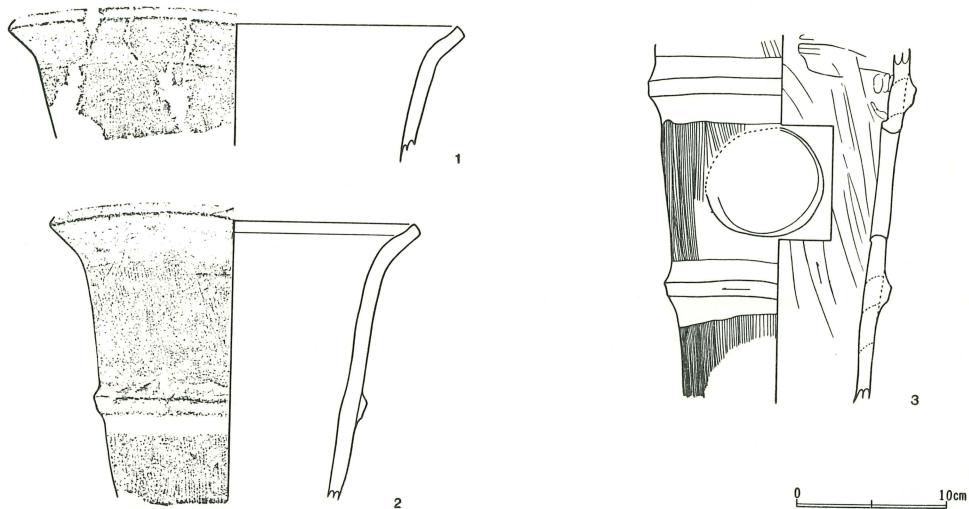
灰原は斜面の裾部からテラス状平坦地にみられるが、15号窯跡のものと混在しており区別することは不可能な状態であった。おそらく本窯跡廃棄後ただちに、15号窯跡の構築にかかったものと考えられる。

遺物は少なく、燃焼部から焼成部にかけて若干の円筒埴輪が出土している（第61図）。

半地下式無段登窯で、主軸をN—58°—Wにとる。



第60図 14号・15号窯跡



第61図 14号窯跡出土遺物

#### 14号窯跡出土遺物(第61図)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外面調整	内面調整	備 考
61図-1	(7.9)	口(24.6)	口10.8	胎：やや多い。バ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 10本／2cm ⇒横撫で	右傾斜刷毛 5本／1cm ⇒横撫で	破片。
61図-2	(18.6)	口(24.0)	口0.8 a1.0 b1.0	胎：少量。バ ミス・酸化鉄粒・角岩礫 焼：普通 色：橙褐色	—	A' 0.4／2.2	縦刷毛 9本／2cm ⇒口縁部横撫 で	右傾斜刷毛 ⇒口縁部横刷 毛⇒横撫で	破片。 内面磨滅著しい。
61図-3	(23.4)	—	a1.1 b1.0 c1.0	胎：やや多い。バ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・晶石・珪 酸体 焼：良好・堅緻 色：淡橙褐色	下から二段目に 円孔。 穿孔後指撫で。 (7.1)×(7.8)	1 A 0.5／3.4 2 A 0.6／2.9 右回り布横撫で	縦刷毛 9本／2cm	斜指撫で↖方 向	残率50%。

#### (14) 15号窯跡(第60図)

西に隣接する14号窯跡を切っており、同窯跡よりも後出である。全長5.45m、幅は燃焼部で1.23m、焼成部1.20m、窯尻部では55cmを測る。側壁はほぼ平行し、幅のせまい長方形を呈する。

床面はよく焼けており堅い。焚口部から焼成部中位にかけては7度、焼成部上位から窯尻部にかけてやや角度を増して23度の勾配をもつ。

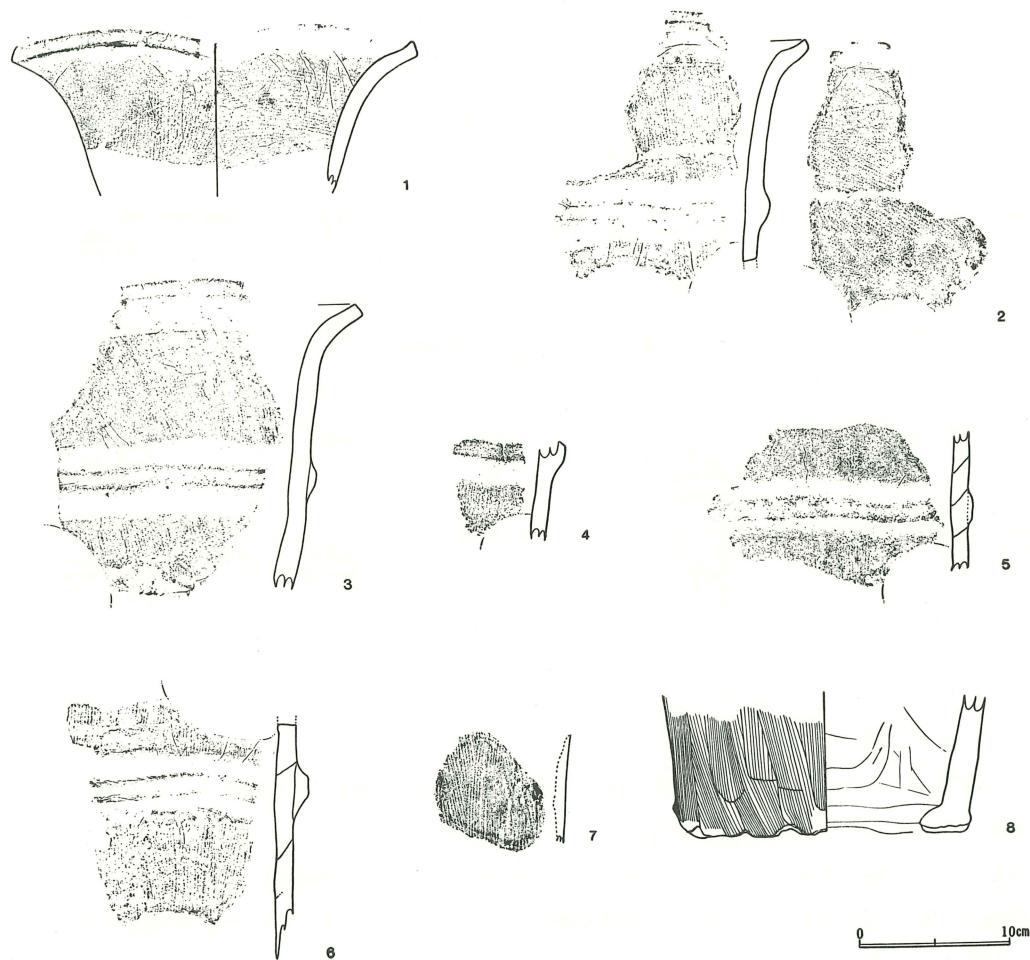
焚口部は斜面にかかっている。前庭部にあたる斜面は削られており、急斜面となるように整形されている。整形した急斜面を利用して、灰を斜面下にかき出している。灰原は隣接する14号窯、さらに、東側に群在する8基のものと重複しているが、新旧関係は把握できなかった。したがってB群斜南面下灰原として一括した。

天井は認められない。このことは他の窯跡と変わることはない。

2基の重複は、この14号、15号窯跡だけである。焚口部付近、灰原を共有しているのは、他の重複する窯跡と同じである。

遺物はさほど多くない。燃焼部から焼成部にかけて円筒埴輪片が若干出土しただけである。

主軸を N—36°—W にとる、半地下式無段落窯である。



第62図 15号窯跡出土遺物

## 15号窯跡出土遺物(第62図)

図版番号	器 高	器 径	器 径	器 質	透 孔	凸 带	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
62図-1	(10.0)	口(26.6)	口1.0 a 1.0	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：赤褐色	—	—	縦刷毛 9本／12cm ⇒横撫で	右傾斜刷毛 10本／12cm ⇒横撫で	破片。
62図-2	(19.2)	—	口1.0 a 1.3 b 1.2	胎：やや多い。バ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：普通 色：淡褐色	—	B' 0.6／2.4 右回り横撫で	縦刷毛 10本／12cm ⇒口縁部横撫 で	右傾斜刷毛 6本／11cm ⇒口縁部横撫 で	破片。
62図-3	(19.2)	—	口1.0 a 1.3 b 1.4	胎：やや多い。バ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：普通 色：淡褐色	凸帶下1.6cm で円孔上端。 穿孔後撫で。	B' 0.4／2.8 右回り横撫で	縦刷毛 10本／12cm	右傾斜刷毛 10本／12cm	破片。
62図-4	(6.7)	—	1.0	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：普通 色：橙褐色（外面 一部淡褐色）	凸帶下3.4cm で円孔上端。 穿孔後撫で。	B 0.6／2.0 右回り横撫で	縦刷毛 6本／1cm	—	破片。 内面磨滅。
62図-5	(9.5)	—	1.0 1.1	胎：少量・バミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：普通 色：橙褐色	凸帶下1.6cm で円孔上端。 穿孔後撫で。	C 0.4／2.6	縦刷毛 11本／2cm	右傾斜指撫で	破片。 2.0cm幅の枯土紐 巻き上げ。
62図-6	(15.2)	—	1.1 1.1	胎：少量。バミス 角岩礫・珪酸体 焼：良好 色：淡橙褐色	凸帶上2.6cm で円孔下端。 穿孔後指撫	A 0.9／3.9 右回り布横撫で	縦刷毛 10本／2cm	右傾斜刷毛 5本／1cm ⇒縦指撫で	破片。
62図-7	(7.2)	—	—	胎：少量・バミス 角岩礫 橙：普通 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 5本／1cm	—	破片。 内面剥落。
62図-8	(10.7)	底(19.9)	底3.3 1.1	胎：多量。バミス 角岩礫 焼：良好 色：淡褐色	—	—	縦刷毛 11本／1.8cm	指撫で	残率50%。 底面に縦状圧痕あ り。

## (15) 16号窯跡(第63図)

8基群在する窯跡のひとつ。9号窯の西に位置する。17号、19号窯と重複しているが、いずれも本窯跡が切っており、比較的の遺存度は良い。

全長4.70m、幅は燃焼部で1.45m、焼成部で2.09m、窯尻部で90cmを測る。

床面は、焚口部から焼成部にかけては良く焼けており、しっかりしているが、窯尻部付近は不安定で凹凸もあり軟かい。断面図をみると、焚口部は平坦だが燃焼部では6度の勾配をもち、焼成部から窯尻部にかけては23度の傾斜をもっている。

焚口部は19号窯の窯尻部付近に乗っており、また、すぐ西に接する17号窯を切っている。

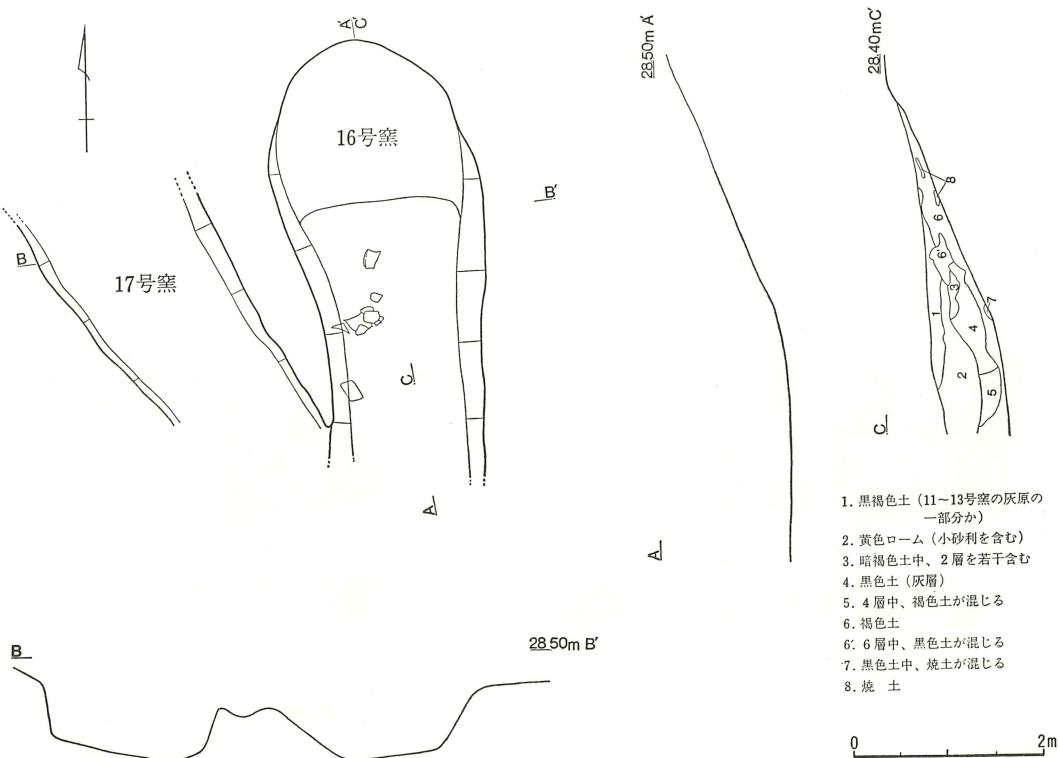
灰原は、19号窯の窯体内及び斜面下にあるが、隣接する他の窯跡のものと混っており、本窯跡だけを抽出するのは困難である。

さらに、本窯跡の窯体内には2枚の灰層が認められる。これは、北側に接する11号～13号窯の灰層と考えられる。しかし、この灰層中から出土する遺物が、上記3基のいずれに帰属するかは、

残念ながら不明とせざるをえない。

焼成部付近から円筒埴輪が出土しているが、比較的焼成も良く、大形のものが目立つ（第64、65図）。

他の窯跡同様半地下式無段登窯で、主軸をN—8°—Wにとる。



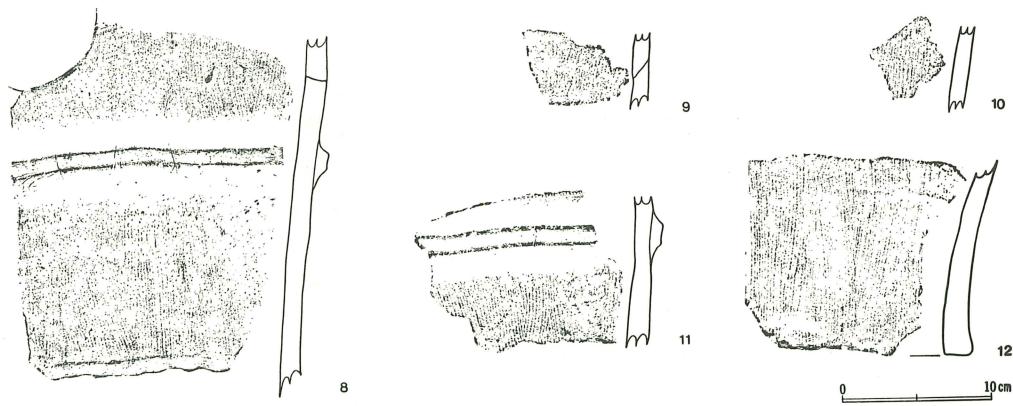
第63図 16号・17号窯跡

### 16号窯跡出土遺物（第64・65図）

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外面調整	内面調整	備 考
64図-1	(20.0)	口(36.0)	口1.0 a 1.0 b 1.0	胎：やや多い。バ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	A 0.9/3.2 右回り布横撫で	縦刷毛 13本/2.7cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	横刷毛←方向 13本/2.6cm ⇒口縁部横撫 で	残率30 %。
64図-2	(18.4)	口(28.9)	口1.0 a 1.1 b 1.0	胎：少量。バミス 角岩礫・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：淡赤褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	A 0.5/3.7 右回り布横撫で ⇒箒撫でつけ	縦刷毛 13本/2.5cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方向 口縁部付近は 横刷毛 11本/2.5cm ⇒口縁部横撫 で	残率30 %。
64図-3	(20.6)	口(36.8)	口0.7 a 1.4 b 1.3	胎：やや多い。バ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体僅 少。 焼：良好・堅緻 色：赤褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	A 0.5/3.4 右回り布横撫で	縦刷毛 12本/2.4cm 右回りに施す。 ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方向 ・横刷毛 12本/2.5cm	残率40 %。 2.0～2.8cm幅の粘 土紐巻き上げ。 口縁部内面に箒記 号？



第64図 16号窯跡出土遺物 (1)



第65図 16号窯跡出土遺物 (2)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外面調整	内面調整	備 考
64図-4	(16.6)	口25.9	口11.1 a 1.2 b 1.2	胎：少量・バミス 酸化鉄粒 焼：良好 色：淡赤褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	A 0.6/2.7 右回り布横撫で	縦刷毛 11本/2.5cm ⇒口縁部右回り布横撫で	布撫で 口縁部付近 横刷毛⇒布撫で	残率80%。 2.0~3.0cm幅の粘土紐を右回りに巻き上げる。 口縁部内面に篦記号。
64図-5	(29.5)	底(20.4)	底1.4 1.4	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：淡橙褐色	—	A 0.5/3.3 右回り布横撫で	縦刷毛 11本/2.4cm 右回りに施す。	斜指撫で↖方向	残率40%。 底面に篠状压痕あり。
64図-6	(14.5)	口(23.4)	口10.8 a 1.2	胎：少量。バミス 酸化鉄粒 焼：良好 色：橙褐色	—	A 0.6/2.2	縦刷毛 10本/2cm ⇒口縁部横撫で	右傾斜刷毛・ 横刷毛⇒指撫で⇒口縁部横撫で	破片。
64図-7	(12.6)	底(22.3)	底2.3 1.4	胎：やや多い。バ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・晶石 焼：良好・堅緻 色：淡橙褐色	—	—	縦刷毛 12本/2.5cm	基部を横布撫で⇒斜布撫で↖方向	残率40%。
65図-8	(24.0)	—	b 1.2 c 1.3	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：外面橙褐色・ 内面淡橙褐色	上段に円孔。 穿孔後無調整。	A 0.8/3.4 右回り横撫で	縦刷毛 10本/2cm	上段右傾斜刷毛 下段布撫で	破片。
65図-9	5.2	—	1.1	胎：少量。酸化鉄 粒・角岩礫 焼：良好 色：淡橙褐色	—	—	縦刷毛 9本/2cm	指撫で	破片。
65図-10	5.9	—	1.0	胎：少量。バミス 角岩礫 焼：良好 色：淡褐色	—	—	縦刷毛 9本/2cm	撫で	破片。
65図-11	10.2	—	1.2	胎：少量。バミス 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：外面淡橙褐色 内面灰褐色	—	A 0.7/3.7 右回り横撫で	縦刷毛 10本/2cm	横刷毛 5本/1cm ⇒横指撫で	破片。
65図-12	13.0	—	底1.8 1.2	胎：少量。バミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 9本/2cm	基部を右傾斜 指撫で ⇒横・斜方向 撫で	破片。

### (16) 17号窯跡 (第63図)

19号窯跡の窯尻部を切って、その延長上に構築されていた。同じようにして本窯跡の延長上に伸びる12号窯跡によって窯尻部が破壊されている。さらに、右側壁の一部が16号窯によって切られている。したがって、窯尻部、焚口部の状態は不明であり、燃焼部、焼成部の床面が確認されたにとどまる。

燃焼部から焼成部にかけては、床面が良く焼けており堅緻である。勾配も4度とゆるく、平坦に近い。

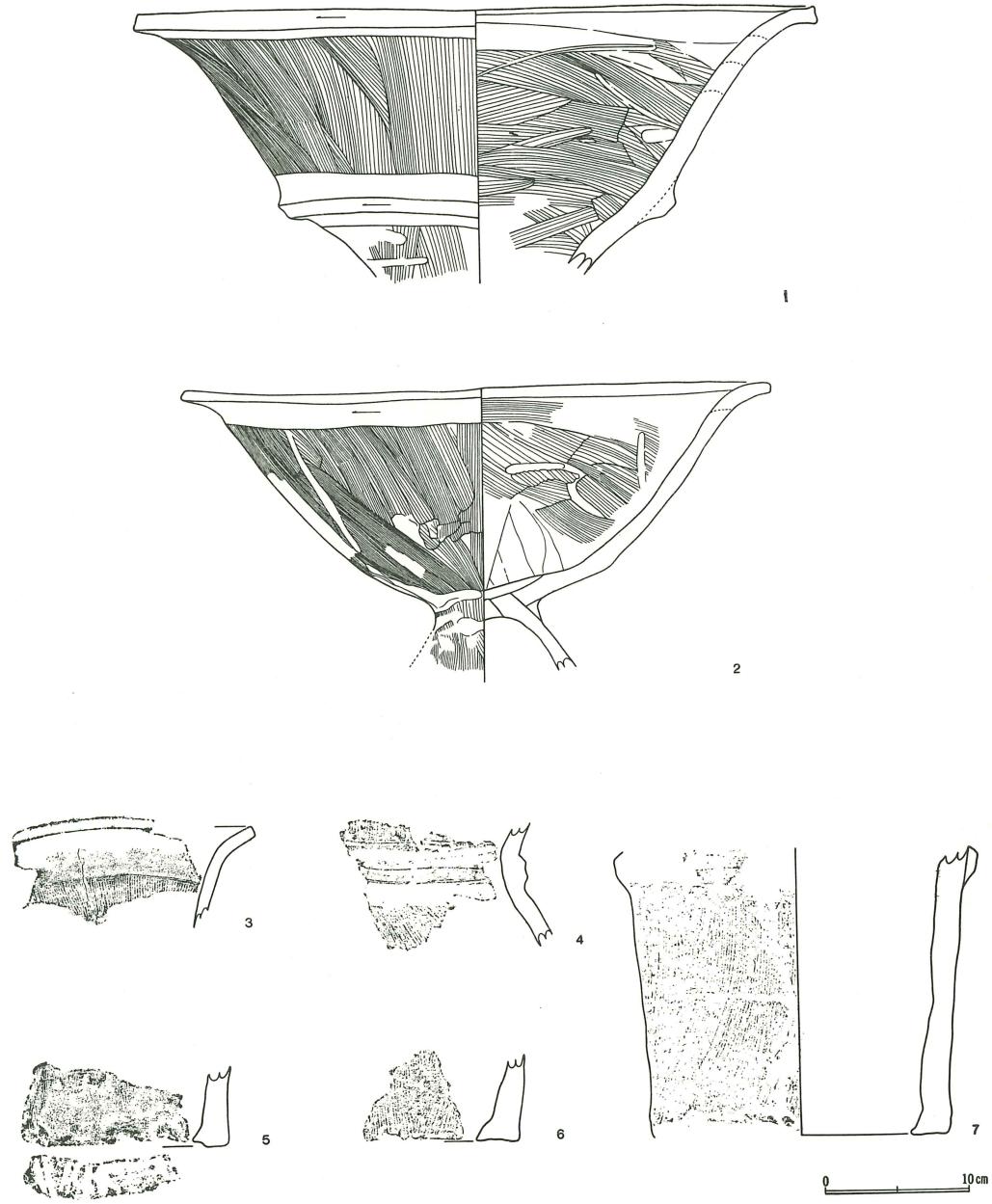
幅は焼成部で1.72m、燃焼部で1.38mを測り、焼成部に最大幅がある。

灰原は19号窯跡の上に乗っており、さらに斜面下に落とされたものと考えられる。しかし、隣接する10号、16号窯等の灰と混在しており、各窯跡毎に分離するのは困難であった。

ロームを掘りこんだ半地下式無段登窯で、主軸をN—38°—Wにとる。朝顔形円筒埴輪、高坏形の埴輪等が出土している(第66図)。

### 17号窯跡出土遺物(第66図)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
66図-1	(18.5)	口(47.4)	口1.1 a 1.5 b 1.6	胎：やや多い。酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体僅少。 焼：良好 色：暗赤褐色	—	A 1.0/5.0 右回り布横撫で	縦刷毛 12本/2.7cm ⇒口縁部右回り布横撫で	斜刷毛⇒方向 11本/2.4cm ⇒口縁部横撫で	残率30%。 朝顔形。
66図-3	(6.3)	—	口0.8	胎：少量。パミス酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：外面淡褐色・ 内面橙褐色	—	—	縦刷毛 12本/2 cm ⇒右回り横撫で	横刷毛 12本/2 cm ⇒横撫で	破片。
66図-4	(8.6)	—	b 1.1 c 1.1	胎：少量。パミス酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：橙褐色	—	A 0.5/2.6	縦刷毛 10本/2 cm	横刷毛・右傾斜撫で	破片。 内面磨滅。
66図-5	(5.9)	—	底3.0 1.2	胎：少量。パミス角岩礫 焼：良好 色：外面橙褐色・ 内面暗褐色	—	—	縦刷毛 11本/2 cm ⇒指撫で	横指撫で	破片。
66図-6	(5.4)	—	底2.5 1.4	胎：少量。パミス酸化鉄粒・珪酸体 焼：普通 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 18本/2 cm	横指撫で	破片。 底面に篠状压痕あり。
66図-7	(19.7)	底(20.4)	底2.6	胎：少量。パミス酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：外面橙褐色・ 内面暗褐色	—	A 0.6/3.0	縦刷毛 10本/2 cm	基部付近は横指撫で⇒右傾斜指撫で	破片。



第66図 17号窯跡出土遺物

### 大刀形埴輪

中央に穿孔のあることから、矢視部分と考えておく。 $\frac{1}{2}$ が残存し、先端部が尖る。覆土からの出土である。残存長7.3cm、中央幅6cm、器厚1.6cmを測り、中央の孔は推定径1.3cmである。胎土はパミス・酸化鉄粒等の砂粒を僅かに含む。焼成は非常に良好で堅緻であり、淡褐色を呈する。外面中央部に先端から孔中心に向けての朱彩が施されている。

孔の存在から一応矢視と考えたが、その場合に、先端の尖る形態が疑問として残る。

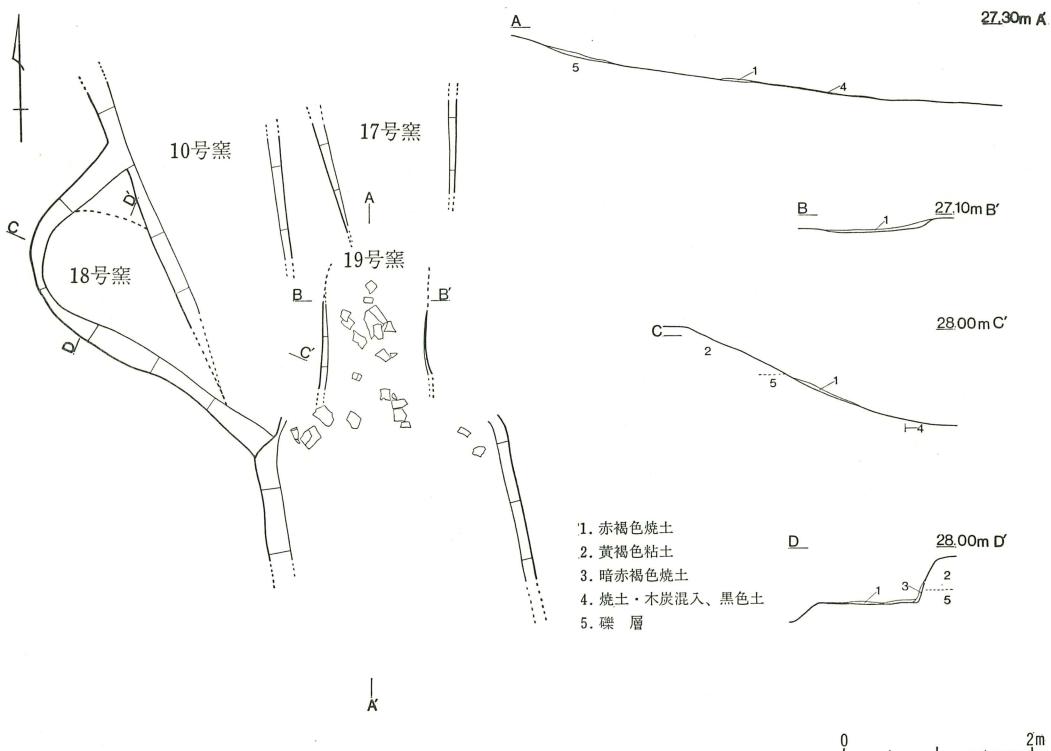
### 高坏形埴輪（第66図—2）

脚部下端を欠く。10号窯灰原出土の破片と接合している。残存高14.8cm、推定口径46cm、器厚は坏部で1.1cm、脚部で1cmを測る。坏部は大きくすり鉢状に開き、口縁部で外傾して口唇は水平になる。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は良好であり、橙褐色を呈する。

脚部と坏部を接合し、脚内側と接合部周縁に粘土を貼り、撫でつけている。その後、坏部に刷毛調整を行い、さらに坏部底面の平滑化と、接合の強化を目的として、粘土を坏底面に貼り、撫でつけている。

外面は、縦刷毛14本／2.5cmを右回りに施し、口縁部は右回りの横撫で調整。内面は←方向の横刷毛9本／2cmを施し、口縁部を横撫する。

第51図—12、第84図—16と同器種である。



第67図 18号・19号窯跡

(17) 18号窯跡 (第67図)

10号窯跡によって、焚口部、燃焼部、焼成部の大部分を破壊され、窯尻部と焼成部の一部が残されているにすぎない。

残存する床面は僅かであるが、24度の勾配をもっている。焼成部での床面はよく焼けており堅緻であるが、窯尻部は軟弱で、焼土も薄くなる。

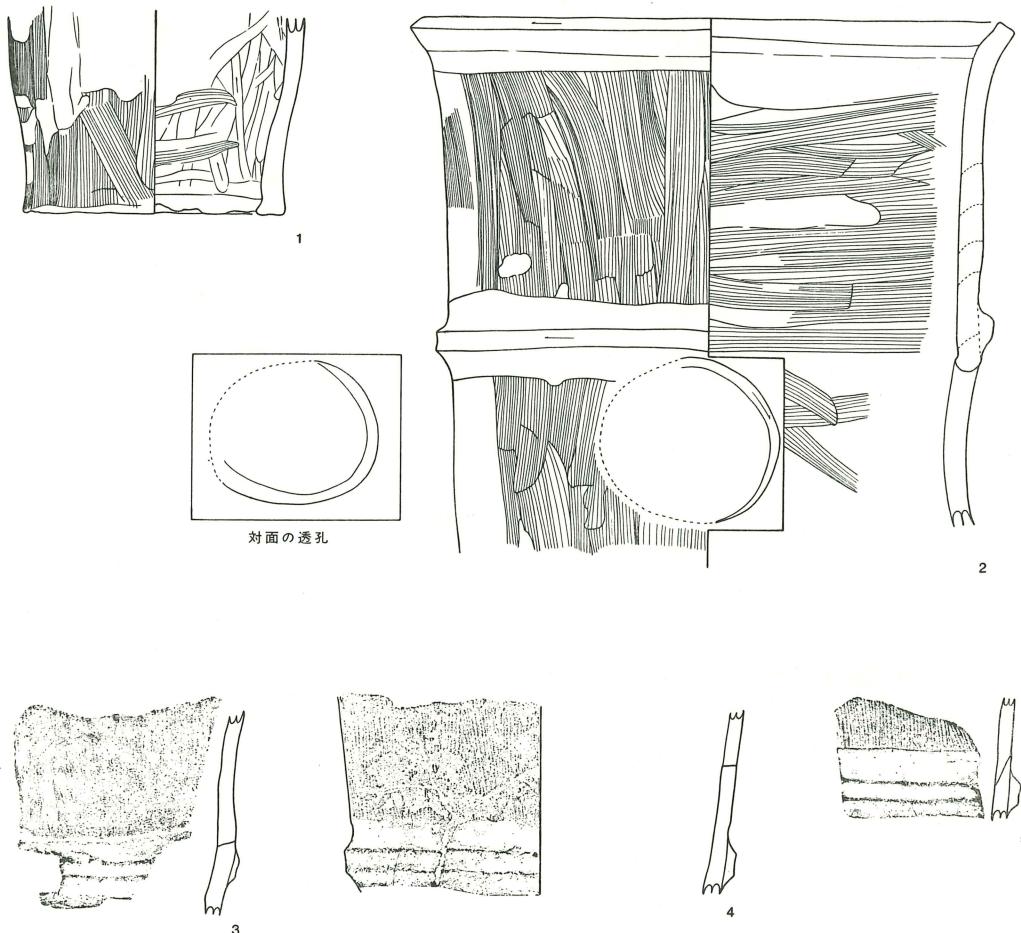
幅は、推定であるが焼成部上位で1.40m前後になると思われる。おそらく、両側壁が平行する長方形プランをもった窯と考えられる。

いかんせん、大部分を破壊されており、全容を知るすべはない。

灰原は、19号窯の焚口部、前庭部をへて斜面部にあると思われるが、他窯跡と分離させることはできなかった。

遺物は左側壁に密着した状態で円筒埴輪片が出土している。

主軸はN—86°—W。ロームを掘り込んだ半地下式無段登窯である。



第68図 19号窯跡出土遺物

## (18) 19号窯跡（第67図）

17号窯跡の前庭部に床面の一部が僅かに確認されたもので、窯体の大部分が10号、16号、17号、18号窯跡の構築の際に破壊されている。したがって、B群の中にあっても、かなり古い時期の操業と考えられる。

ただ、焚口部にあたると思われる部分に、9号窯にみられたような段がみられ、灰のかき出し口をもうけていると考えられる。

また、周辺の地形からみると、本窯跡は半分近くが斜面にかかっていたものと考えられる。

僅かに残された床面は、若干凹凸はあるものの、堅くしまっている。

焼成部と思われるところから若干の円筒埴輪が出土している（第68図）。

主軸、形態等は不明である。

## 19号窯跡出土遺物（第68図）

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
68図-1	(13.1)	底(17.5)	底1.9 1.2	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫 焼：良好・堅緻 色：外面淡褐色・ 内面暗褐色	上段に円孔。 穿孔後撫で。	—	縦刷毛 11本／2.4cm	縦指撫で 一部に横刷毛 ←方向が残る。 基部は横指撫 で←方向	残率30%。 底面に篠状圧痕 あり。
68図-2	(35.6)	D(40.3)	D1.3 a 1.4 b 1.5	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 僅少。 焼：普通 色：赤褐色	下段に円孔。 右回り穿孔後 指撫で。	A 1.0／3.9 右回り布横撫で	縦刷毛 10本／2.5cm ⇒D1縁部右回 り布横撫で	横刷毛 9本／1.8cm ⇒D1縁部横撫 で	残率50%。
68図-3	(13.7)	—	1.2 1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：淡褐色	—	A' 0.3／2.8	縦刷毛 9本／2cm	右傾斜刷毛⇒ 右傾斜指撫で	破片。
68図-4	(12.9)	—	0.9	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：普通 色：橙褐色	上段に円孔。 穿孔後撫で。	A 0.6／3.5	縦刷毛 9本／2cm	撫で	破片。 内面磨滅。
68図-5	(8.3)	—	1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：橙褐色	—	A 0.6／3.2 布横撫で	縦刷毛 9本／2cm	撫で	破片。 内面磨滅。

## (19) B群南斜面下灰原

本窯跡群の調査開始当初、斜面下の灰原確認調査を実施したので、B群各窯の灰原はその時点ですでに確認されていた。しかし、灰原確認調査の段階でB群に関しては9号、10号窯しか確認されておらず、斜面下に在るのは両窯跡の灰原と考えていた。また、この灰原は、右側に所在する6号～8号窯跡の灰原と重なっており、両者を合わせると斜面の裾に沿って40～45mにも達していた。

その時点では、B群に関して確認されていた窯跡数に比して、灰原が広範囲に及んでおり灰の量に注目していた。しかしその後調査がすすむにつれ、続々と新たに窯跡が発見されるによんで、灰原の在り方も一面では納得できた。だが反面各窯跡毎に遺物を選別するのがきわめて困難になっ

た。それは、灰原は斜面には認められず斜面の裾に沿って存在するのに對し、窯跡は支丘の肩部、平坦面から検出される。したがって、窯跡と灰原に関しては、途中灰原の空白の部分があり灰原から出土する遺物を個々の窯跡に帰属させることは至難の業となつたのである。そこで、主としてB群の各窯跡からかき出されたと思われる埴輪は一括して、B群南斜面下灰原出土として扱つた。同灰原の西側の限界は6号窯跡の灰原と接しているため重なり合う灰原中の遺物を須恵器と區別するという意味では、限界の把握は比較的容易であった。東側は他に窯跡がないため、灰原が消えるところが限界としてとらえられた。

また、これらの埴輪の帰属については、A群の1号～5号窯跡の灰原と同様、B群の各窯跡に確実に伴う埴輪を接合した場合は、窯跡出土として扱つたものもある。他の帰属不明のものについては、前述したようにB南群斜面下灰原として一括した。

一方、各窯跡説明の項でも触れたが、10号、16号、17号、19号窯跡の覆土に灰層が認められる。これは、上記した数基の窯跡が廃棄された後、その窪地を利用して灰及び不良製品等を投げ捨てたものと考えられる。この灰原は、上記した窯跡の北側に所在する11号～13号窯跡のものと考えられる。しかし、同灰原出土の埴輪についても各窯跡毎に分離するのはきわめて困難である。したがつてこの灰原から出土した埴輪についてもB群南斜面下灰原のものと同じ扱いとし、11号～13号窯跡灰原として一括した。

上記したように、B群については比較的古い時期の構築になる窯跡の灰原は斜面下に、新しい時期の窯跡の灰原は、廃棄された窯体内に認められる。

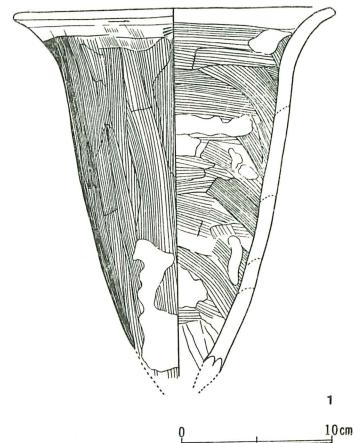
#### 甕形埴輪（第69図-1）

底部を欠いており、残率は図示の80%である。当初、第84図-15の様に、甕形を想定したが、残存部の延長から推して、むしろ甕形が妥当と思われる。残存高24.3cm、口径21.4cm、器厚は口縁部0.6cm、胴部1cmを測り、最大径を口縁にもつ。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は良好であり、橙褐色を呈する。

外面は縦刷毛12本／2cmを施し、口縁部には左回りの布横撫でを行う。内面は↖方向の斜刷毛15本／2.1cmを行い、口縁部は横撫でを施す。

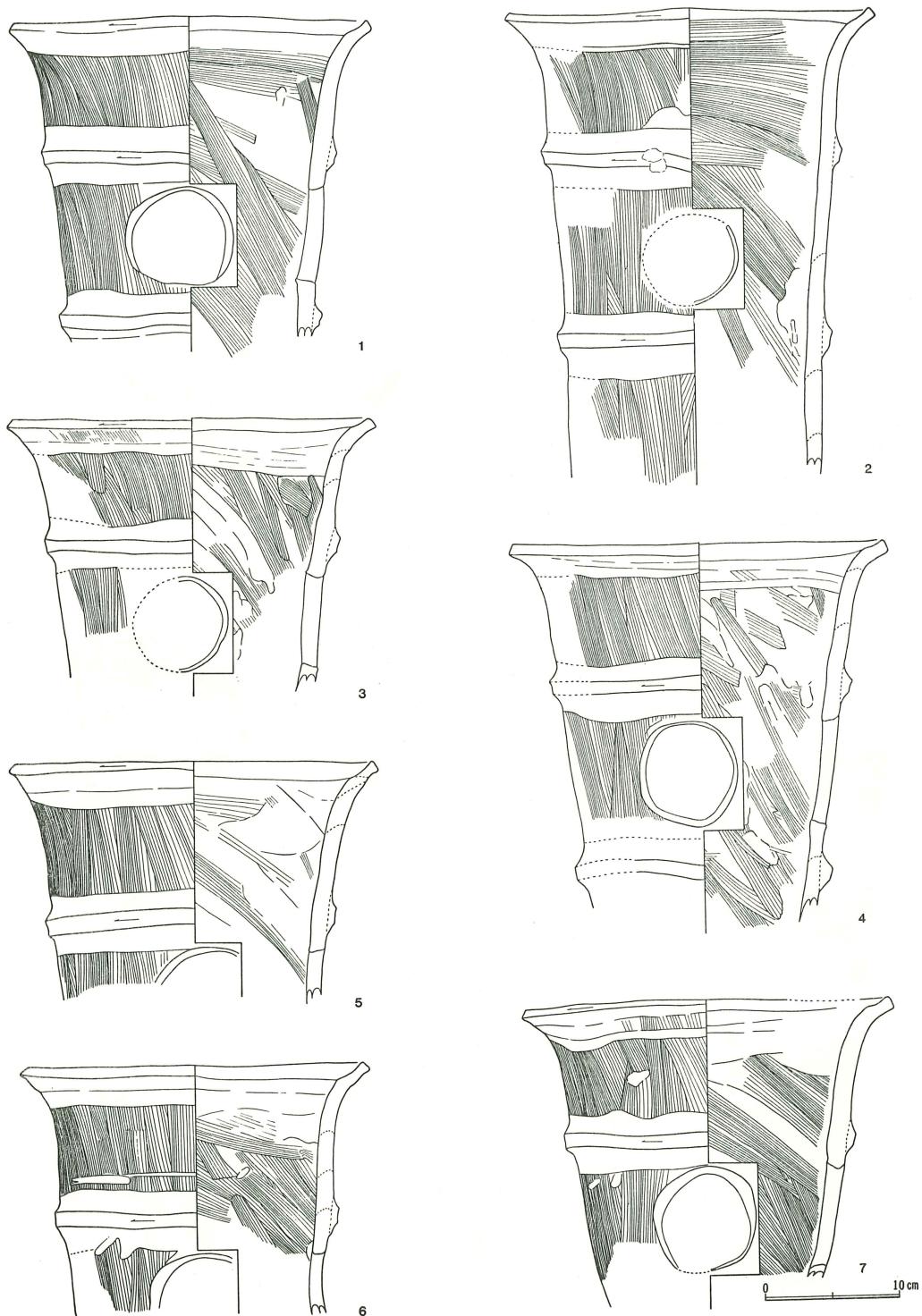
#### B群南斜面下灰原出土遺物（第70～72図）

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帶	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
70図-1	(25.4)	口27.1	口0.8 a 1.2 b 1.3	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・晶石 焼：良好・堅緻 色：淡赤褐色	上から二段目に 円孔。 穿孔後指撫で。 7.3×8.1	上A 0.5/2.5 下A 0.5/3.0 右回り布横撫で	縦刷毛 5本／1.7cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方向 9本／1.8cm ⇒口縁部横撫 で	残率60%。



第69図 11号～13号窯跡灰原出土遺物

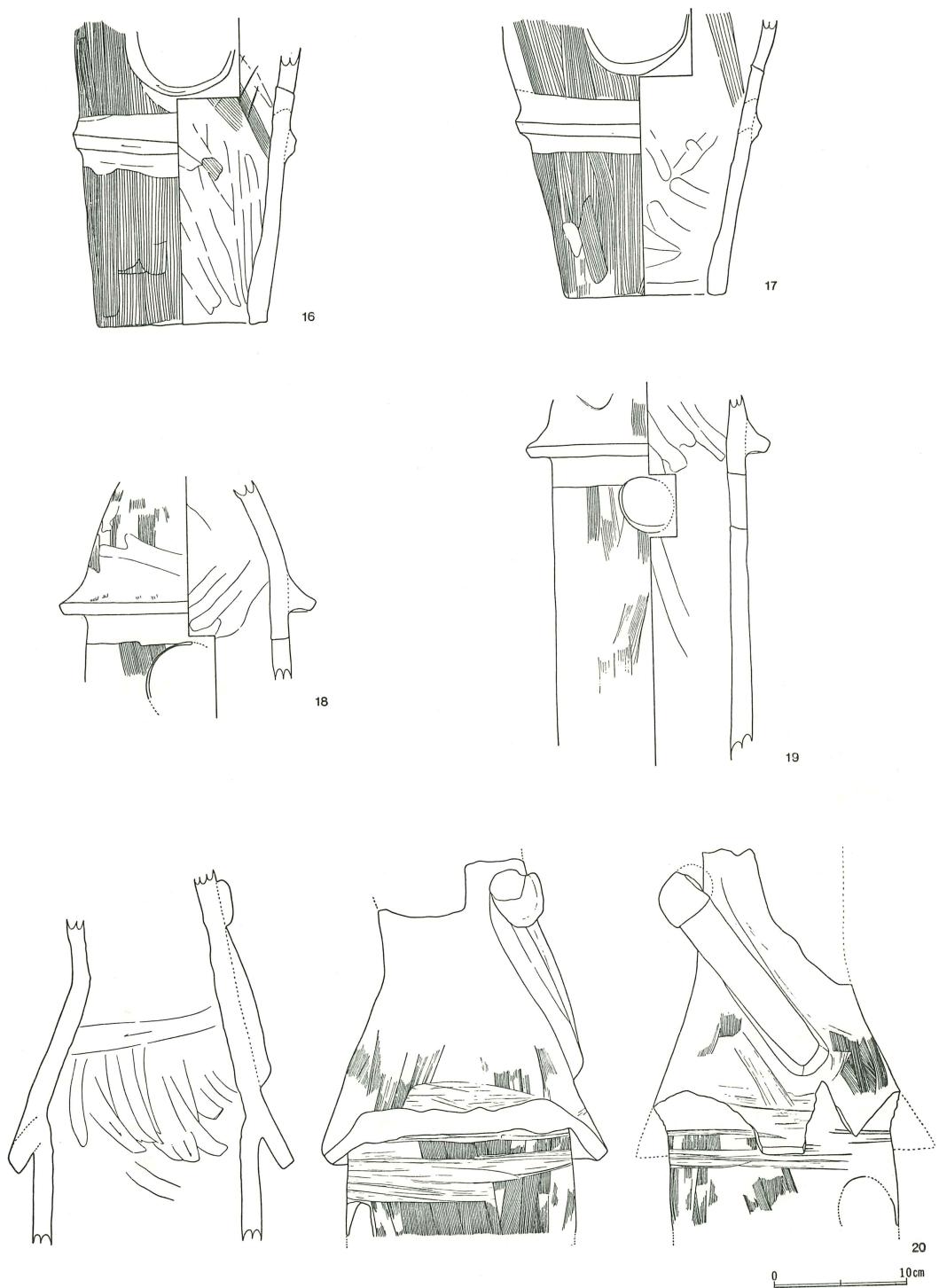
図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
70図-2	(30.5)	口(27.7)	口0.8 a 1.0 b 1.0 c 1.2	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫 焼：普通 色：淡褐色	上から二段目 に円孔。 穿孔後指撫で。	上A 0.6/3.5 下A 0.5/3.2 右回り布横撫で	縦刷毛 10本/1.9cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方向 6本/2cm ⇒口縁部付近は 横刷毛↖方向 9本/2cm ⇒口縁部横撫 で	残率30%。
70図-3	(20.3)	口(27.6)	口0.8 a 1.1 b 1.2	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・晶石 焼：良好 色：淡褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	A 0.6/3.0 右回り横撫で	縦刷毛 14本/2.5cm 左回りに施す。 ⇒口縁部横撫 で	斜刷毛↖方向 11本/2cm ⇒口縁部横撫 で	残率40%。
70図-4	(28.3)	口(27.6)	口0.9 a 1.1 b 1.2 c 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：橙褐色	上から二段目 に円孔。 穿孔指撫で。 7.7×7.3	上A 0.6/2.9 下A 0.9/3.1 右回り布横撫で	縦刷毛 10本/1.9cm ⇒口縁部横撫 で	斜刷毛↖方向 9本/1.9cm 一部指撫で ⇒口縁部横撫 で	残率60%。
70図-5	(17.7)	口(27.6)	口0.8' a 1.2 b 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：普通 色：淡褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	A 0.5/3.5 右回り布横撫で	縦刷毛 9本/2cm 右回りに施す。 ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方向 8本/1.5cm ⇒布撫で ⇒口縁部横撫 で	残率50%。
70図-6	(18.5)	口26.1	口0.7 a 1.2 b 0.9	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好・堅緻 色：橙褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	A 0.5/3.0 右回り布横撫で	縦刷毛 7本/2.1cm ⇒口縁部右回 り横撫で	斜刷毛↖方向 9本/1.9cm ⇒口縁部横撫 で	残率30%。
70図-7	(22.8)	口27.8	口0.9 a 1.4 b 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：淡赤褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。 7.8×7.7	A 0.6/2.8 右回り布横撫で	縦刷毛 9本/1.8cm ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方向 12本/1.8cm ⇒口縁部横撫 で	残率70%。
71図-8	(21.3)	口(28.9)	口0.8 a 1.3 b 1.2	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫 焼：普通 色：淡褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。 X7.6	A 0.6/2.7 右回り布横撫で	縦刷毛 10本/2.3cm 右回りに施す。 ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛↖方向 5本/1cm ⇒布撫で	残率40%。
71図-9	7.0	口(36.8)	口0.8 a 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：普通 色：淡褐色	—	—	縦刷毛 10本/2.5cm 右回りに施す。 ⇒口縁部右回 り布横撫で	布撫で ⇒口縁部横撫 で	残率30%。
71図-10	(15.0)	口(21.6)	口0.8 a 0.9 b 1.0	胎：少量。パミス 角岩礫・晶石・ 珪酸体 焼：普通 色：淡褐色	—	B' 0.4/2.3 右回り布横撫で	縦撫で（や や右傾斜氣 味） ⇒口縁部横撫 で	斜指撫で↖方 向 ⇒口縁部横撫 で	残率25%。 口縁部内面に箋記 号。
71図-11	(9.6)	口30.8	口1.1 a 1.0	胎：やや多い。酸 化鉄粒・角岩礫・ 珪酸体 焼：普通 色：淡褐色	—	A 0.6/4.0	縦刷毛 8本/1.7cm 左回りに施す。 ⇒口縁部右回 り横撫で	横刷毛↖方向 12本/2.3cm ⇒口縁部横撫 で	残率70%。 朝顔形。
71図-12	(21.8)	—	b 1.0 c 1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	上段と下段に 円孔。 穿孔後撫で。	C 0.7/2.2	縦刷毛 10本/2cm	右傾斜指撫で	破片。



第70図 B群南斜面下灰原出土遺物 (1)



第71図 B群南斜面下灰原出土遺物 (2)



第72図 B群南斜面下灰原出土遺物 (3)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
71図-13	(42.0)	底15.4	底1.5 b 1.0 c 1.1 d 1. 1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・晶石 焼：良好・堅緻 色：外面淡赤褐色 内面淡褐色	第三段に円孔。 穿孔後指撫で。	1 A 0.5/3.6 2 A 0.5/3.2 右回り布横撫で	縦刷毛 12本/3cm	布撫で	残率60%。 底面に篠状圧痕あり。
71図-14	(11.2)	底12.9	底1.8 1.4	胎：少量。パミス 酸化鉄粒 焼：良好 色：淡黄褐色	—	—	縦刷毛 11本/2.3cm	斜刷毛↖方向 ⇨基部付近を 布撫で	残率70%。 底面に篠状圧痕が 僅かに残る。
71図-15	(14.0)	底13.3	底1.6 1.3	胎：少量。パミス 酸化鉄粒 焼：良好 色：淡黄褐色	—	—	縦刷毛 6本/1.5cm	斜刷毛（やや 横） ⇨基部付近を 布撫で	残率40%。
72図-16	(23.0)	底12.9	底1.3 1.3	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：橙褐色	第二段に円孔。 右回り穿孔後 指撫で。	A 0.6/3.1 右回り布横撫で	縦刷毛 8本/1.7cm 右回りに施す。	第一段は指撫 で 第二段は斜刷 毛↖方向 6本/1.5cm	残率80%。 基部は粘土板を右 回りに接合。
72図-17	(21.2)	底12.3	底1.3 1.0	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：普通 色：淡褐色（一部 橙褐色）	第二段に円孔。 穿孔後指撫で。	A 0.7/2.4	縦刷毛 7本/1.8cm 左回りに施す。	第一段は布撫 で 第二段は斜刷 毛↖方向 6本/1.8cm	残率80%。 基部は粘土板を右 回りに接合。

### 人物埴輪（第72図-18）

腰部のみ残る。残存高15.2cm、基部推定径15.5cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫等を含み、珪酸体も微量含まれている。焼成は非常に良好で堅緻である。色調は橙褐色を呈する。

基部に粘土紐を貼付して腰部を作り出す。外面は縦刷毛16本/2cm幅のち、布撫でを施し、内面は右・左傾斜の撫でが施されている。

### 人物埴輪（第72図-19、図版59-3）

人物埴輪基部であり、腰部が僅かに残る。残存高26.2cm、基部径14.5cmを測る。胎土にパミス・酸化鉄粒・角岩礫を含み珪酸体の量は微量である。焼成は良好であり、橙褐色を呈する。

上衣に突起物が僅かに残り、大刀の端部と思われる。腰部は基部に粘土紐を貼付している。

外面調整は縦刷毛7本/2cm幅を施したのち、布撫でを施し、内面は右傾斜の撫で調整を施している。

### 人物埴輪（第72図-20、図版59-1）

大刀を持つ人物埴輪の腰部である。残存高24cm、基部径17cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で堅緻であり、橙褐色を呈する。

腰部は、基部から粘土紐巻き上げにより成形され、裾部分は、巻き上げた粘土紐の土にさらに粘土を貼付して作り出している。基部には、対称位置に孔が穿たれており、外面は縦刷毛25本/2cm幅が施されている。さらに上衣裾に隠れる部分には、木口状工具による荒い撫でが施されている。上衣にも縦刷毛25本/2cm幅が施されるが、胴くびれ部および裾部は撫で消されている。裾部の撫では、基部の荒い撫でと同様である。内面調整は、基部および、腰部↖方向の入念な撫でつけ、胴くびれ部付近には横方向の撫でが施されている。

### 人物埴輪（図版59—2）

胴部の破片である。残存高15cm、残存幅10.5cmを測る。胎土はパミス・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は良好であり、橙褐色を呈する。側面に外側からの穿孔があり、径2.8cm×3.5cmを測る。外面は刷毛調整9本／2cm幅、内面は撫で調整を施す。

### 各窯跡出土形象埴輪（部分）

#### 耳（図版61）

いずれも差し込み式で柄をもつ。1を除き、長さ10cm前後、最大幅3.5～4cmを測る木葉形を呈する。1は、長さ8.7cm、最大幅5.2cmを測り寸が短く、径が大きい。

いずれも三角形の粘土板の両端を合わせて軸を作り、下端を柄として残し、上部に粘土をつぎ足して耳を形作っている。

外・内面とも撫で調整を施しているが、1だけは、刷毛調整を施しており、形態とともに、他例と異なっている。出土遺構は、1～5号窯灰原4点、1号窯1点、4号窯1点、7号窯灰原1点、9号窯1点、B群1点であり、1は9号窯から出土している。

#### 美豆良（図版62—1）

粘土を棒状にし、先端をL字に折り曲げるも、粘土を貼付してT字形にし、中央を凹ませるものがある。長さは、いずれも破片のため不明であるが、径は平均2.5cmを計る。

出土遺構は、A群9点、1～5号窯灰原3点、7号窯灰原1点、11～13号窯灰原1点である。

#### 腕（図版62—2、63—1）

いずれも差し込み式で柄をもち、。9例中4例が柄に孔をもつ。1・2・3・4であり、棒に粘土を巻きつけて成形しており、棒を引き抜いた後の孔が認められる。孔径は約1.1cmを測る。

手先の表現の判明するものは、9例中4例（1・2・3・5）しかなく、このうち柄に孔をもつものが3例ある。3は先端を欠いているが、いずれも粘土を扁平にした上に、指4本を線刻し、親指は別に貼付している。4は、指4本の線刻を手の甲と、平に施し、2は、手の甲のみ、1は手の甲は指先だけ、手の平は指のつけ根までを線刻している。1は、左手と考えられ、その形状は手先を丸めやや捻っており、何かを握っていたのであろう。

5は、先端を扁平に潰し、指の表現の全く無いミトン式である。親指の表現もない。

出土遺構は、A群6点、1～5号窯2点、9号窯1点である。

#### 鎗（図版63—2）

破片も含めると、相当数が出土しているが、計測対象と成り得るのは70個弱であった。大きさは径3cm前後である。中に1点大形品があり、A群の出土である。 $\frac{1}{2}$ を欠損しているが、残存部で径4.8cm、高さ4.4cmを測る。

いずれも、中央に切り込みが入るが、線刻だけのものと、切り込んで開いているものの二様が認められる。線刻の細さや、切り込み断面V字形から判断して、刀子によると考えられる。

出土遺構は、1～5号窯灰原が一番多く、続いて7号窯、A群、9号窯の順であり、他に2号窯、3号窯からの出土がある。

### 尻尾（図版63—3）

いずれも差し込み式で柄をもつが、4例中4を除き、柄に孔をもつ。孔径は約1.1cmを測る。

形状は、先端の一方が突き出したL字形を呈するが、先端部が平坦なもの（4）と、丸味をもつものがある。長さは柄も含め平均14cmを測る。

当窯跡群出土の馬形埴輪に尻尾をつけた例がなく、明確な判断を下しにくいが、腕と比べた時、ほとんど曲りがないこと、先端部の作りが全く異なり稚拙であり太さに変化のないこと等から、尻尾と考えておく。出土遺構は1～5号窯灰原、A群、4号窯、7号窯である。

### 脚（図版64）

脚の破片も相当数出土しているが、底面まで残存するものを図示の対象とした。長さは、つけ根まであるもので34.6cmと36.6cmを測り、底径は平均9.4cmを測る。

ほとんどの例が、底面からつけ根に向けて直線的に径を脹らませるのに対し、2は、最大径16.2cmを測る中脹みの形態をもつ。

外面は、縦刷毛9本～11本／2cm幅を施し、内面は撫で調整を施している。このうち6は、底面周辺に幅8～10cmの擬似黒斑が認められる。

出土遺構は、対象14点中、1～5号窯灰原4点、A群3点、9号窯灰原1点、B群2点である。

（遺構一水村、遺物一岡村）



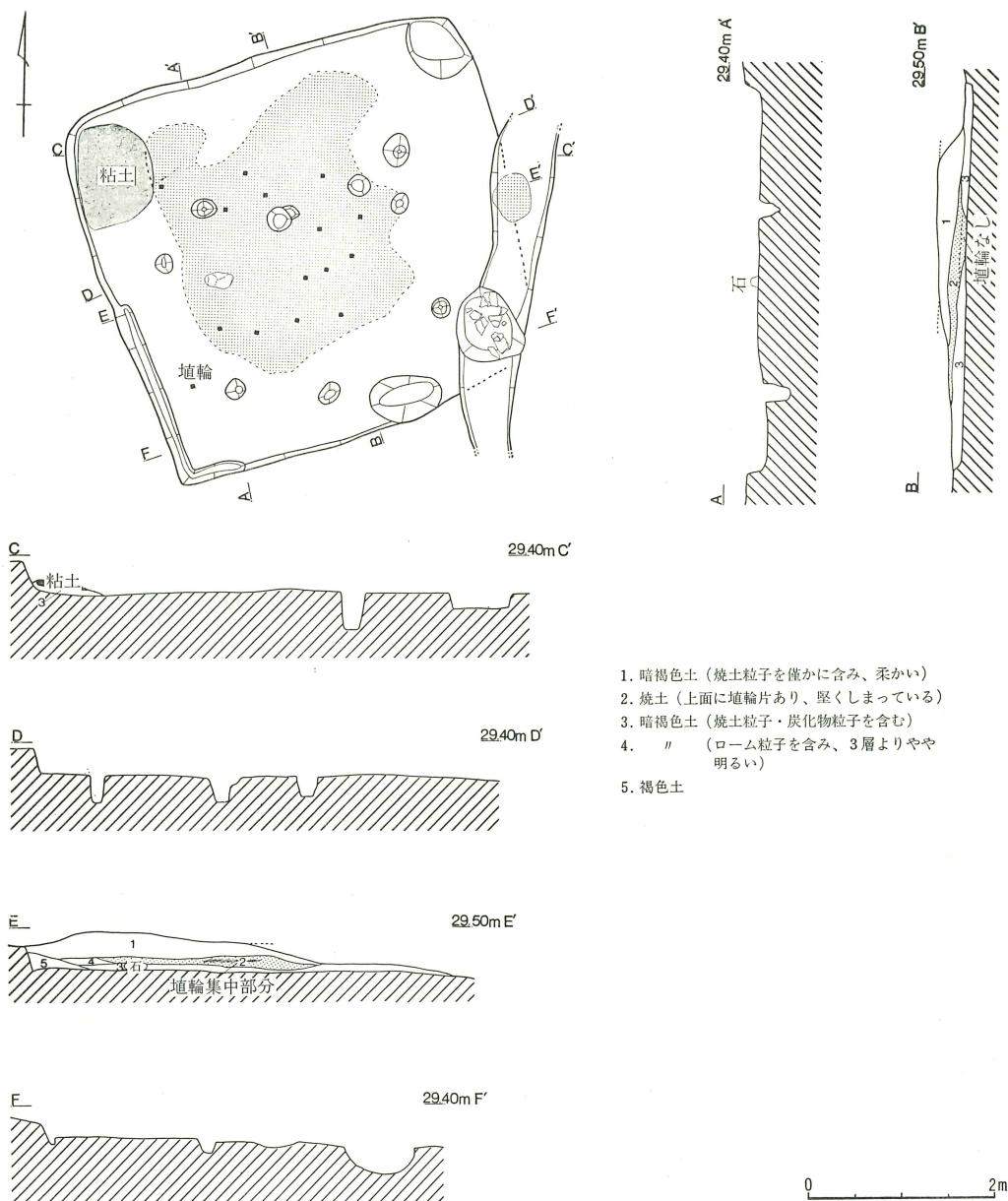
第73図 円筒埴輪底部拓影

### 3. 工房跡と出土遺物

#### (1) H-1号住居跡(第74図)

3基の住居跡の中では最も窯跡群に近く、1号窯とは10m程の距離である。この住居跡は桜山10号墳の墳丘下で確認されたもので、確認当初から焼土に混って埴輪片が検出されており、工房跡ではないかと予想されていた。

プランはやや隅の丸い方形を呈し、規模は東西4.5m、南北4.2mを計るが、カマドから東南コーナーにかけて攪乱を受けているため、カマドの遺存状態は良くない。主軸方向はN-78°-Eを示



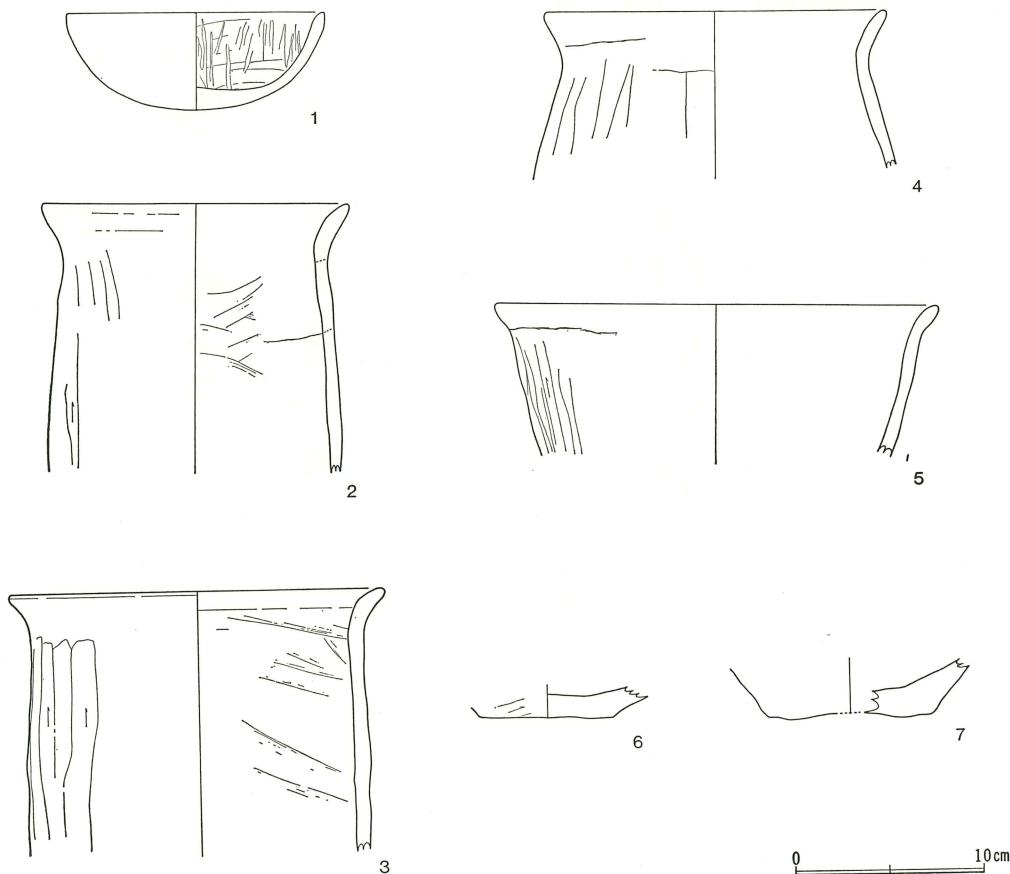
第74図 H-1号住居跡

す。壁高は南への緩斜面に立地しているため北壁の方が高く、最高部で32cmあり、南壁では10cm程である。壁溝は南西コーナー部に見られる。床面はほぼ水平であるが、中央部は焼土が散っており、部分的に焼けている。ピットは全部で8本あるが、主柱穴は4隅にそろっている4本で、他の4本のうち3本から白色粘土及び焼土が検出されている。貯蔵穴は南東コーナーにあるが、攪乱により上面は削られている。深さ25cm、直径65cm程の不整円形を呈しており、内から甕形土器が出土している。

カマドは前述したように遺存状態が悪く、焼土が散布していた他に、両袖部に当たる部分に倒立した甕形土器の上半部が残っていた。焚口部はこの甕の位置から推定できるが、火袋部及び煙道部等はまったくその痕跡を止めていない。

以上その他に北東コーナー部及び貯蔵穴の西側に貯蔵穴と同規模の落ち込みがあり、又北西コーナーには白色粘土が置かれるようにして堆積していた。図のように住居の中央部に焼土が広く散布しているが、これは、床面の上に薄く褐色土の層があり、その上に厚さ5cm程の焼土層が広がっており、焼土の上面に埴輪片がのっているもので、焼土層内に及ぶ埴輪片もある。埴輪片はほとんどが小片で、表面は剥落しているものが多い。

このように本住居跡は、カマド、貯蔵穴、主柱穴等一般住居と同様な施設の他に、粘土置場、焼土と埴輪片の層、焼土、粘土の充填したピット等があり、埴輪生産に関連する施設と考えられる。



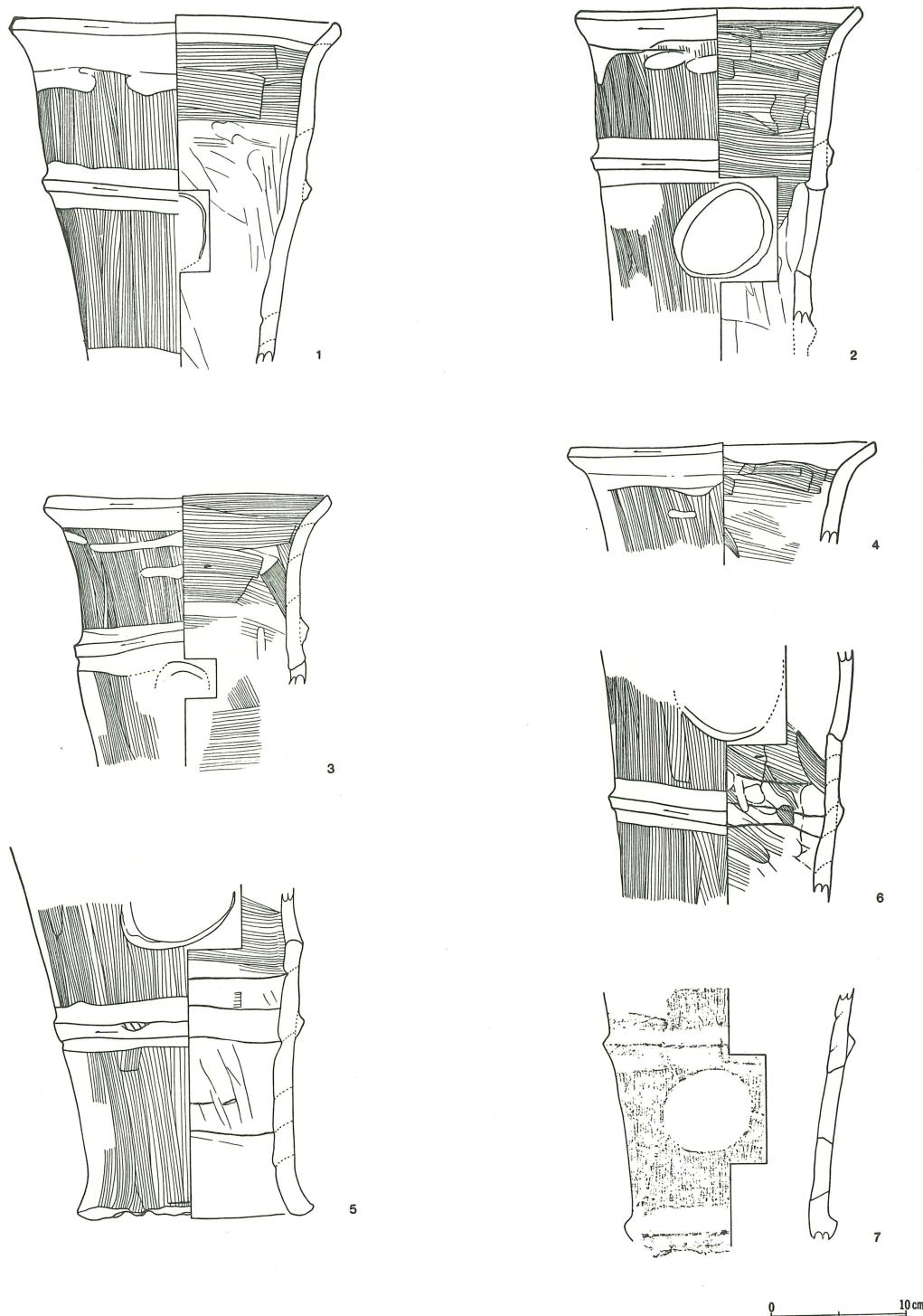
第75図 H-1号住居跡出土遺物 (1)

## H-1号住居跡出土遺物(1) (第75図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 13,7 器高 52,0	厚手、丸底、特に厚い底部から丸みをもって口縁に至る。	赤褐色。焼成良。胎土密。外面は荒れている。内面横ナデ後範磨き	貯藏穴出土
長甕	2	口径 16,5 胴径 15,5 残高 14,0	口縁部はわずかにゆるやかに開く。胴部は張りが弱い。	赤褐色。胎土やや粗い。口縁部横ナデ。胴部外面範削り。	
長甕	3	口径 20,0 胴径 18,4 残高 14,0	口縁部は厚く、わずかに開く。胴部は直線的である。	赤褐色。焼成良。胎土密。口縁部横ナデ、胴部外面範削り。内面八ヶ痕有り。	覆土上層
長甕	4	口径 18,5 残高 9,0	口縁部はくの字に開き、口縁端部は丸い。胴部は丸味をもつ。	褐色。胎土に小石をわずかに含む。口縁部横ナデ、胴部外面範削り。	
甕	5	口径 23,7 残高 8,5	口縁部はわずかに開く。頸部外面に弱い稜が残る。	黄褐色。焼成良。胴部範削り。スス付着。	破片
底部	6	底径 7,0	厚手。	外面黒褐色。器面荒れている。	底部のみ
底部	7	底径 8,9		赤褐色。底面範削り。	底部破片

## H-1号住居跡出土遺物(2・3) (第76・77図)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 带	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
76図-1	(25.5)	口(24.4)	口1.0 a 1.1 b 1.2	胎：やや多い。パミス・酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：暗赤褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	C 0.6/2.2 右回り布横撫で	縦刷毛 8本/2.1cm ⇒口縁部右回り布横撫で	指撫で 口縁部付近は横刷毛←方向 13本/3cm	残率40%。
76図-2	(23.6)	口21.3	口0.8 a 1.1 b 1.2	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体僅少。 焼：良好・堅緻 色：暗褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。 6.6×7.3	C 0.4/2.2 右回り布横撫で	縦刷毛 12本/2cm ⇒口縁部右回り布横撫で	透孔より上を 横刷毛←方向 11本/2.4cm ⇒孔より下を 指撫で ⇒口縁部横撫で	残率60%。 2cm幅の粘土紐巻き上げ。
76図-3	(20.0)	口21.3	口0.6 a 1.0 b 1.1	胎：少量。パミス 珪酸体 焼：良好 色：暗褐色（一部 黒褐色）	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	C 0.6/2.2 右回り布横撫で	縦刷毛 7本/1.5cm ⇒口縁部右回り布横撫で	横刷毛←方向 9本/1.8cm 斜刷毛 16本/2.4cm	残率50%。
76図-4	(8.8)	口(22.9)	口0.6 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：暗橙褐色（一 部黒褐色）	—	—	縦刷毛 7本/1.4cm ⇒口縁部右回り布横撫で	横刷毛←方向 5本/1cm ⇒口縁部横撫で	残率30%。
76図-5	(27.5)	底(17.5)	底1.9 b 1.0 c 1.2	胎：やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼：良好・堅緻 色：暗橙褐色	第二段に円孔。 穿孔後指撫で。	C 0.5/2.1 右回り布横撫で	縦刷毛 10本/2cm	第一段は指撫で 第二段は横刷毛←方向 18本/3.9cm	残率40%。 2cm幅の粘土紐巻き上げ。
76図-6	(18.9)	—	1.1 1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒 焼：良好・堅緻 色：暗橙褐色	上段に円孔。 穿孔後指撫で。	C 0.5/3.0 右回り布横撫で	縦刷毛 9本/2cm	斜刷毛←方向 13本/2.5cm	残率50%。 1.5cm幅の粘土紐巻き上げ。
76図-7	(18.5)	—	b 1.0 c 1.2	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：普通 色：暗赤褐色	上から二段目に円孔。 穿孔後撫で。 5.9×6.0	1 C 0.6/2.0 2 C 0.5/2.3 右回り横撫で	縦刷毛 9本/2cm	斜刷毛 12本/2cm ⇒透孔より下 は指撫で	破片。 2cm幅の粘土紐巻き上げ。



第76図 H-1号住居跡出土遺物 (2)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
77図-8	(5.0)	口(21.2)	口10.8 a 1.2	胎：少量。酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 10本／2 cm ⇒右回り横撫で	右傾斜刷毛⇒ 横刷毛 9本／2 cm ⇒横撫で	破片。
77図-9	(10.3)	—	口10.7 a 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：暗褐色	—	—	縦刷毛 9本／2 cm ⇒右回り横撫で	右傾斜刷毛 9本／2 cm ⇒横刷毛⇒撫で	破片。
77図-10	(5.1)	口(22.5)	口11.0	胎：少量。パミス 角岩礫・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 9本／2 cm ⇒右回り横撫で	右傾斜刷毛 9本／2 cm ⇒横撫で	破片。
77図-11	(5.1)	—	口10.9	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 9本／2 cm ⇒右回り横撫で	横刷毛 9本／2 cm ⇒横撫で	破片。
77図-12	(5.0)	口(20.0)	口10.8	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 8本／2 cm ⇒右回り横撫で	横刷毛 8本／2 cm ⇒撫で	破片。
77図-13	(4.0)	口(22.1)	口11.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 9本／2 cm ⇒右回り横撫で	右傾斜刷毛 11本／2 cm ⇒横撫で	破片。
77図-14	(17.5)	—	口10.6 a 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好 色：外面橙褐色 (一部黒灰色)・内面暗褐色	凸带下0.8cm ⇒孔上端。 穿孔後撫で。	C 0.6／2.1	縦刷毛 10本／2 cm ⇒口縁部横撫で	横刷毛・右傾 斜刷毛 10本／2 cm ⇒口縁部横撫で ⇒凸帶部分は 縦指撫で	破片。
77図-15	(6.5)	—	1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒 焼：良好 色：淡褐色	—	A 0.5／3.0 右回り横撫で	縦刷毛 12本／2 cm	指撫で	破片。 強い横撫でにより 口唇部分に段がつく。
77図-16	(22.5)	—	底1.7 b 1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒 焼：良好 色：外面橙褐色・ 内面暗褐色	第二段に円孔。 穿孔後指撫で。	C 0.6／2.1	縦刷毛 9本／2 cm	第一段は指撫で 第二段は斜刷毛⇒方向 6本／1.5cm	破片。 基部は4.5cm幅の 粘土板。 2cm幅の粘土紐巻き上げ。
77図-17	(12.0)	—	1.2 1.3	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：橙褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	C 0.7／2.0 右回り横撫で	縦刷毛 10本／2 cm	右傾斜刷毛 10本／2 cm ⇒右傾斜刷毛	破片。
77図-18	(17.1)	底(12.2)	底1.6 b 1.3	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：暗褐色	—	C 0.4／2.2 右回り横撫で	縦刷毛 9本／2 cm	斜刷毛 5本／1 cm ⇒斜指撫で 基部周辺を撫で	破片。 基部は5cm幅の粘 土板。 2cm幅の粘土紐巻 き上げ。
77図-19	(23.5)	—	底1.3 b 1.2	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：暗橙褐色	第二段に円孔。 穿孔後指撫で。	C 0.4／1.3 右回り横撫で	縦刷毛 9本／2 cm	右傾斜刷毛 10本／2 cm 基部付近は指 撫で	破片。 基部は5cm幅の粘 土板。 2cm幅の粘土紐巻 き上げ。
77図-20	(12.1)	—	底2.0 b 1.5	胎：少量。パミス 角岩礫 焼：良好 色：暗褐色	—	—	縦刷毛 9本／2 cm	右傾斜刷毛 11本／2 cm 基部は指撫で	破片。 底面に篠状圧痕あり。

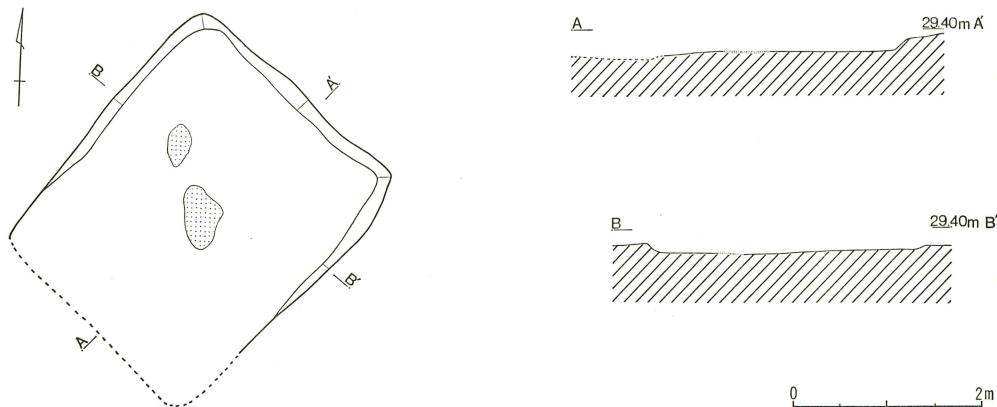


第77図 H—1号住居跡出土遺物 (3)

(2) H-2号住居跡（第78図）

3号住居跡の北に位置する小形の住居跡である。南壁は流失しているが、規模は  $3.3m \times 2.3m$  の長方形を呈するものと思われる。壁高は最高部でも  $10cm$  程であり、南へ行く程低くなる。床面は平坦であるが、特に堅緻な部分はない。カマド、柱穴、壁溝はない。2カ所に焼土の散布が見られるが炉のような掘り込みはない。

出土遺物は土師器の破片が若干である。

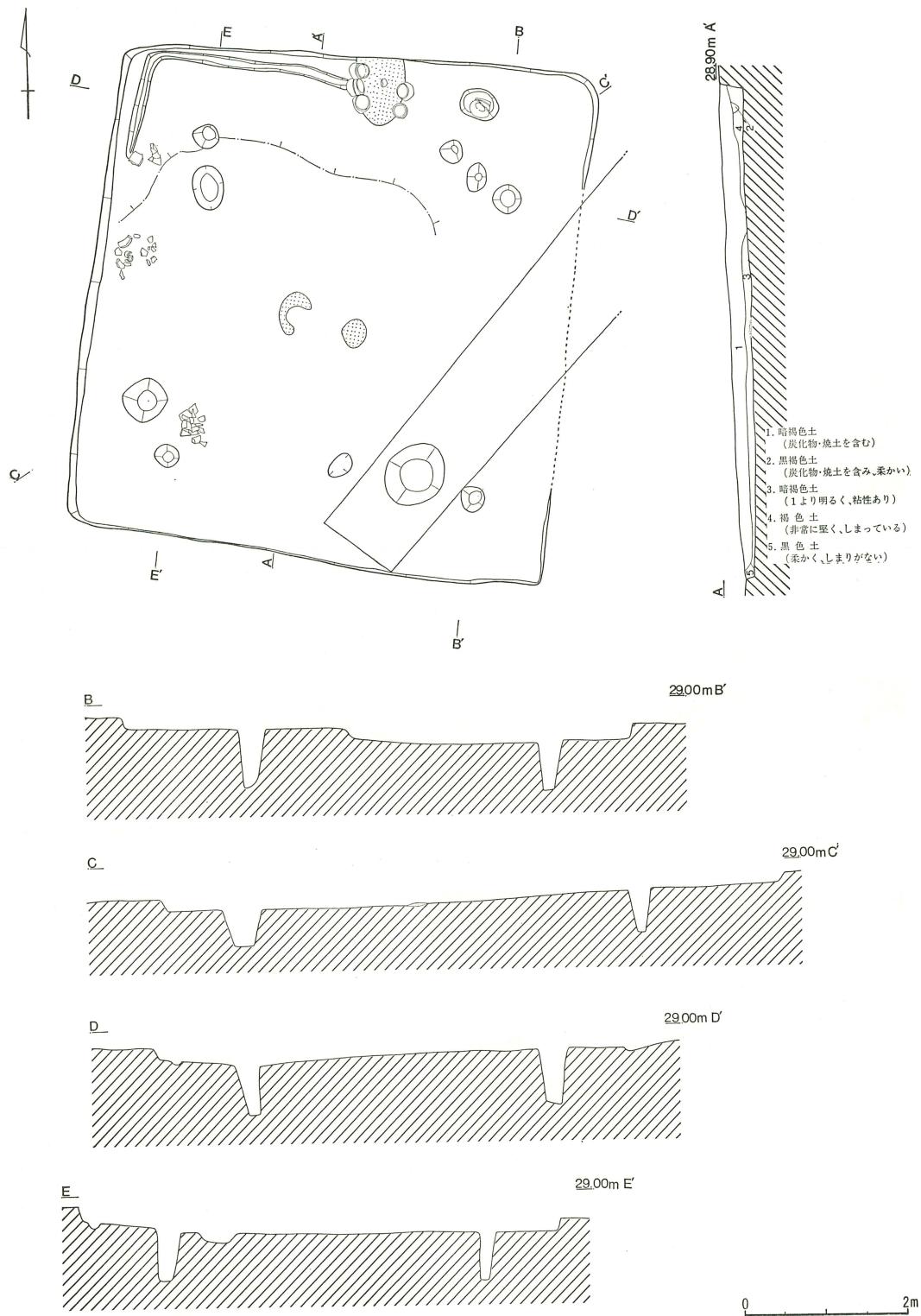


第78図 H-2号住居跡

(3) H-3号住居跡（第79図）

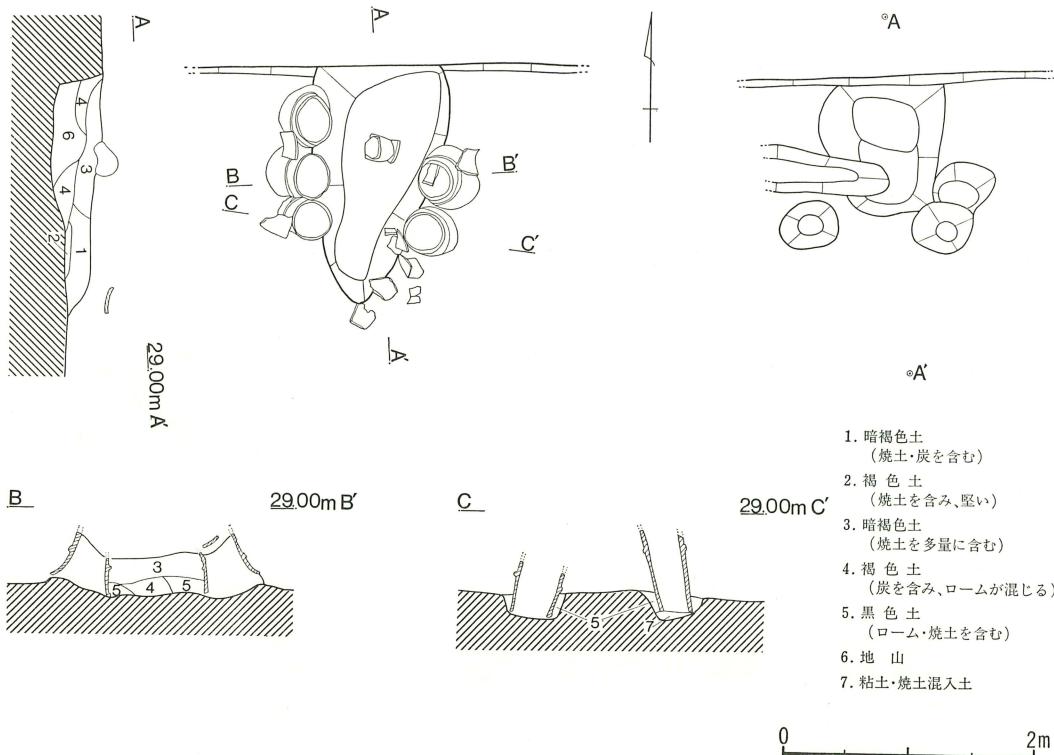
丘陵の南端に位置し、桜山10号墳の周堀調査時に確認できたものである。プランは方形を呈し、規模は1辺  $5.8m$  を計るが、東辺がやや長いため台形のような感じになっている。カマドは北壁のほぼ中央にあり、主軸方向は N- $10^\circ$ -E を示す。覆土は暗褐色土を基調としており、炭化物や焼土粒子を含んでいる。壁は全体的に低く、最高部の北壁でも  $16cm$  程であり、東壁の一部は確認できなかった。壁溝は北西コーナー部に見られるが、壁直下にあるのではなく  $10\sim20cm$  内側に、それも壁とはやや方向がずれて掘り込まれており、カマドの下にまで及んでいる。床面は地山であるロームの上に褐色土、暗褐色土を貼ったものであるが、北側の柱穴を結んだ線と北壁の間が特に堅くそしてやや高くなっている。この部分だけが褐色土の土を用いて床としている。ベッド状と言う程その区画ははっきりしてはいないが、壁に向って少しづつ高くなっている、壁際まで非常に堅くなっている。中央部に2ヶ所焼けた部分があるが、その範囲は小さい。柱穴は各コーナーに沿って4本あり、深さは  $60\sim70cm$  程であるが、直径はいずれも小さく  $35cm$  前後である。主柱穴の他に5個のピットがあるが、すべて主柱穴の近くにあり、浅いものが多い。貯蔵穴はカマドの東側にあり、 $50cm \times 70cm$  と東西に長い楕円形を呈する規模の小さなものである。

カマドは北壁のほぼ中央部に位置し、全長  $180cm$  、幅  $176cm$  を計るが壁外へは突出していない。袖部には円筒埴輪を使用しており、左袖に3本、右袖に2本並んでいて、両袖の手前各1本づつが直立、他は倒立状態であった。また、右袖の2本と左袖の1本は、深さ  $15cm$  程の小穴内に立てられて



第79図 H-3号住居跡

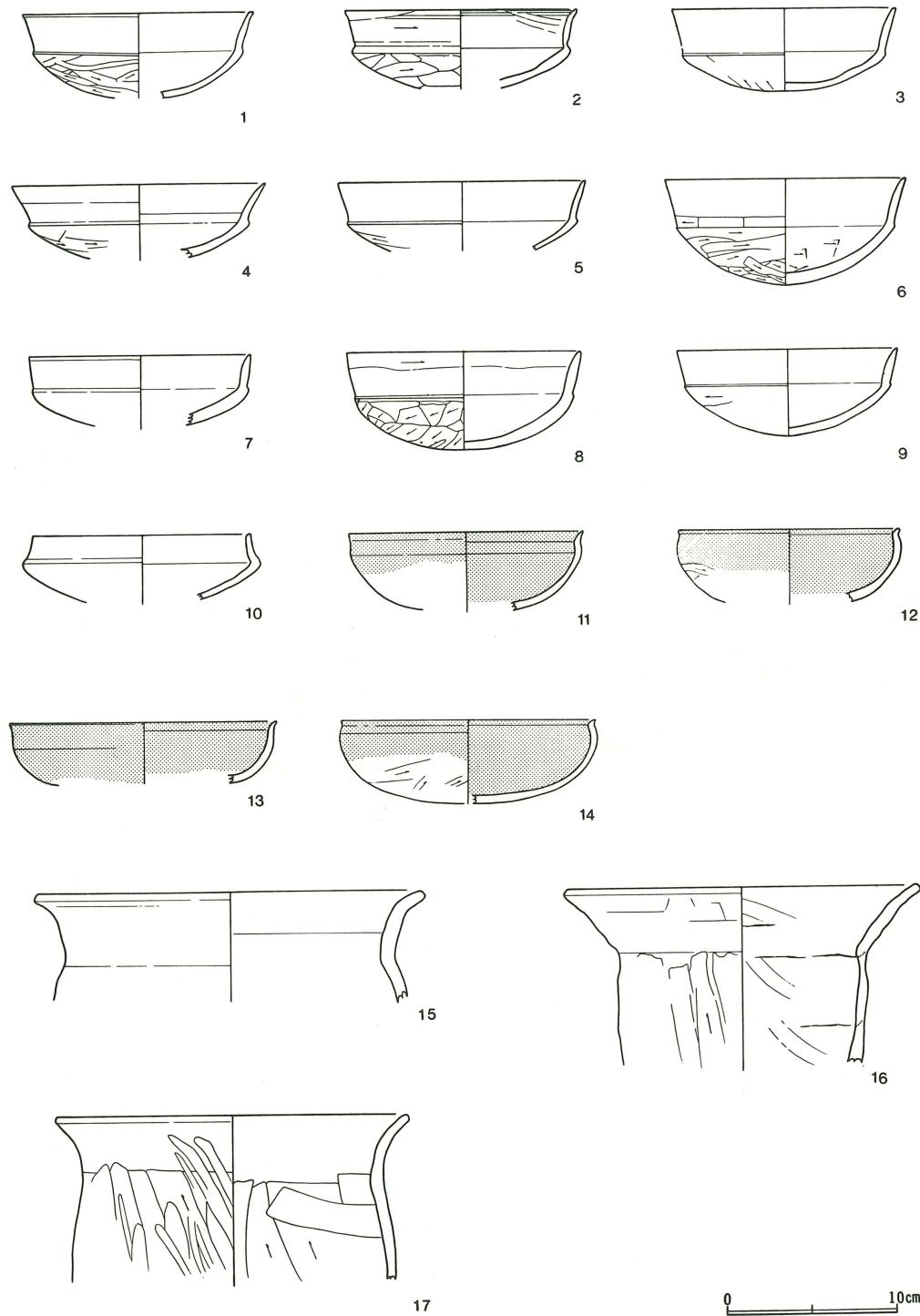
いて、他の埴輪と同様に内傾気味になっている。焚口部は床面よりやや低い程度であり、それにつづく燃焼部も浅く、火床もはっきりしない。天井部及び煙道部は、まったく残存しておらず、全体的に焼土化した部分も少なく、使用頻度の低さを感じさせる。カマドの掘り形は $105cm \times 95cm$ の橢円形を呈するもので、円筒埴輪を立てた小穴が3個ある。さらに壁溝の一部がカマドの中心部近くにまで及んでおり、袖部の円筒埴輪の1本はこの上に立てられていた。



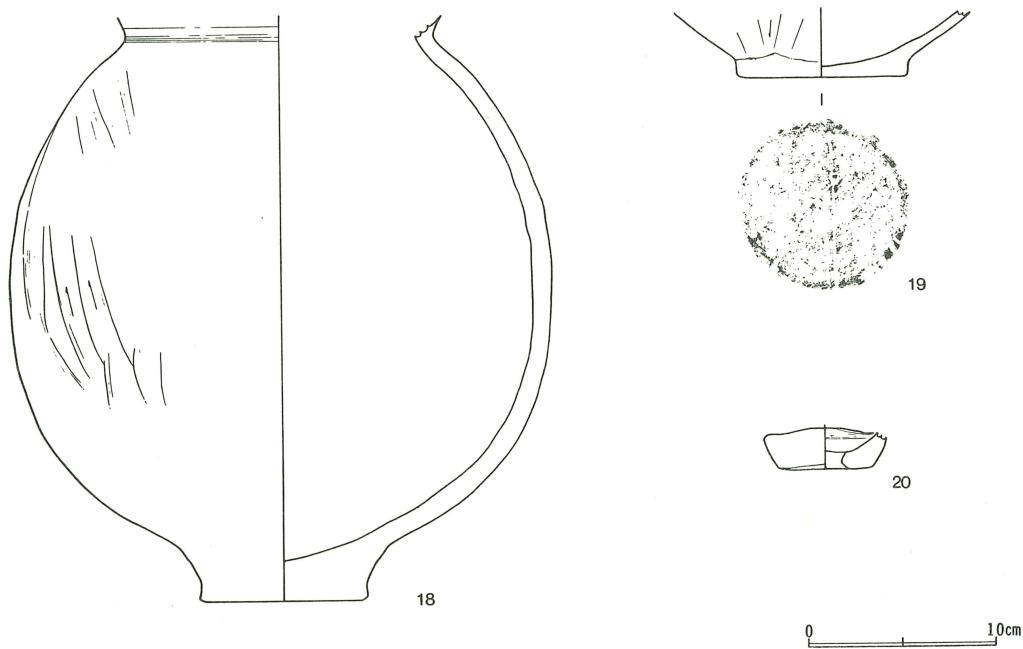
第80図 H-3号住居跡カマド

## H-3号住居跡出土遺物（1, 2）（第81, 82図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 13.7 器高 4.9	口縁部はやや外傾する。体部は丸味をもち、外面に稜を有する。	褐色、焼成、胎土良。体部にスス付着。口縁部横ナデ、体部箆削り	1
壺	2	口径 13.8 器高 4.8	口縁部は外反気味に直立し、口縁端でわずかに開く。体部は1よりも浅く、外面に稜を有する。	赤褐色。胎土良。口縁部横ナデ、口縁端内面に沈線。体部外面箆削り。	
壺	3	口径 13.3 器高 4.9	口縁部は長く、わずかに外反する。体部外面に稜をもち丸味の少ない底部へ至る。	赤褐色。焼成良、胎土密。外面一部スス付着。口縁部横ナデ。体部外面箆削り。	
壺	4	口径 14.8 器高(4,6)	口縁部は大きく外反し、先端は尖っている。体部外面に稜を有する	暗褐色、口縁部横ナデ、体部外面箆削り。	
壺	5	口径 14.5 器高(4,3)	薄手。口縁部わずかに外反している。体部外面の稜ははっきりしている。	外面褐色、内面赤褐色。一部スス付着。焼成、胎土良。口縁横ナデ。体部外面箆削り。	



第81図 H—3号住居跡出土遺物(1)



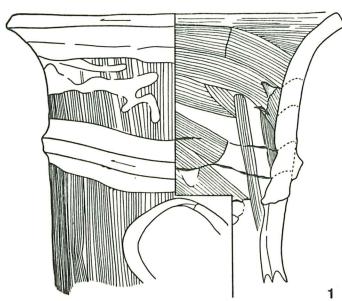
第82図 H-3号居住跡出土遺物 (2)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	6	口径 14.3 器高 6.1	口縁部はゆるやかに外反する。体部は丸味をもち深く、外面に弱い稜を有する。	赤褐色。焼成良。胎土特に密。体部外面に赤彩痕。口縁部横ナデ。体部外面籠削り。	
壺	7	口径 13.0 器高( 4.4)	口縁部は直立し、口縁端はつまみ上げ尖っている。体部は分厚、外面に弱い稜を有する。	赤褐色。器面荒れています。口縁部横ナデ、体部外面籠削り。	破片
壺	8	口径 13.8 器高 5.7	全体的に厚い。口縁はゆるやかに外反している。体部は丸味をもち外面に稜がある。	外面褐色、内面赤褐色。焼成、胎土良。口縁部横ナデ、体部外面籠削り。	
壺	9	口径 13.1 器高 5.0	口縁部はわずかに外反し、丸底であるがやや尖り気味である。稜をもっている。	赤褐色。焼成、胎土良。口縁部横ナデ、体部外面籠削り。	1/3
壺	10	口径 12.8 器高( 4.3)	口縁部は外反しながら内傾しており、体部との間に段を有する。	褐色、表面磨滅。口縁部横ナデ、体部外面籠削り。	破片
壺*	11	口径 14.0 器高 4.8	口縁部は「S」字状に緩くくびれ口唇部は細く尖っている。体部は丸味をもっている。	焼成、胎土良。外面口縁部、内面赤彩。口縁部横ナデ、体部外面下半籠削り痕が残る。	破片
壺	12	口径 13.2 器高 4.5	口縁部は短く、口唇は外側へつまみ出されている。体部は丸味をもっている。	赤褐色。器面荒れる。胎土中小石含む。内面及び口縁部外面赤彩。口縁部横ナデ、体部外面籠削り。	
壺	13	口径 15.8 器高( 3.7)	口縁部はわずかに外傾している。体部は偏平である。	焼成良、胎土小石混り。赤彩。口縁部横ナデ、体部外面下半籠削り	
壺	14	口径 15.0 器高 4.9	口縁部は短く、口唇は外側へつまみ出されており尖っている。体部はやや張り気味である。	焼成、胎土良。全面赤彩。口縁部横ナデ。体部外面籠削り内面はナデ。	

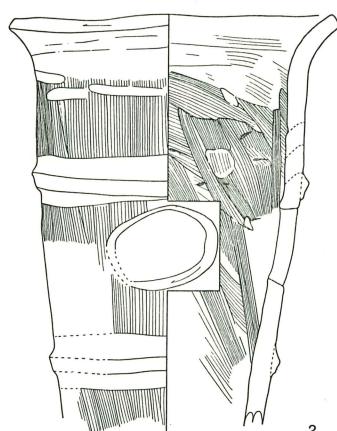
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	15	口径 23,0	口頸部はやや外反し、口縁部で大きく外傾する。先端は丸味をもつている。	黄褐色。器面磨滅。胎土中に小石を含む。	口縁部破片
長甕	16	口径 21,0	口縁部は厚く長く大きく外傾し、胴部は細く直線的である。	赤褐色、内面黒褐色。口縁ナデ痕、胴部外面箠削り。	
長甕	17	口径 20,7	口縁は外反しながら開き、胴部との接続部がやや厚くなる。	灰褐色。焼成良。胎土小石混り。胴部外面箠削り。	破片
甕	18	胴径 29,1 底径 9,2	頸部は「く」字状にくびれる。胴部最大径は中位にあり、やや縱長の橢円形を呈する。底部は作り出されている。	褐色。焼成良、胎土密。胴部外面箠削り、底部縁辺指頭痕。底面は箠削り。	口縁部欠損
甕 甌	19 20	底径 9,3 底径 5,3	小さな作り出しで、木葉痕有り。 中央部に 2 cm の小孔がある。	胴部外面箠削り。 内外面より孔をあけ、中央で連結	底部の破片

## H-3号住居跡出土遺物(3・4)(第83・84図)

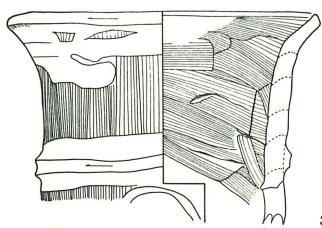
図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
83図-1	(18.7)	口22.6	口1.0 a 1.2 b 1.4	胎: やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫 焼: 良好 色: 橙褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	C 0.5/3.0 右回り布横撫で	縦刷毛 10本/2 cm ⇒口縁部横撫 で	斜刷毛へ方向 19本/2.9cm ⇒口縁部僅か な撫で	残率80%。 2.0~2.5cm幅の粘 土紐を左回りに巻 き上げる。
83図-2	(28.0)	口22.1	口1.0 a 1.2 b 1.1 c 1.2	胎: 少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼: 良好 色: 橙褐色	上から二段目 に円孔。 右回りに穿孔 後、指撫で。 5.5×7.4	1C 0.5/2.9 2C 0.5/2.0 右回り横撫で	縦刷毛 7本/1.9cm ⇒口縁部右回 り横撫で	斜刷毛へ方向 9本/1.9cm ⇒口縁部横撫 で	残率70%。 2.0cm幅の粘土紐 を左回りに巻き上 げる。
83図-3	(14.2)	口21.0	口0.7 a 1.3 b 1.2	胎: やや多い。パ ミス・角岩礫・晶 石 焼: 良好 色: 橙褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	A' 0.4/2.6 右回り布横撫で	縦刷毛 9本/1.6cm 左回りに施す。 ⇒口縁部右回 り布横撫で	斜刷毛へ方向 6本/0.9cm ⇒口縁部付近 横刷毛 10本/2.4cm ⇒口縁部僅か な撫で	残率90%。 2.0cm幅の粘土紐 を左回りに巻き上 げる。
83図-4	(18.0)	口23.5	口0.9 a 1.2 b 1.3	胎: 少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼: 良好 色: 橙褐色	下段に円孔。 穿孔後指撫で。	A' 0.3/1.4 右回り布撫で	縦刷毛 8本/1.8cm ⇒口縁部右回 り横撫で	凸帯より上は 横刷毛←方向 11本/2.5cm 凸帯より下は 指撫でつけ	残率80%。 2.0~2.5cm幅の粘 土紐を左回りに巻 き上げる。
83図-5	38.7	口20.9 底11.8	口1.0 a 1.1 b 1.1 c 1.3 底2.0	胎: やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 晶石・角岩礫目立 つ。 焼: 良好 色: 暗褐色	第二段に円孔。 右回りに穿孔 後、指撫で。 5.8×6.8	1C 0.5/2.2 2C 0.3/2.3 右回り横撫で	縦刷毛 9本/2 cm ⇒口縁部右回 り横撫で	第一段は右傾 斜指撫で 第二・三段は 斜刷毛へ方向 8本/2 cm	口縁の一部を欠 くが他は完形。 基部は4.5cm幅の 粘土板を右回りに 接合。後、2.0~ 3.0cm幅の粘土紐 を左回りに巻き上 げる。
83図-6	26.6	底11.8	底1.3 b 1.1 c 1.2	胎: 少量。パミス 角岩礫・酸化鉄粒 目立つ。 焼: 良好・堅緻 色: 橙褐色	第二段に円孔。 右回りに穿孔 後、指撫で。	C 0.7/3.3 右回り横撫で	縦刷毛 10本/2.2cm	第一段は右傾 斜指撫で 第二段は斜刷 毛へ方向 10本/1.4cm と横刷毛 12本/1.8cm	残率80%。 基部は4.5cm幅の 粘土板を右回りに 接合。後、2cm幅 の粘土紐を左回り に巻き上げる。
84図-7	(15.3)	口21.2	口0.9 a 1.1	胎: やや多い。パ ミス・酸化鉄粒・ 角岩礫・珪酸体 焼: 良好 色: 暗褐色	凸帯下1 cmで 孔上端。	A 0.6/2.2	縦刷毛 11本/2 cm ⇒口縁部横撫 で	右傾斜刷毛・ 横刷毛 9本/2 cm ⇒口縁部横撫 で⇒縦指撫で	破片。



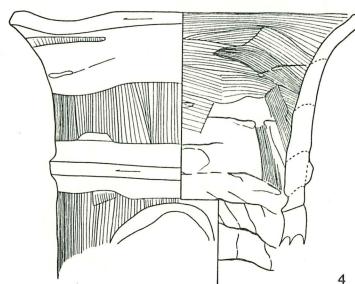
1



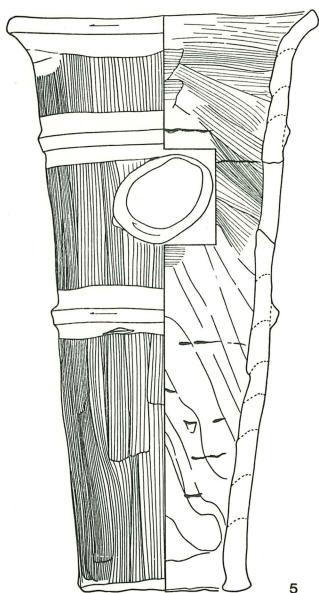
2



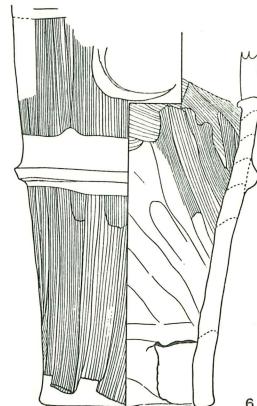
3



4



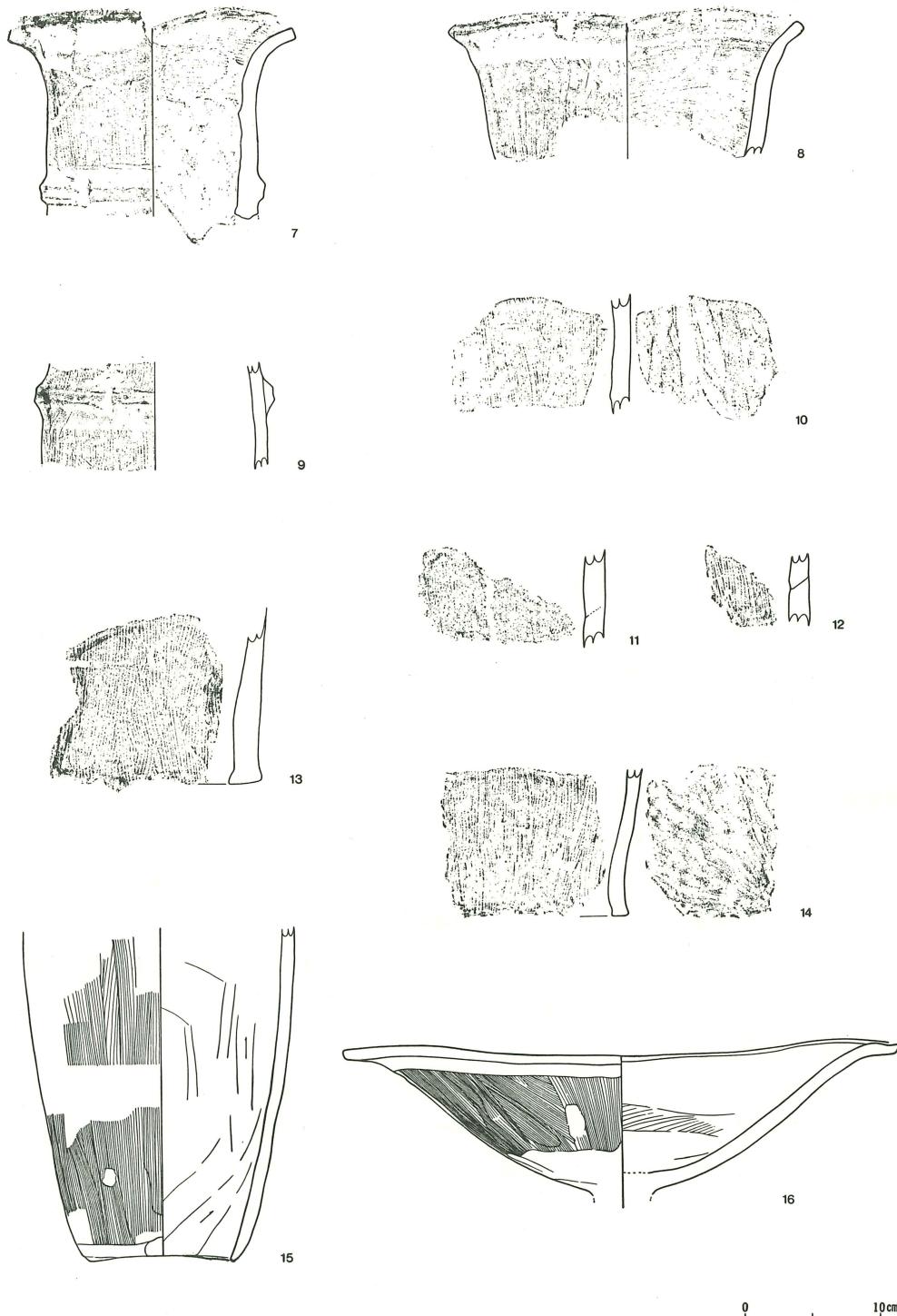
5



6

0 10 cm

第83図 H—3号住居跡出土遺物(3)



第84図 H—3号住居跡出土遺物(4)

図版番号	器 高	器 径	器 厚	器 質	透 孔	凸 帯	外面調整	内面調整	備 考
84図-8	(10.0)	口25.0	口0.8 a 1.1	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 10本／2 cm ⇒右回り横撫 で	右傾斜刷毛⇒ 横刷毛 11本／2 cm ⇒横撫で	破片。
84図-9	(7.8)	—	0.9	胎：少量。パミス 酸化鉄粒 焼：良好 色：橙褐色	—	A 0.6／2.9	縦刷毛 9本／2 cm	斜指撫で	破片。 朝顔形？
84図-10	(10.3)	—	1.3	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 珪酸体 焼：良好・堅緻 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 10本／2 cm	縦指撫で	破片。
84図-11	(7.5)	—	1.5	胎：やや多い。パ ミス・角岩礫目立 つ。 焼：普通 色：外面橙褐色・ 内面淡橙褐色	—	—	縦刷毛 10本／2 cm	撫で	破片。
84図-12	(7.8)	—	1.5	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：暗褐色	—	—	縦刷毛 10本／2 cm	撫で	破片。
84図-13	(15.8)	—	底2.4 1.6	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・珪酸体 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 10本／2 cm	斜・横指撫で	破片。 底面に篠状压痕あり。
84図-14	(10.8)	—	底1.2 1.0	胎：少量。パミス 酸化鉄粒・角岩礫 焼：良好 色：橙褐色	—	—	縦刷毛 9本／2 cm	斜撫で	破片。

### 籠形埴輪（第84図-15）

覆土中より出土している。口縁部および胴部の $\frac{1}{2}$ を欠損する。残率は図示の30%である。残存高24.5cm、推定低形10.7cm、器厚0.9cmを測る。胎土はパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は非常に良好で堅緻であり、橙褐色を呈する。

外面は縦刷毛調整10本／2 cmを施し、その後、孔部に撫で調整を行う。内面は↑方向の布撫で調整である。16の高坏形埴輪と、胎土が酷似している。

### 高坏形埴輪（第84図-16）

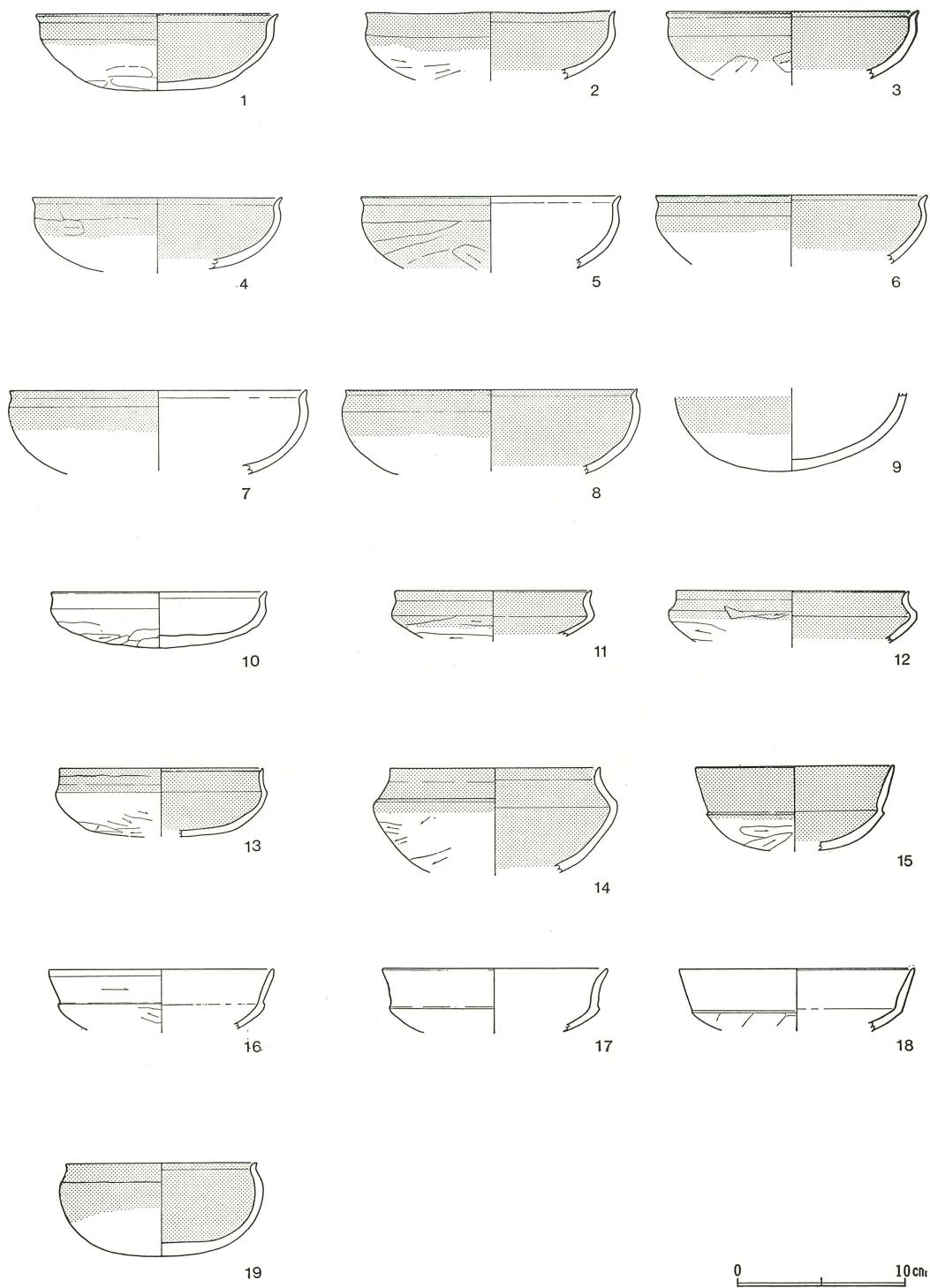
脚部および坏部 $\frac{1}{2}$ を欠損している。残率は図示の25%である。床面と覆土中より出土した。残存高10.3cm、推定口径40.8cm、器厚は口縁部で0.6cm、体部1cmを測る。胎土にはパミス・酸化鉄粒・角岩礫・珪酸体等の砂粒を少量含む。焼成は良好であり、暗橙褐色を呈する。

坏部は大きくすり鉢状に開き、口唇は水平となる。第51図-12、第66図-2と同器種であるが、口径が大きく、坏部の器高が低いため、他例に比べると扁平である。

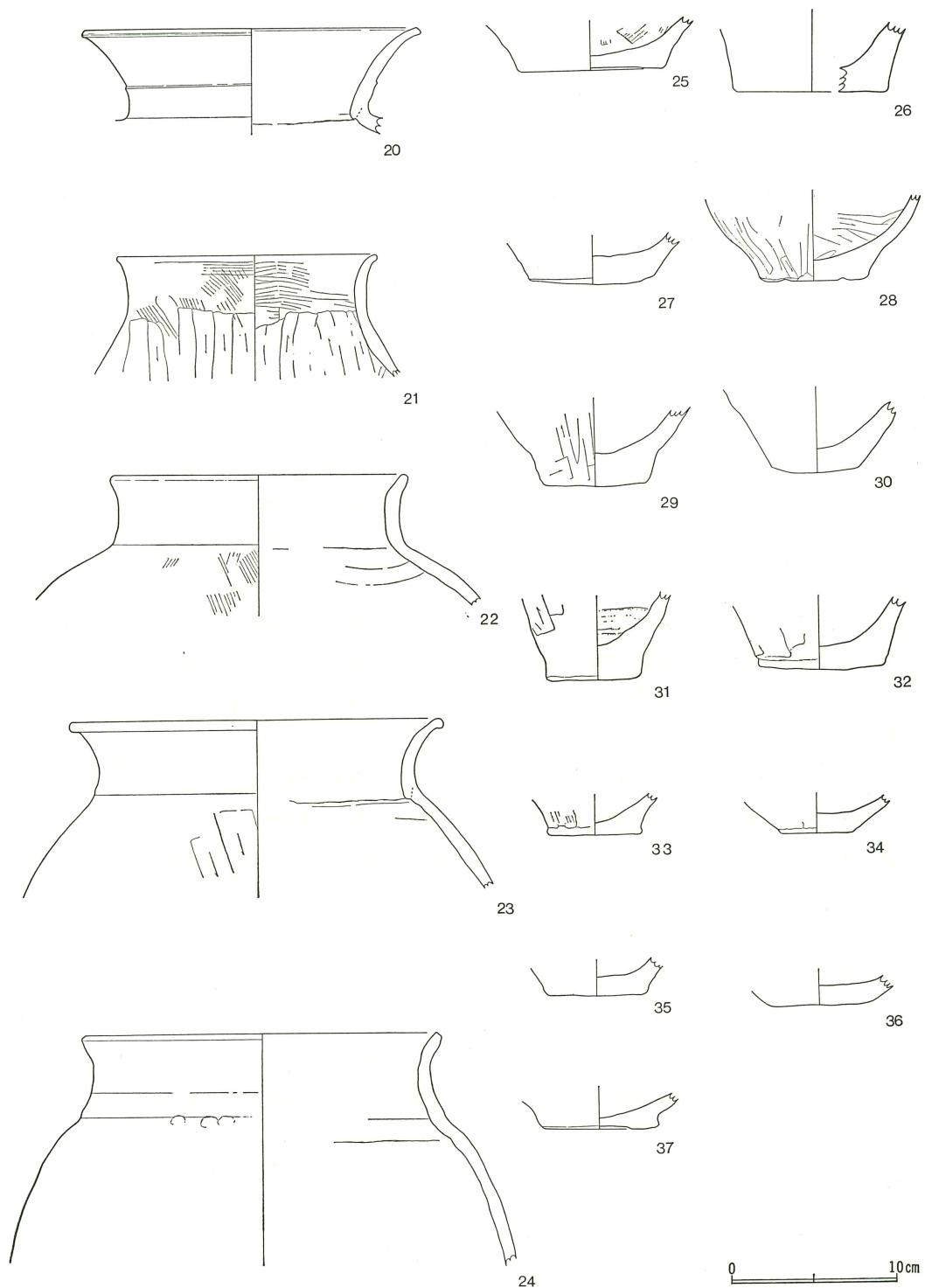
外面は縦刷毛10本／2.1cmを施し、さらに口縁部を横撫である。内面は横刷毛11本／2 cm調整後、布撫でを施し、口縁部を横撫でしている。

表土出土遺物（第85図～88図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 14,5 器高 4,6	口縁部は「S」字状を呈する。体部は丸味をもつが底は偏平である。	口縁部外面、内面赤彩。口縁部横ナデ、体部外面籠削り	
壺	2	口径 15,0 器高( 4,0)	口縁部は「S」字状を呈し、口唇は外側へつまみ出されている。体部は丸味をもっている。	1と同様	
壺	3	口径 15,1 器高( 4,4)	2と同様	焼成良。胎土中小石含む。赤彩。口縁部横ナデ、体部外面籠削り。	体部欠損
壺	4	口径 15,0 器高( 4,7)	3と同様	3と同様	
壺	5	口径 15,5 器高( 4,7)	4と同様	焼成、胎土良。口縁外面、内面赤彩。体部外面籠削り。	破片
壺	6	口径 16,3 器高( 5,0)	5と同様	口縁部外面、内面赤彩。	
壺	7	口径 17,8 器高( 5,7)	6と同様であるが、やや大形で体部の丸味も強い。	焼成良。口縁端外面、内面赤彩。口縁部横ナデ、体部外面籠削り。	
壺	8	口径 17,6 器高( 5,0)	7と同様	口縁部外面、内面赤彩。口縁部横ナデ、体部外面籠削り。	
壺	9		口縁部欠損。丸味をもった体部のみである。	外面褐色。体部上部、内面赤彩。体部外面籠削り。	
壺	10	口径 13,0 器高 3,4	口縁部は「S」字状を呈し、口唇は外側へ開く。体部は厚手で偏平である。	器面荒れる。口縁外面、内面赤彩残る。口縁部横ナデ、体部外面籠削り。	
壺	11	口径 11,8 器高( 3,0)	口縁部は外反し、直立する。口唇は外側へ開く。小形で薄手。	焼成、胎土良、赤彩。口縁部横ナデ。体部外面籠削り。	
壺	12	口径 14,0 器高( 3,0)	11と同様	11と同様	
壺	13	口径 12,2 器高( 4,0)	口縁部は外反しながら直立する。体部は孤状を呈している。	赤彩、体部外面スヌ。口縁端内面に沈線1本。体部外面籠削り。	
壺	14	口径 12,7 器高( 6,2)	口縁部はわずかに外反しながら内傾する。体部は深く丸味をもっている。	焼成良。胎土中に小石。口縁外面内面赤彩。口縁部横ナデ、体部外面籠削り。	%
壺	15	口径 12,0 器高( 5,0)	口縁部は直線的に外側へ開く。体部外面に稜があり、丸底である。	焼成良、胎土密。赤彩。口縁部横ナデ、体部外面籠削り。	破片
壺	16	口径 13,6	口縁部は直線的に外側へ開くが、口唇近くでやや内傾する。稜有り	赤褐色、赤彩なし。焼成、胎土良口縁部横ナデ、体部外面籠削り。	破片
壺	17	口径 13,7	口縁部は外反しながら開き、口縁端でさらに外傾する。稜がある。	16と同様	
壺	18	口径 14,3	口縁部は直線的に外傾する。体部に弱い稜がある。	16と同様	
壺	19	口径 11,6 器高 5,6	口縁部は短く、外側へつまみ出されている。体部は丸味をもち、丸底であるが厚い。	焼成良、胎土小石含み密。外面上半、内面赤彩。口縁部横ナデ、体部外面籠削り。	%

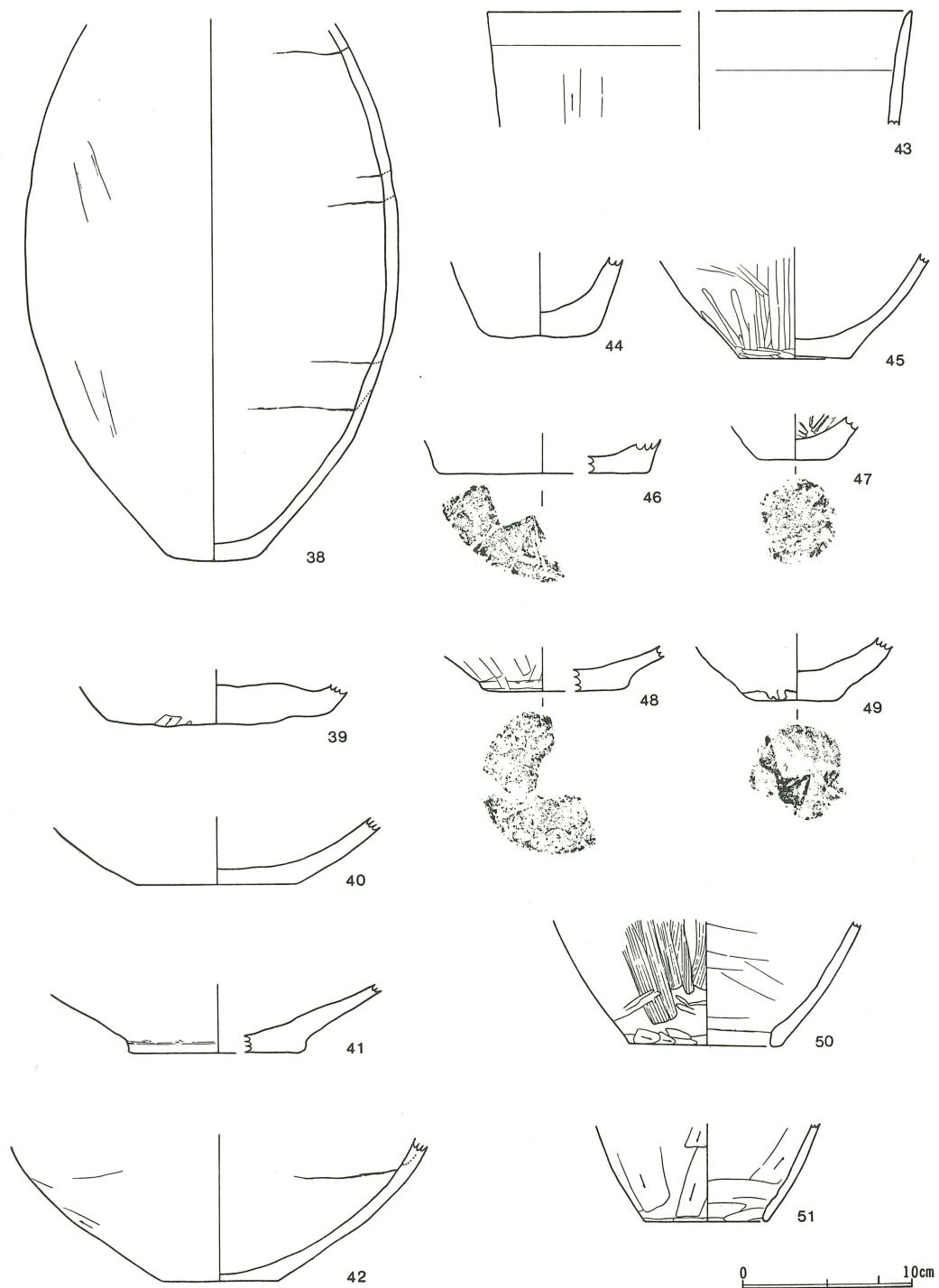


第85図 表土出土遺物 (1)

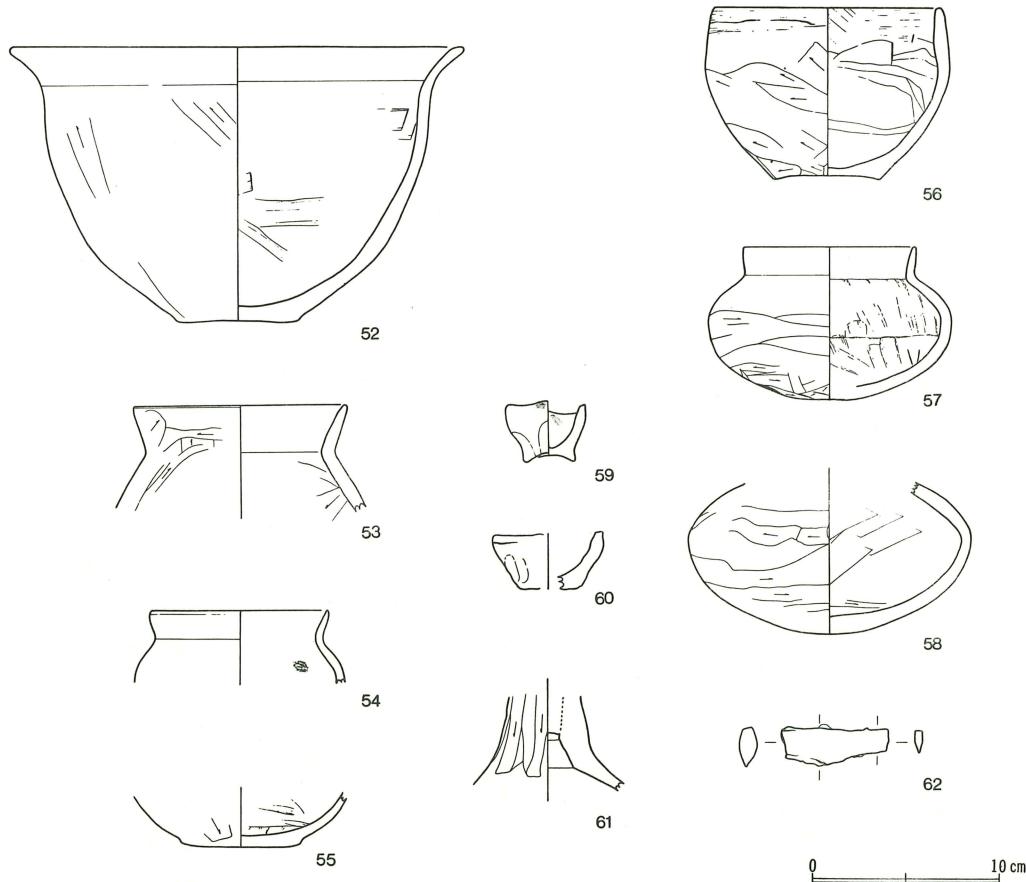


第86図 表土出土遺物 (2)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	20	口径 20,6	口縁部は外反しながら外側へ大きく開く。口縁部外面に稜をもち、口唇は丸い。	赤褐色。胎土良。口頸内外面横ナデ。	口縁部のみ一周
甕	21	口径 16,0	口縁は外反しながらわずかに外側へ開く。胴部は丸味が少ない。	灰褐色。焼成良。口縁内外面櫛目。胴部内外面範削り。	
甕	22	口径 18,0	「コ」字状の口縁を呈し、口唇は丸い。胴部は球形である。	器面磨滅。赤彩残る。胴部外面範ナデ。	口縁部
甕	23	口径 22,8	口縁部は外反しながら、わずかに外傾し、口唇部は丸い。	胎土中小石含む、器面荒れる。口頸部横ナデ。胴部外面範削り。	
甕	24	口径 22,0	口唇部は外反しながら直立し、口縁端で外傾する。	赤褐色。胎土中小石若干含む。器面荒れる。胴部外面範削り。	
底部	25	底径 9,0	平底	灰褐色、内面範ナデ。	
底部	26	底径(9,4)		赤褐色。	
底部	27	底径 7,8	やや丸味をもつ	内面褐色、外面黒褐色	
底部	28	底径 6,5		外面範削り、内面横方向範ナデ	
底部	29	底径 6,6		暗褐色。外面範削り。	
底部	30	底径 5,4	やや丸味をもつ	赤褐色、表面磨滅	
底部	31	底径 5,8	厚手	赤褐色。器面荒れる。	
底部	32	底径 7,6		赤褐色。底面範削り。	
底部	33	底径 5,9	作り出し	黒褐色。胴部外面下半に櫛目	破片
底部	34	底径 4,6	縁しっかりしない	黒褐色、胎土小石混り。	
底部	35	底径 6,1	平底		破片
底部	36	底径 6,2	平底	灰褐色。器面磨滅。	
底部	37	底径 7,0	上げ底氣味である。	赤褐色。表面磨滅。	
長甕	38	胴径 22,2 底径 5,2	口縁部を欠損している。胴部は孤状を呈し、底部は小さく丸味をもっている。	胎土中小石含む、体部外面範削り 内面輪稜痕残る。器面磨滅。	
底部	39	底径 8,0	平坦ではない。	灰褐色。底面ナデ不安定	
底部	40	底径 9,7		赤褐色、胎土密、外面範削り。	
底部	41	底径(10,4)	作り出した平底である。	褐色、内面荒れる。	
底部	42	底径 7,0		胎土小石混り。外面・削り。	
鉢	43	口径 25,4	直線的にやや外傾し、口唇は尖っている。	灰褐色。口縁横ナデ、外面範削り	
底部	44	底径 7,0	丸味をもつ。	赤褐色、胎土小石含む。	
底部	45	底径 6,8		灰褐色、胎土、焼成良、範削り。	
底部	46	底径(12,7)	木葉痕	赤褐色、胎土良。	小破片
底部	47	底径 4,4	木葉痕	内面範ナデで丸い。	
底部	48	底径(8,7)	木葉痕	赤褐色。胴下半範ナデ。	



第87図 表土出土遺物 (3)



第88図 表土出土遺物 (4)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
底 部	49	底径 5,5	木葉痕。	赤褐色。表面磨滅。	
甌	50	底径 9,1	筒抜け。	焼成、胎土良。外面にハケ目	底部破片
甌	51	底径 7,4	筒抜け。	灰色。焼成、胎土良。体部箆削り	底部破片
鉢	52	口径 24,4 器高 14,7 底径 6,4	口縁部はわずかに外反し、大きく外傾する。胴部中位でわずかに張り、底部へ移行する。	灰褐色。器面荒れる。体部外面箆削り。内面横方向のハケ目。	口縁一部残る
小形甌	53	口径 11,5	口縁部は「く」字状に外反する。	胎土良。胴部外面箆削り。	破片
小形甌	54	口径 9,6	口縁部は「く」字状を呈するが、口縁端でわずかに内傾する。	赤褐色、表面磨減しており不明。	破片
底 部	55	底径 6,2	やや胴部が張る。	内面黒色。外面箆削り。	
鉢	56	口径 12,3 胴径 13,0 器高 9,0 底径 5,6	口縁部は直立し、口唇は丸い。胴部上位でやや張り、不安定な底部へ移行する。	灰褐色。焼成良。胎土良。胴下半ス付着。口縁部横ナデ、胴部斜箆削り。	1号窯跡
小形甌	57	口径 9,3 胴径 13,1 器高 8,0	口縁部はわずかに外傾し、胴部は張りが強く丸い。丸底である。	灰褐色。焼成良。胎土密。口縁部横ナデ、体部箆削り。	14号窯跡

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
小形壺	58	胴径 15,3	口縁部を欠損。胴部はやや偏平で丸味をもつ算盤玉状を呈する。	灰褐色。焼成、胎土良。胴部内外面窓削り。	½
手捏土器	59	口径 4,3 器高 3,0 底径 2,7	口縁は直立し、口唇はつまり上げられているが平坦ではない。底部周辺が隆起している。	赤褐色。やや粗。	完形
手捏土器	60	口径 5,9 器高 3,0 底径(3,2)	口縁部は直立し、口唇は平らである。	黒褐色。胎土、焼成良。	½
高 扱	61		脚部のみ。	灰褐色。外面窓削り、内面ナデ	
鉄 器	62	幅 2,0	刀子。先端部と基部を欠損する。		

## 4. 集石遺構と出土遺物

### (1) 1号集石(第89図)

約8m×4mの規模をもち、南北に細長い集石である。集石の中央部分に2m×2m程の範囲で円形に集中する部分がある。この集中する部分の南と北側にはやや散漫に礫がみられる。集中する部分には人頭大の比較的大きな礫がみられ、周辺部にはやや小さめの礫が目立つ。

石材には砂岩、結晶片岩等が多く使われている。これらの礫は、現在でも丘陵内の各所にみられる物見山礫層の露頭から採取することができる。

また、礫が集中する部分の直下には浅い皿状の落ち込みがあり、この中から加熱を受けて表面が赤色化してヒビ割れた礫が出土している。

検出された段階では、中心に集中する部分と周囲に散在する部分とに分離していたが、本来は集中する部分にまとまっていたと考えられる。集中する部分に多出する焼礫が周辺にもまばらに散在することもこれを裏付けている。

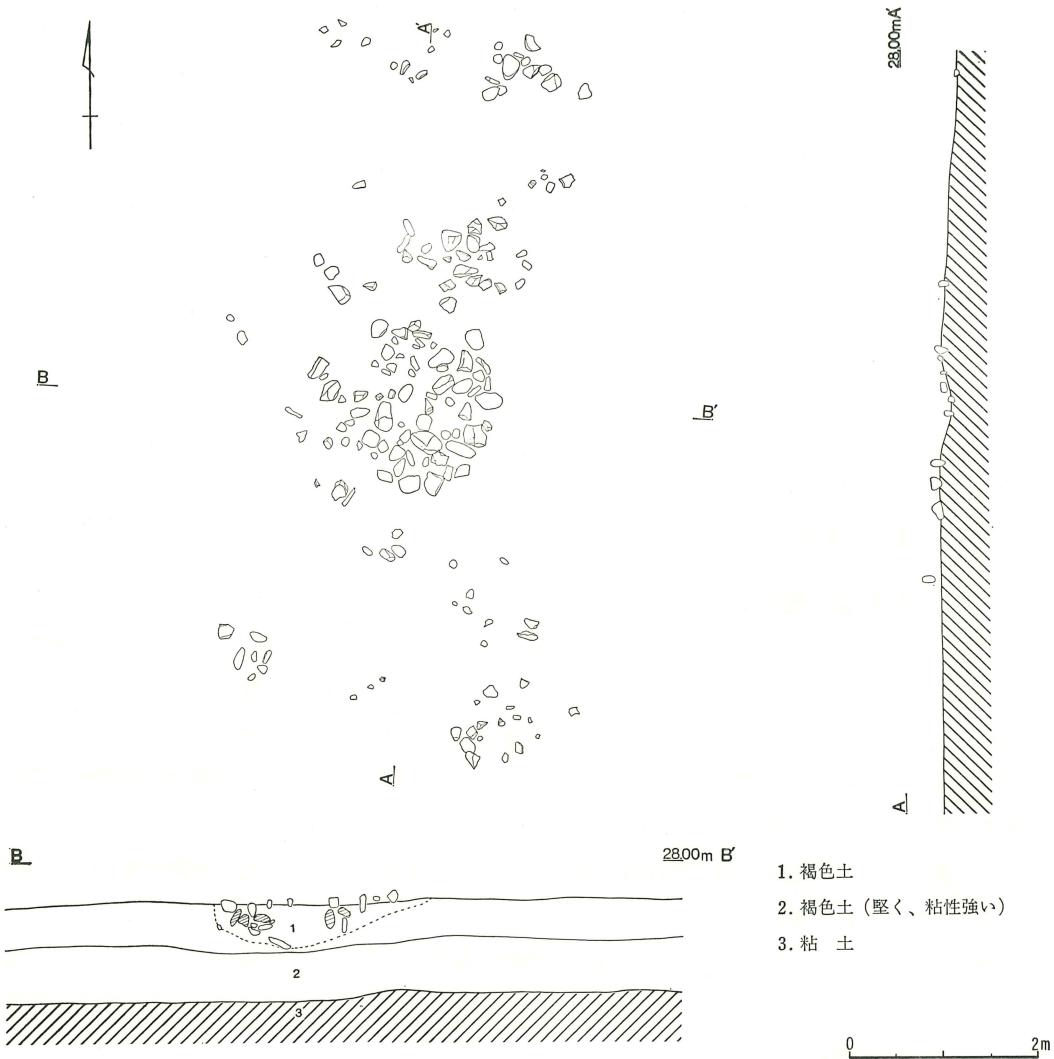
### (2) 2号集石(第90図)

4m×5m程の範囲に散在し、1号集石にみられたような集中する部分、皿状の落ち込み等は認められない。礫の大きさはまちまちだが、小礫は少なく、人頭大～小児頭大程度の礫が目立つ。赤色化した焼礫についても集中することなく、散発的である。

石材は1号集石と同様で砂岩系のものが多く、結晶片岩がこれに次ぐ。各礫の乗るレベルもさほど差がなく、ほぼ一定の高さを保っている。

本集石内からは、単一型式の土器が一定の範囲内からまとまって出土したという事実はない。周辺から数型式の土器が散見された程度である。したがって、時期の決定に明確さを欠く。このことは遺構の性格にも関与してこよう。しかしながら、本集石内より野島式土器が若干ではあるある程度まとまって出土している。

上記したような集石遺構は、先土器時代から縄文時代にかけて各地でみられる。しかし、その性格、つまり、どのように機能したかという問題に対して、明確な解答は出されていないが、加熱を



第89図 1号集石

受けた礫が存在し、その焼礫が重要な鍵を握っていることは確かであろう。

#### 2号集石出土土器 (第92図 1～4)

1は大きな山形を呈する口縁部片である。山形口縁頂部直下より、区画文の軸になると思われる3本の断面三角形の微隆起線が垂下し、くびれ部で横走する微隆起線に連続している。この微隆起線上には押捺痕が付けられ、微隆起線間は丁寧に磨消され無文化している。施文順位は、地文の沈線文→微隆起線文貼り付け→磨消→押捺の順である。口縁に対して斜行する微隆起線文をその区画文の一辺とする三角形区画文の微隆起線文には、押捺が加えられず、区画文の内側は、長辺と同方向に沈線文が集合して充填されている。2も同様な三角形区角文をもつ口縁部片である。1, 2とも胎土には大粒の砂粒を多量に含み、焼成も不良で脆弱である。特に内面は、加熱されたためか剥落が激しく、条痕の有無が看とれないほどである。色調は1が濃茶褐色、2が赤褐色である。3, 4は条痕文だけの土器である。3は条痕文が表裏面とも斜走し、4は表面縦走、裏面斜走している。

胎土、焼成とも 1, 2 に近く、3 は赤褐色、4 は茶褐色を呈する。早期後半の野島式土器に比定されるものである。

#### 縄文式土器（第92図～第95図）

桜山窯跡群からは、約 200 片の縄文式土器が出土している。2 号集石出土の数片の土器を除き、他はすべて、遺構確認作業、窯跡覆土等より出土している。早期の沈線文系土器・条痕文系土器、前期は、黒浜式・諸磯 a 式・諸磯 b 式・十三菩提式、中期の加曾利 E 式などである。以下、群別に分類して説明する。

#### 第1群土器（第92図—1～24）

早期前半の沈線文系土器を一括し、文様により a～d に分類する。

##### a (第92図 1～3)

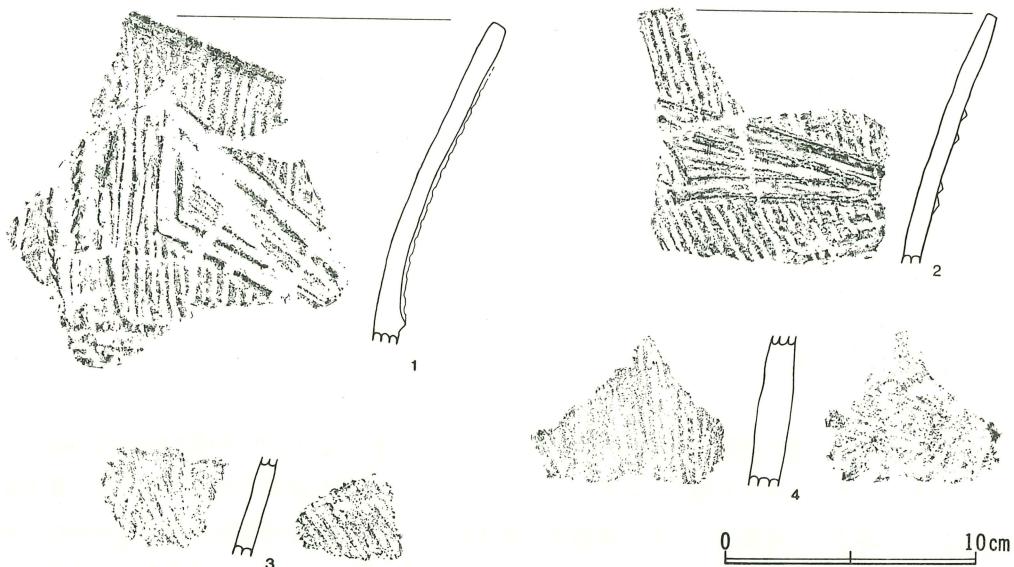
太い沈線により文様が構成される土器である。1 はやや丸みをおびた角頭状の口縁部破片であり、口縁直下に 2 本の平行沈線文を巡らしている。2 は 4 本の平行沈線文が深くしっかり施文されている。3 は斜走する沈線文に山形の沈線文が施されている。胎土は多量の砂粒を含み砂質であるが、焼成が良く堅い。器厚は 8～12mm と厚い。色調は 1 が赤褐色、2・3 は茶褐色を呈する。

##### b (第92図—4～12)

細い沈線文で文様が構成される土器である。すべて胴部破片であり、何条もの一本づつ引かれた平行沈線文で構成されている。4 は横位、5 は斜位に引かれているが、他は組み合わせて引かれ文様化している。12 は器厚 10mm とやや厚手の胴下半部破片で、やや趣を異にするが、縦位の沈線文間に横位の沈線文を浅く雑に施文している。胎土には多量の細かな砂粒が含まれるが、器面を丁寧に整形しているものが多い。焼成は良好で堅い。8・9 が赤褐色、10 が黒褐色、他は茶褐色である。



第90図 2号集石



第91図 2号集石出土遺物拓影

c (第92図—13~19)

太い沈線文と細い沈線文を組み合わせて文様を構成する土器である。太沈線文と細沈線文の組み合わせには、多くのバラエティーがある。13は角頭状の口縁部片であるが、斜位の太沈線文と横位の細沈線文、14は横位の太沈線文と格子状の細沈線文、他は細沈線文を太沈線文で囲む様な文様構成である。胎土は細砂粒を多量に含み、やや器面が荒れている。焼成は良好で堅い。13・14・16が黒褐色、17が赤褐色他は褐色を呈する。

d (第92図—20~24)

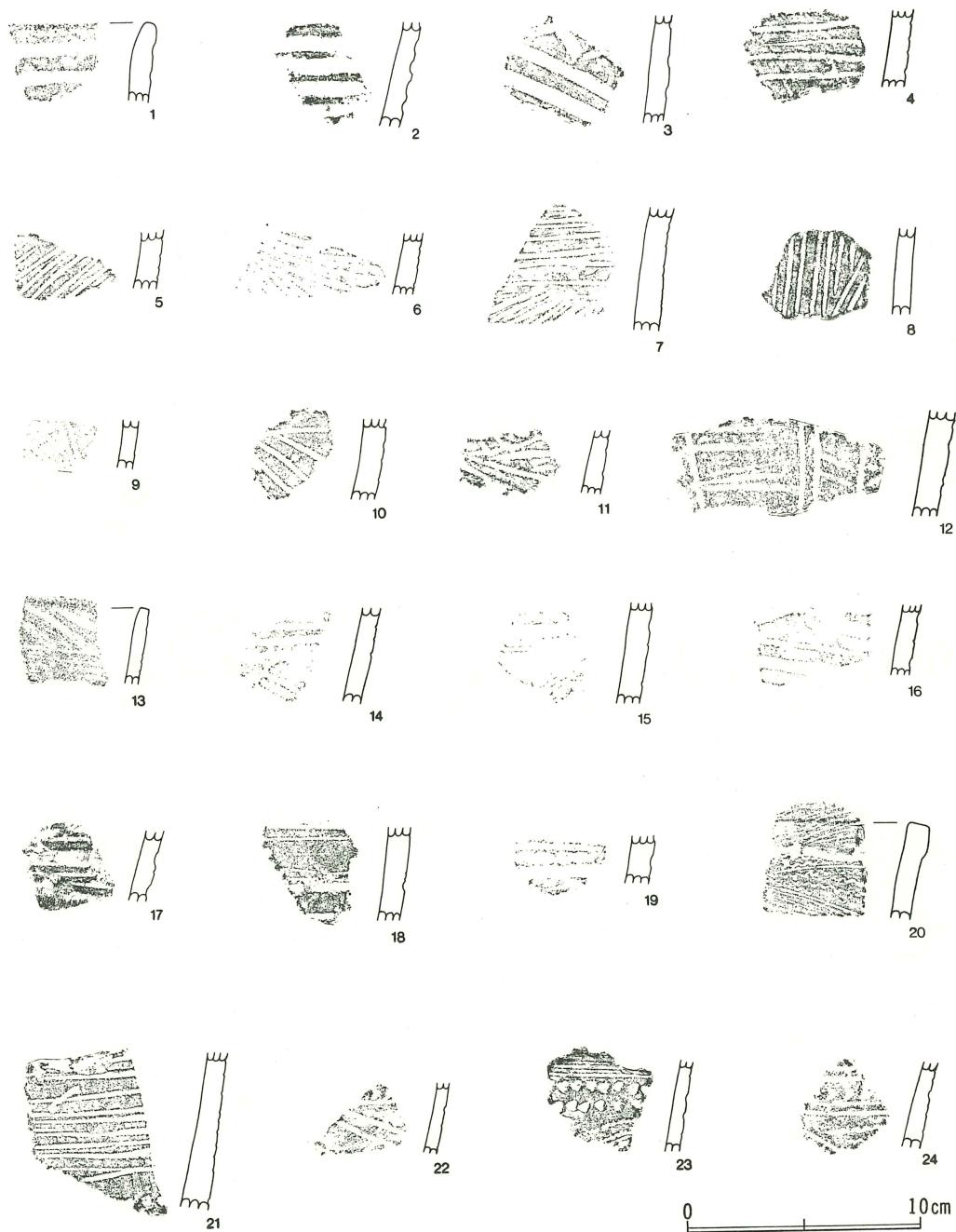
沈線文と貝殻腹縁文や刺突文で構成される土器である。20は角頭状のやや肥厚する口縁部破片であるが、斜位の細沈線文の区画内に貝殻腹縁文を丁寧に施文している。胎土は砂粒を含むがきめ細かく器面を丁寧に整形している。焼成良好で堅く黒褐色である。21・22は器厚はかなり異なるが、割に雑な横位の細沈線文の区画内に、棒状工具による小さな刺突文を連続して施文充填している。胎土は砂粒を含み粗い。焼成は良く堅い。褐色を呈する。23・24は細沈線文の区画内に、貝殻腹縁文と刺突文を連続的に施文充填している。23は精選された胎土で、焼成も良く、赤褐色。24は胎土に多量の砂粒を含み、焼成も良好、黄褐色を呈する。本群は田戸下層式に比定される。

第2群土器 (第93図—25~41)

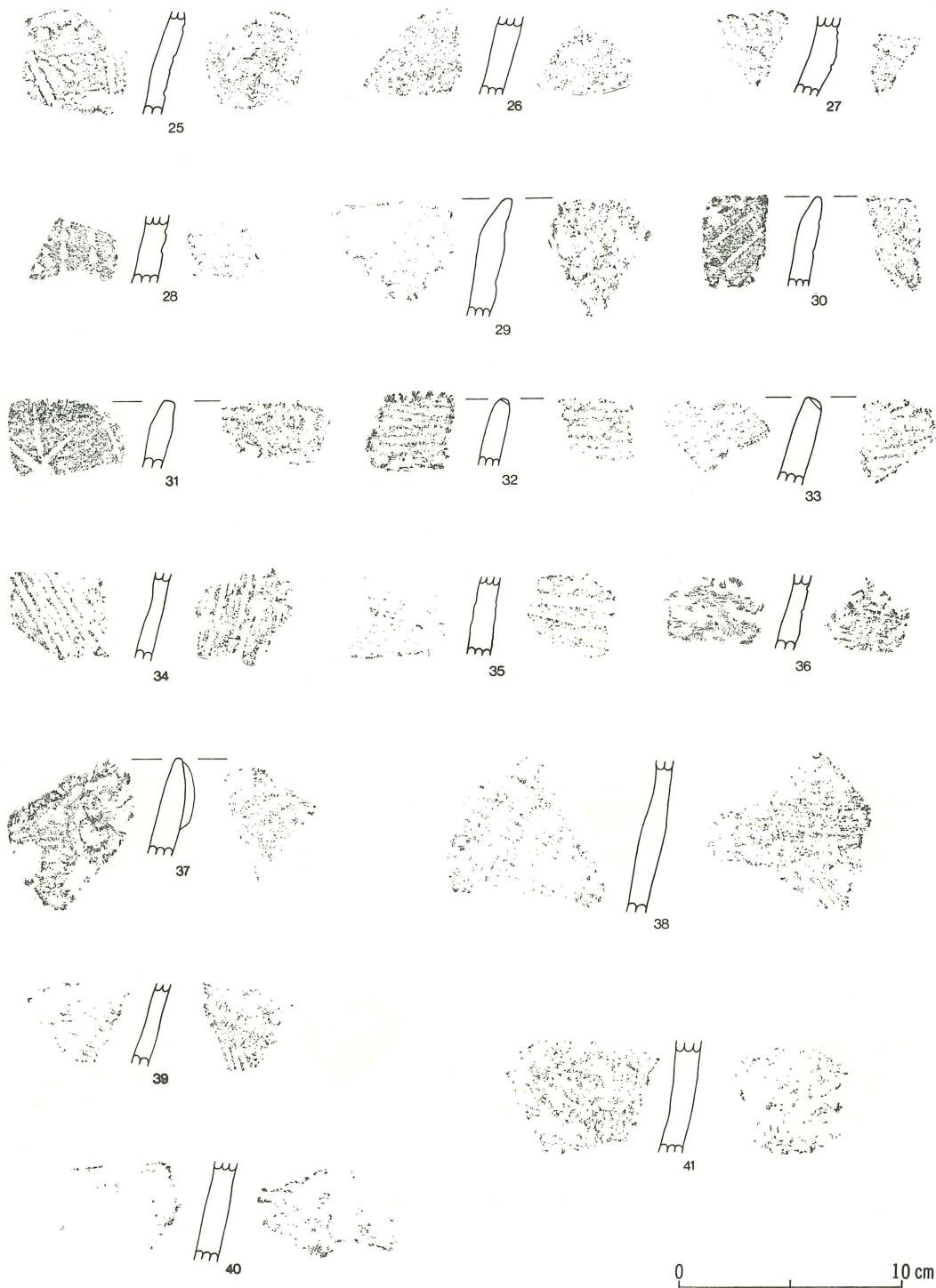
早期後半の条痕文系土器を一括する。文様、胎土における繊維の含有量、条痕の違いにより、I ~ III類に分類する。

I類 (第93図—25~33)

沈線による区画文内に刺突文を充填するものと沈線文・条痕文のみを文様とするものがある。胎土中の繊維含有量は、II・III類より少ないが、砂粒や雲母片を多量に含みザラついている。



第92図 縄文式土器拓影 (1)



第93図 縄文式土器拓影 (2)

a (第93図—25~28)

沈線文により幾何学的な区画文を描き、区画文内を刺突文で充填している。25は区画文の形が不明であるが、粗い円形刺突文が充填されている。他の土器に比べ纖維の含有量がやや多く、焼成も不良で褐色を呈している。26~28は菱形の区画文内を密に竹管の刺突文で充填している。26・27は褐色、28は赤褐色を呈する。

b (第93図—29~31)

沈線文による格子状文を口縁部文様帶にもつ土器である。3片出土しているが、すべて口縁部に刻目をもち、口縁内側が削られた口縁部片である。口縁部文様帶の格子状文は、器面を雑に整形した後細い竹管で、29・30は密に、31は粗く施文しているが、該期に一般的な沈線の交叉部の刺突文は見られない。裏面の整形も雑で凹凸が激しく、わずかに条痕が認められる程度である。色調は、29・30が褐色、31は赤褐色を呈している。

c (第93図—32~35)

条痕文だけの土器である。II・III類に比べ、表裏面とも条痕が深く施文されている。32は口縁部に細かな刻目をもち、口縁内側が削られ、条痕文が表裏面とも横位に施文されている。33も口縁部に大きな刻目をもち、斜位の条痕文が施文されている。34は表面斜位、裏面縦位、35は表裏面とも横位に条痕文が施されている。色調は、32・33黒褐色、34・35赤褐色を呈している。

II類 (第93図—36)

竹管による円形及び半円形の刺突列点文が施文されたものである。表裏面とも擦痕が見られ、胎土には多量の纖維が含有され、焼成も不良で脆弱な土器である。赤褐色を呈する。

III類 (第93図—37~41)

口縁部に隆帯のある土器と浅い条痕文土器とがある。胎土には第II群中最も多量の纖維と白色砂粒を含み脆弱な土器である。

a (第93図—37)

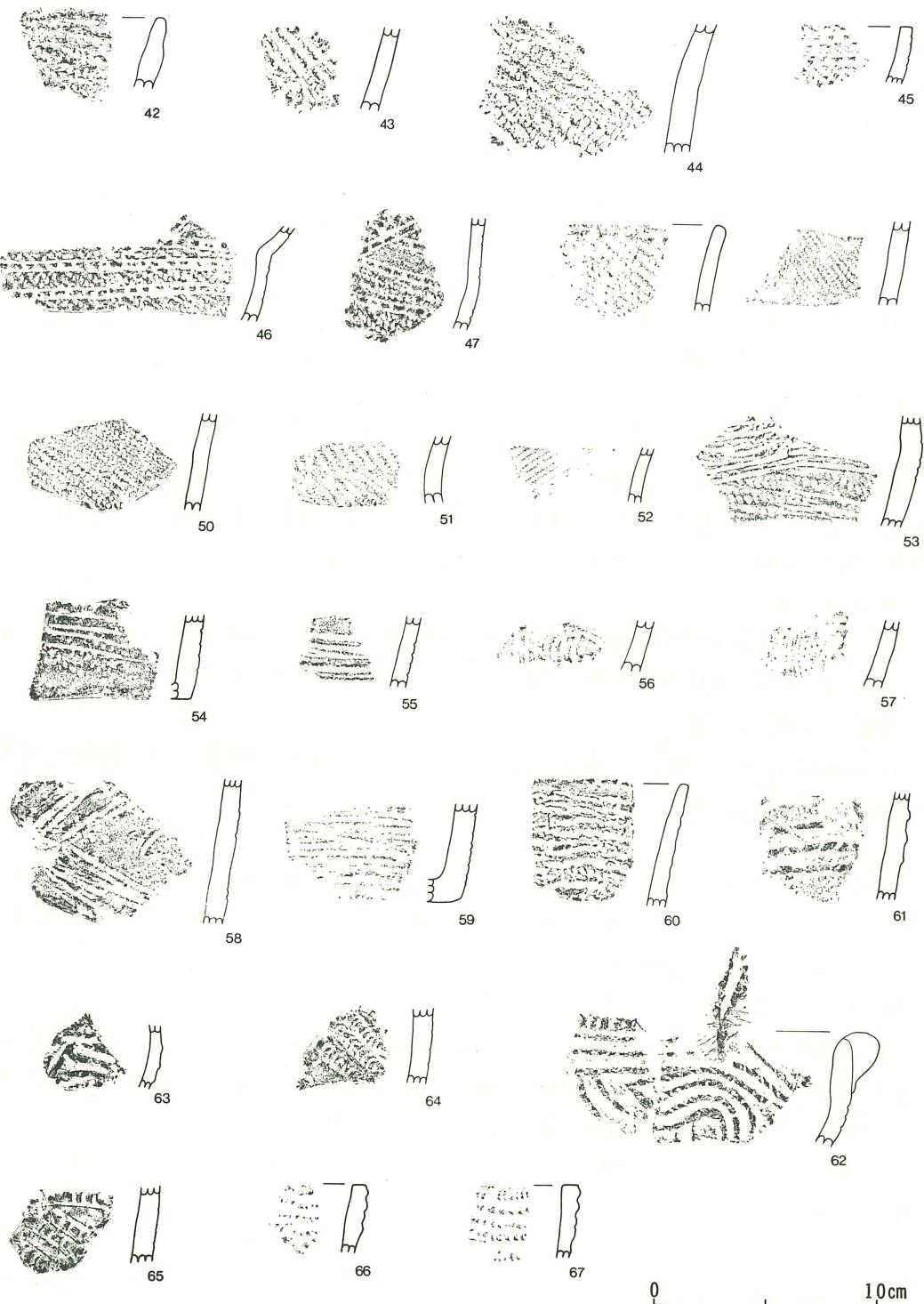
山形を呈する口縁部片である。山形頂部よりその背上に竹管の刺突文が加えられた隆帯が垂下している。口縁にも細かな刻目が施文されている。表裏面とも条痕が観られ、胎土には多量の纖維を含み、焼成不良で脆い。赤褐色を呈する。

b (第93図—38~41)

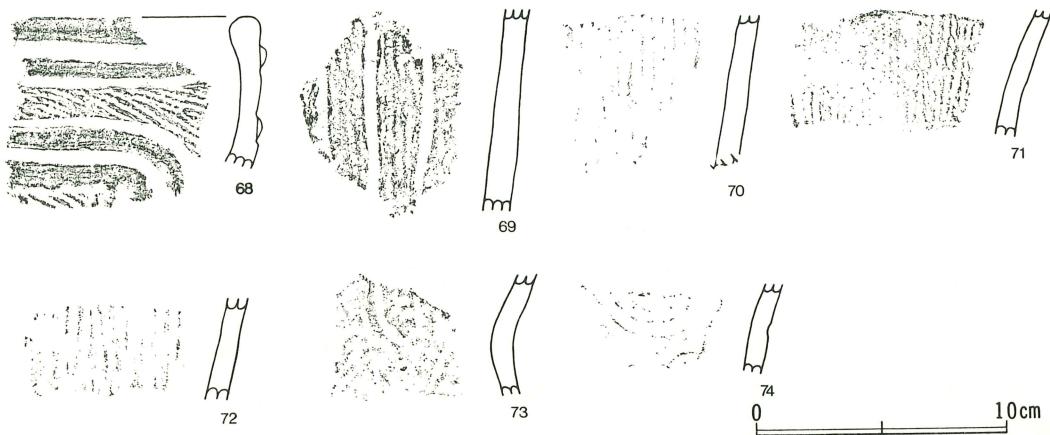
浅い条痕文が施文された土器である。38・39は表裏面とも浅い条痕が施文された土器で、裏面の条痕は特に浅い。40・41は胴下半底部付近の破片であり、表面には浅い条痕が施文され、裏面には僅かな擦痕が観られる。胎土には多量の纖維を含み、焼成も不良で脆弱である。38は褐色、他は赤褐色。I類は鶴ヶ島台式土器、II類は茅山下層式土器、III類は茅山上層式土器に比定される。

第3群土器 (第94図—42~44)

前期の黒浜式土器に比定される土器である。すべて胎土には多量の纖維を含み、内面を丁寧に整形している。概して縄文の節が大きく、粘土の柔らかいうちに施文しているようである。42は平縁でわずかに外傾する口縁部片で、口縁直下に狭い無文帶を残し斜縄文が施文されている。43・44は胴部破片で節の大きな複節の斜縄文が施文されている。42・44は焼成不良で脆い。42・43黒褐色、



第94図 繩文式土器拓影 (3)



第95図 縄文土器拓影 (4)

44は赤褐色を呈する。

#### 第4群土器（第94図—45～67）

前期後半の諸磯a式・諸磯b式・十三菩提式に比定される土器である。

##### I類（第94図—45～52）

諸磯a式土器を一括する。爪形文、縄文だけの土器がある

###### a（第94図—45～47）

縄文を地文とし、爪形文を施文する土器である。45はやや内傾する口縁部片で、原体  $R < L$  の単節の縄文を地文としている。口縁に沿って2本の爪形文が施文されている。胎土はきめ細かく、焼成も良好で赤褐色を呈する。46は外反、47は内反する頸部破片であるが、両者とも  $R < L$  の単節縄文を地文とし、幾何学的な文様を描いている。胎土は細かな砂粒を含むが、焼成良好、赤褐色である。

###### b（第94図—48～52）

縄文だけの土器である。a種同様胎土には細かな砂粒を含み、焼成良好で堅い土器である。表裏面とも丁寧な整形がされ、特に裏面は良く磨かれ滑沢である。48は外反する口縁部片で、擦りのあまい  $R < L$  の縄文で口縁より施文されている。49～51は単節の細い  $R < L$  の原体、52は  $L < R$  の縄文である。48が赤褐色、他は褐色を呈する。

##### II類（第94図—53～65）

諸磯b式土器を一括する。平行沈線文、浮線文、爪形文土器がある。

###### a（第94図—53～59）

平行沈線文土器である。地文のあるものと無いものがある。53・54は地文に単節の  $R < L$  の縄文が粗く施文されている。53は弧線状を描き、54は横位に施されている。胎土は細かな砂粒を多量に含みザラつく。焼成は良好で堅く、褐色を呈している。55～59は地文に縄文をもたない。56・57は同一個体であるが、渦巻状文を描き、58は菱形区画文を描いている。胎土は小砂利を多量に含みザラつき、表裏面とも整形は雑である。褐色を呈している。

###### b（第94図—60～63）

浮線文の土器である。すべて地文に縄文が施文されている。60は口縁がやや外反する口縁部片で竹管の押し引きにより雑な浮線文を描いている。62はキャリパー状の口縁部で頂部に沈線が施文された把手をもつ。口縁部には刻目が施され、沈刻をもつ浮線文で渦巻状文が描かれている。胎土はb種同様小砂利を含みザラつく。焼成良好で、63が赤褐色、他は褐色を呈する。

c (第94図-64・65)

爪形文の土器である。平行沈線文と爪形文が組み合わされ、64は弧線状に、65は直線的に施文されている。胎土はきめ細かく、焼成も良い。64は赤褐色、65は茶褐色を呈する。

III類 (第94図-66・67)

十三菩提式土器である。波状口縁片であり、口縁下に4条の結節浮線文が横走している。胎土は砂粒を多量に含みザラつくが、焼成は良好で褐色を呈している。

第5群土器 (第95図-68~74)

中期後半の加曽利E式土器に比定される土器である。

a (第95図-68~72)

撚糸文を地文とし、口縁部に渦巻文をもつキャリパー形の深鉢である。胎土には小砂利を多量に含みザラついている。焼成も不良で脆弱なものが多い。68はゆるく内反する口縁部片で、2本の隆帯で渦巻文が描かれている。69は3条の沈線文の懸垂文が見られる。

b (第95図-73~74)

地文に縄文をもち、沈線文で文様区画を行い、区画内を磨消す深鉢である。地文の縄文は $R < \frac{L}{L}$ の原体で継位回転である。沈線の幅は狭く、曲線的な文様が描かれている。胎土には、多量の小砂利を含むが、焼成良好で堅い土器である。褐色を呈している。

a類は加曽利E I式、b類は加曽利E III式に比定される。

以上のように桜山窯跡群からは、早期から中期に及ぶ縄文式土器が出土しているが、資料的に非常に貧弱なものである。2号集石出土の少量の野島式土器を除いて、他はすべて遺構外から混在して出土したもので、器形のわかる土器も無く、一括資料として扱えるものも無い。早期の土器は、田戸下層式と鶴ヶ島台式、茅山下層式土器が主体を占めている。田戸下層式は施文状態も良く、精選された胎土で焼成も良く堅緻で特徴的なものである。鶴ヶ島式、茅山下層式土器は、該期の遺跡で一般的なあり方の様に、有文土器が少なく、表裏面とも条痕文及び擦痕文を施した土器が多い。前期は黒浜式、諸磯a式・b式、十三菩提式土器が出土しているが、諸磯b式の浮線文土器が主体を占めている。わずか2片ではあるが、資料数の少ない十三菩提式土器が比企丘陵では初めて確認されている。

(今井 宏)

参考文献

- 青木義修・他「鶴巣遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書第6集 浦和市教育委員会 1978  
岡本勇「神奈川県史 資料編20 考古資料」神奈川県 1979  
岡本勇「横須賀市吉井城山第1貝塚」 横須賀市博物館研究報告人文科学第6号 横須賀市博物館 1962  
小野真一「常陸伏見」 伏見遺跡調査会 1979  
宮崎朝雄・他「甘粕山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集 埼玉県教育委員会 1980